

坂井市埋蔵文化財発掘調査報告書

丸岡城跡

2021

坂井市教育委員会

序 文

丸岡城は独立丘陵に本丸を置いて内堀、外堀を配した平山城です。天正4(1576)年に柴田勝豊の築城を端緒として、丸岡藩として独立したのちに全体が整ったとされています。独立式望楼型天守は全国に十二ヵ所残る現存天守の一つであり、近年実施した総合調査によつて寛永期に整備されたものが現存していることが明らかになりました。一方で、城郭や城下町は明治以降の市街化に伴つて、内堀はすべて埋め立てられ、往時の景観はほとんど失われてしまいました。特に、昭和23年に発生した福井地震の影響は大きく、文献等の貴重な資料が消失しただけでなく、城下町の姿も大きく変わってしまいました。

これまで、丸岡城跡の範囲で発掘調査がされた記録はなく、遺跡としての丸岡城については、ほとんど何もわかっていないような状態でした。ところが、近年実施した発掘調査によって、様々な新事実が明らかになりました。

本書は、平成21年から令和元年までに実施した発掘調査の成果を取りまとめたものです。江戸時代の丸岡城の姿だけでなく、それ以前の姿を知る手がかりも得ることができ、大きな成果であると考えています。今後更なる調査研究によって丸岡城の文化財的価値がさらに高まること、そしてこれらの成果が丸岡城を中心としたまちづくりに活かされることを願っております。

最後に、発掘調査や整理作業等にあたつて多大なご協力とご配慮をいただきました関係者、関係機関をはじめとする皆様に、心よりお礼申し上げます。

2021年3月

坂井市教育委員会
教育長 川元 利夫

例 言

1. 本書は坂井市丸岡町遺跡地に所在する丸岡城跡(1993年3月福井県教育委員会刊行 福井県遺跡地図平成4年度・遺跡番号13062)において平成21年から令和元年にかけて実施した発掘調査及び石垣分布調査の報告書である。
2. 各年度の調査の概要、調査担当者は以下のとおりである。調査事由等は本書第1章で記述している。

平成21年度 堤徹也・清水邦彦(当時)
平成22年度 堤徹也
平成23年度 堤徹也
平成24年度 堤徹也
平成25年度 青山航(当時)
平成26年度 青山航(当時)・堤徹也
平成27年度 青山航(当時)・鈴間智子(当時)
平成28年度 堤徹也
平成29年度 堤徹也
平成30年度 堤徹也
令和元年度 堤徹也

3. 発掘調査、整理作業は坂井市教育委員会が実施し、城山の地形測量は平成26年度に日本海航測株式会社に委託した。
4. 本書の執筆は主に堤が行い、一部で青山が作成した記録を堤が再編集している。
5. 出土遺物の実測は堤、中田、小林が行い、松永、五島がトレースした。
6. 本書掲載の写真は、遺構については担当者が撮影し、遺物については堤が撮影した。
7. 本書掲載の遺構測量図は調査担当者が作成し、堤、松永、五島がこれをトレースした。
8. 発掘調査に当たっては以下の方々の参加があった。(五十音順・敬称略)

発掘調査

赤羽根 雅之、石津 登清、伊藤 功二、伊藤 正則、内田 龍一、小幡 俊治、
嘉部 清治、河本 卓三、木村 博至、国京 美智子、小林 幸雄、齊藤 淳一、
齋藤 恵里、境谷 雄二、梅岡 徳治、志田 恵子、清水 清志、清水 利和、
白崎 晴海、白橋 恵美子、高木 辰夫、瀧川 保郎、竹内 美嘉代、鶴見 正美、
中島 裕美、中山 君子、中山 廣、奈須田 豊秋、南部 又男、西川 勇、
萩原 喜代子、濱中 順子、半田 さおり、東 葉子、平田 とも江、福田 孝太郎、
藤田 三郎、堀田 宗男、水上 良子

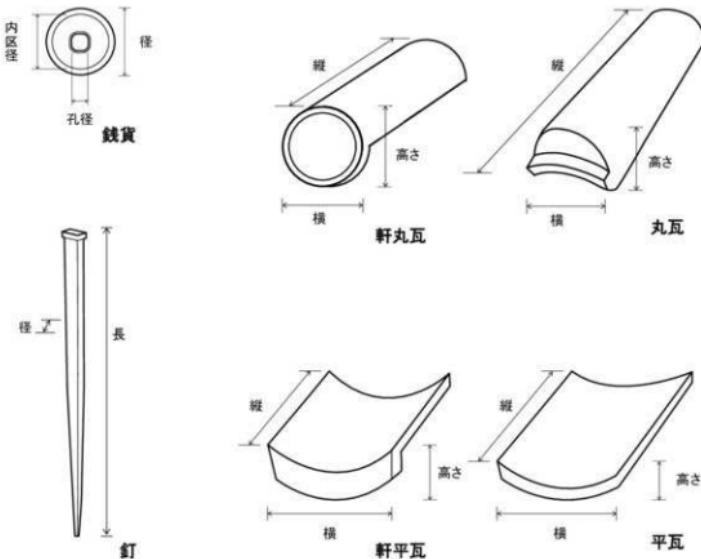
整理作業

国京 美智子、五島 一恵、小林 美土里、志田 恵子、末山 トミ子、竹内 美嘉代
虎田 輝代子、中嶋 裕美、中田 那々子、半田 さおり、松永 勝代

9. 発掘調査及び本書の執筆するにあたって、以下の諸氏に指導を賜った。(敬称略)
赤澤徳明、阿部来、河村健史、中井均、吉澤康暢、御嶽貞義、国京克巳、仁科章

凡 例

1. 本遺跡は、近世以降の丸岡城跡を主体とするが、近代以降の整備工事等によって擾乱を受けており、広範囲で近代以降の遺物が混在していた。本書では近代以前を主として報告する。
2. 遺構番号は各年度と通し番号を組み合わせているが、調査時の担当者が付した番号を優先したものもある。
3. 本書で使用した座標は国土包含座標系第IV系に基づくものであり、方位は座標北を基本とする。
4. 採図は、計測単位をメートル法で表し、遺構図などの標高は海拔高度で示した。
5. 採図の縮尺は、採図ごとに記した。
6. 遺構図における断面の位置や立面等の見通し位置は、その両端を「—」で図中に示した。
7. 断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 新版「標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修に拠る。
8. 遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器・金属器・錢貨は $1/4$ 、石製品・石瓦は $1/10$ を基本とし、特殊品それぞれ個別にスケールと縮尺を記した。
9. 遺物観察表の計測値は、法量の項目をセンチ単位で表記し、欠損があるものは現存長を()で表記した。なお、特殊な事例については以下の模式図のとおりである。



目 次

第1章 調査の概要	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	4
第2章 立地と環境	
第1節 周辺遺跡の立地	5
第2節 丸岡城の概要	8
(1) 丸岡城跡の概要と来歴	8
(2) 城郭・丸岡城の現状と近代以降の改変	9
第3章 各年度の調査	
第1節 発掘調査	13
(1) 平成 21 年度の調査	13
(2) 平成 22 年度の調査	16
(3) 平成 23 年度の調査	19
(4) 平成 24 年度の調査	26
(5) 平成 25 年度の調査	29
(6) 平成 26 年度の調査	31
(7) 平成 27 年度の調査	40
(8) 平成 28 年度の調査	44
(9) 平成 29 年度の調査	50
(10) 平成 30 年度の調査	55
(11) 令和元年度の調査	62
第2節 丸岡城跡城山の石垣分布調査	67
第4章 遺物	
(1) 土器・陶磁器	84
(2) 金属製品・銭貨	87
(3) 石製品	88
1. 石瓦	88
2. 石製品	95
(4) その他の出土遺物	97
第5章 総括	101

挿図目次

第1図 地質分類図	1	第37図 H30-1 実測図	58・59
第2図 調査トレンド配置図	2・3	第38図 H30-S 実測図	60・61
第3図 周辺遺跡分布図	6	第39図 R1-1 実測図	64
第4図 正保期絵図トレース図	8	第40図 R1-S1 実測図	65
第5図 天保期絵図トレース図	8	第41図 R1-S2 実測図	66
第6図 昭和23年福井地震直後の航空写真 (国土地理院・米軍撮影)	9	第42図 現況石積整理図	69
第7図 明治5年丸岡城古写真	9	第43図 石垣分布図	70
第8図 明治19年丸岡城古写真	9	第44図 土器・陶磁器	85
第9図 陸軍省城絵図のうち、丸岡城郭図 (富原文庫所蔵)	10	第45図 土器・陶磁器	86
第10図 昭和15年頃撮影 入口自然石階段	10	第46図 土器・陶磁器	87
第11図 昭和15年頃撮影 北からの写真	10	第47図 金属製品・銭貨	87
第12図 丸岡城下町復元図及び 城山石垣想定図	12	第48図 石製品	88
第13図 平成21年度調査トレンド配置図	14	第49図 石製品	89
第14図 H21-1、H21-2 土壘断面図	15	第50図 石製品	90
第15図 H22 実測図	17	第51図 石製品	91
第16図 H22 石垣実測図	18	第52図 石製品	92
第17図 平成23年度調査トレンド配置図	21	第53図 石製品	93
第18図 H23-1 実測図	22・23	第54図 石製品	94
第19図 H23-2 実測図	24	第55図 石製品	95
第20図 H23-3 実測図	25	第56図 石製品	96
第21図 平成24年度調査トレンド配置図	26	第57図 その他の出土遺物	97
第22図 H24-1 実測図	27	第58図 「正保城絵図のうち、越前国丸岡城之絵図 (国立公文書館蔵)」	101
第23図 H24-2 実測図	28	第59図 越前国坂井郡丸岡城之絵図 (『霞城之影』掲載)	102
第24図 平成25年度調査トレンド配置図	29	第60図 丸岡城略図(「円陵略」)	102
第25図 H25-1,25-2 実測図	30	第61図 昭和15年頃撮影天守台南面	102
第26図 正保期の絵図及びH26 調査地配置図	33	第62図 本丸調査地遺構配置図	105
第27図 H26 実測図	34・35	第63図 天守台南側遺構配置図	106
第28図 H26 実測図	36・37	付図1 丸岡城跡平面図 No.1	108・109
第29図 H26 実測図	38・39	付図2 丸岡城跡平面図 No.2	110・111
第30図 H27 実測図	42・43	付図3 丸岡城跡平面図 No.3	112・113
第31図 H28 実測図	46・47	付図4 丸岡城跡平面図 No.4	114・115
第32図 H28 石積遺構実測図	48	付図5 丸岡城跡平面図 No.5	116・117
第33図 H28 遺構実測図	49	付図6 丸岡城跡平面図 No.6	118・119
第34図 H29-1 実測図	52・53		
第35図 H29-2 実測図	54		
第36図 H30-N 実測図	57		

写真図版目次

図版第1 遺構

- (1) H21-1 トレンチ石仏及び裏込め検出状況 121
- (2) H21-1 トレンチ完掘 121
- (3) H21-2 トレンチ完掘 121
- (4) H21-1 出土石仏 121

図版第2 遺構

- (1) H22 完掘状況南から 122
- (2) H22 検出石垣北側 122
- (3) H22 検出石垣南側 122
- (4) H22 北壁土層断面 122

図版第3 遺構

- (1) H23-1A トレンチ完掘東から 123
- (2) H23-1A トレンチ完掘西から 123
- (3) H23-1B トレンチ完掘北から 123
- (4) H23-1B トレンチ完掘南から 123

図版第4 遺構

- (1) H23-2 完掘北から 124
- (2) H23-2 土層堆積状況 124
- (3) H23-3 完掘状況前景 124
- (4) H23-3 完掘状況南から 124

図版第5 遺構

- (1) H24-1 完掘状況東から 125
- (2) H24-1 完掘状況南から 125
- (3) H24-2 上層石瓦敷き詰め状況南から 125
- (4) H24-2 完掘状況南から 125

図版第6 遺構

- (1) H25-2 完掘状況西から 126
- (2) H25-1 完掘状況西から 126
- (3) H25-1 堆積状況 126
- (4) H25-1 裏込め 126

図版第7 遺構

- (1) H26 西側前景 127
- (2) H26 西側石垣北西隅部 127
- (3) H26 東側石垣検出状況東から 127
- (4) H26 東側石垣検出状況西から 127

図版第8 遺構

- (1) H26 東側石垣 128
- (2) H26 東側石垣西から 128
- (3) H26 西側拡張区 128
- (4) H26 東側南北拡張区土層堆積状況 128

図版第9 遺構

- (1) H27 東側 東から 129
- (2) H27 西側 西から 129
- (3) H27 北側 南から 129
- (4) H27 南側 北から 129

図版第10 遺構

- (1) H28 調査地全景北から 130
- (2) H28 調査地全景南から 130
- (3) H28 石積遺構西から 130
- (4) H28 南西角越前焼甕出土状況 130

図版第11 遺構

- (1) H29 調査地全景北から 131
- (2) H29 調査地北側 西から 131
- (3) H29 調査地南側 北西から 131
- (4) H29-2 全景 131

図版第12 遺構

- (1) H30-1 完掘状況西から 132
- (2) H30-1 完掘状況東から 132
- (3) H30-S 完掘状況南から 132
- (4) H30-S 完掘状況北から 132

図版第13 遺構

- (1) H30-S 石列 南から 133
- (2) H30-S 石列 北から 133
- (3) H30-N 完掘状況南から 133
- (4) H30-N 完掘状況北から 133

図版第14 遺構

- (1) RI-1 完掘状況全景 東から 134
- (2) RI-1 完掘状況全景 南から 134
- (3) RI-1 完掘状況全景 西から 134
- (4) RI-S1 完掘状況 北から 134

図版第 15 遺構

- (1) R1-S1 完掘状況 135
- (2) R1-S2 完掘状況 北から 135
- (3) R1-S2 完掘状況 南から 135
- (4) R1-S2 石垣 西から 135

図版第 16 参考写真

- (1) 竹原写真石垣転用石材 136
- (2) 竹原写真南面(部分) 136
- (3) 昭和 23 年福井地震後天守台 136
- (4) 昭和 23 年福井地震後天守台 136

図版第 17 遺物 137

図版第 18 遺物 138

図版第 19 遺物 139

図版第 20 遺物 140

図版第 21 遺物 141

図版第 22 遺物 142

図版第 23 遺物 143

表 目 次

- 第 1 表 遺跡一覧 7
- 第 2 表 遺物観察表(陶磁器・土師器) 98
- 第 3 表 遺物観察表(金属器) 99
- 第 4 表 遺物観察表(錢貨) 99
- 第 5 表 遺物観察表(石瓦・石製品) 100

第1章 調査の概要

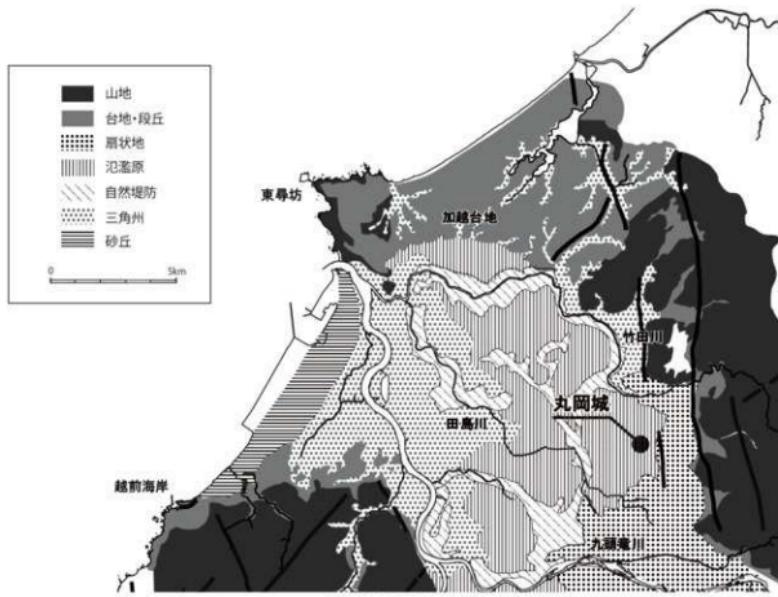
1. 調査に至る経緯

丸岡城は福井平野の北、狭義の坂井平野東部に立地する。「城山」と呼称している独立丘陵を中心に曲輪を配置した平山城である。天正4(1576)年、越前一向一揆を平定した織田信長が、重臣の柴田勝家に越前支配を命じ、勝家の甥・柴田勝豊に築城させたのが始まりとされる。はじめ、一向一揆の拠点となって焼き討ちされた豊原に城を構えたが、わずか1年足らずの間に現在地に移ったとされる。その後勝豊は長浜城に移り、丸岡城は青山修理亮、安井左近、今村盛次らを経て慶長18(1613)年本多成重が入城した。成重入城当時は福井藩の付け城であったが、福井藩2代藩主・松平忠直の改易に伴って独立し、丸岡藩主の居城となった。その後本多家もお家騒動により改易され、延岡藩から糸魚川を経て有馬氏が入封し、明治維新を迎える。

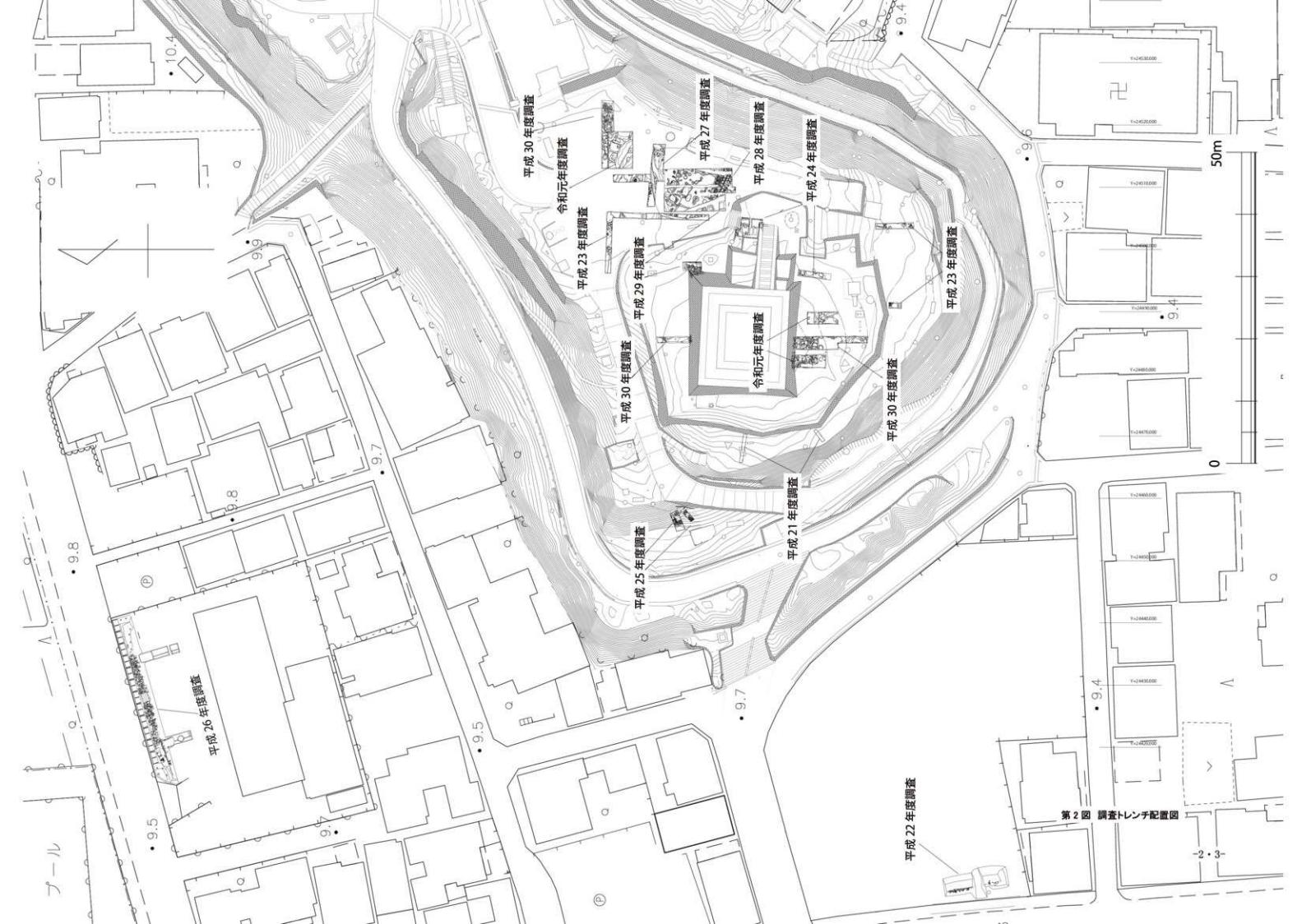
明治以降、建物や敷地、立ち木に至るまで売却され、天守を除いて除却された。堀は徐々に埋め立てられ、現在は外堀の一部が水路としてその名残が残っているほか、内堀の形状は道路町割に引き継がれているが面影は残っていない。

唯一解体を免れた天守は、昭和9年に重要文化財（指定当時は旧法に基づき国宝）に指定されたが、敷地については史跡の指定はされていない。

これまで、丸岡城跡に関する発掘調査の記録は皆無である。しかし、近年防災設備改修や施設設計計画に伴って試掘調査を実施した。また、平成25年度からは、城郭の残り具合を確認すること目的として、令和元年まで遺跡の内容確認調査を実施した。



第1図 地質分類図



第2図 調査トレーン配置図

2. 調査の経過

平成 21 年度以降、様々な理由により丸岡城跡を調査する機会を得た。調査期間と調査理由、調査場所を整理すると以下のとおりである。なお、調査場所の詳細は別項に譲る。

丸岡城発掘調査 概要

年度	調査期間	調査理由	調査場所
平成 21	2009.12.8 ~ 2009.12.25	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う試掘調査	天守西側イスバシリ
平成 22	2011.1.12 ~ 2011.1.20	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う試掘調査	本丸西側内堀西端
平成 23	2012.2.6 ~ 2012.3.2	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う試掘調査	本丸北東、南側イスバシリ
平成 24	2013.1.28 ~ 2.22	丸岡城天守消防設備改修工事に伴う試掘調査	天守台南側、天守階段下
平成 25	2014.2.24 ~ 2014.3.5	本丸城山の石垣残存状況確認調査 石垣内容確認試掘調査	本丸西側斜面
平成 26	2014.6.17 ~ 2014.8.8	城山地形測量 建物建設計画に伴う試掘調査	二の丸・隠居曲輪石垣
平成 27	2015.6.15 ~ 2015.7.28	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡
平成 28	2016.10.17 ~ 2016.12.2	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡
平成 29	2017.10.23 ~ 2017.12.4	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡、天守台北東角
平成 30	2018.10.29 ~ 2018.12.10	遺跡内容確認調査	本丸・伝建物跡、天守台北及び南
令和元	2019.7.1 ~ 2019.7.30	遺跡内容確認調査	本丸、天守台南側

主に工事に先立って、遺構の有無を確認する調査が主体である。しかし、平成 27 年度以降は遺跡の内容確認を目的として調査を継続している。また、平成 28 年度以降は丸岡城天守の調査研究事業の開始に伴い、丸岡城調査研究委員会の指導を受けながら調査を実施した。

調査は、平成 21 年度、22 年度、23 年度、24 年度、25 年度の石垣内容確認試掘調査、26 年度地形測量、27 年度、28 年度、29 年度、30 年度、令和元年度においては国宝重要文化財等保存整備費補助金(埋蔵文化財緊急調査事業)(～平成 29 年度)・国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金(埋蔵文化財緊急調査事業)(平成 30 年度～)の交付を受けて実施した。

第2章 立地と環境

第1節 周辺遺跡の立地

〔縄文時代〕

丸岡町域では縄文時代の遺跡の発掘調査記録は多くない。丸岡城の南東、微高地上に東向野遺跡がある。縄文時代中期の集落跡で、打製石斧や磨製石斧、石皿、石錘のほか、古府式土器、大杉谷土器が出土し、ほぼ完形品の重弧紋土器が出土した。遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出されている。近年実施したグラウンド整備工事に伴う試掘調査でも、縄文土器が採取されている。

〔弥生時代〕

弥生時代には自然堤防の後背湿地を利用して米作りが始まったと考えられ、弥生時代後期になると市域においても遺跡数が増加し、集落の形成が進んだことが伺える。女形谷遺跡では弥生時代後期の集落跡が確認されている。

〔古墳時代〕

牛ヶ島の集落よりも北陸自動車道よりの水田に、かつて小野山古墳が存在した。この古墳から出土した笏谷石製舟形石棺は現在丸岡城の城山で展示されている。身の長さ2.12m、蓋の長さ2.09mで蓋の外面に網目紋が確認できる。小野山古墳が古墳時代前期後葉の有力首長墓であったことをうかがわせる。なお、近年行われた調査によって、身の内側に赤色顔料が塗布されていたことが分かった。

前期中葉には大型前方後円墳が築造される。古墳時代後期に入ると、東の山中に群集墳が築かれるようになる。令和元年度に花園大学が実施した分布調査によると、加越山地の裾部、平野に向かって伸びた尾根に古墳群が形成される。集落はより平野部に展開していたと考えられ、高柳や下安田遺跡などで集落跡が見つかっている。

〔古代〕

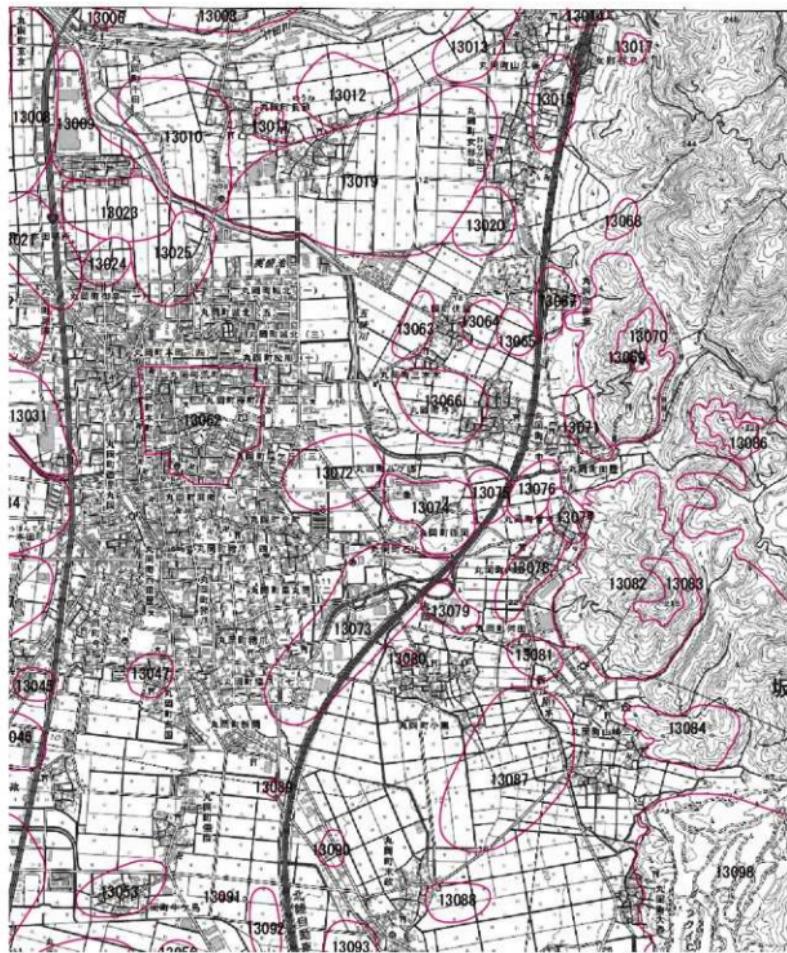
箱屋谷遺跡は古代の瓦窯跡である。川上地区のさらに奥、ムクロジダニと呼ばれる場所では古代の瓦が出土したと伝わるが、現物は行方不明である。

〔中世〕

長畝館跡は齋藤実盛の居館跡と比定され、集落内には齋藤実盛を祀った実盛堂がある。長畝集落から南に600m離れた場所には実盛池と呼ばれる池がある。

北国街道に近い長崎称念寺には、新田義貞の墓所がある。ここはかつて長崎城があったとされ、寺の敷地を囲むように堀があったことが地籍図から読み取ることができる。近年実施した試掘調査では、道路敷きの下層から堀の境界と思われる層が確認できている。長崎城より北には朝倉家家臣・黒坂備中館跡がある。現在は集落と工場、県道によって分断されている。

東の山中には豊原寺があった。一向一揆の拠点となつたため、織田信長によって焼き払われたが、江戸時代以降復興を果たした。豊原を守るように西の尾根上には山城があつたとされる。豊原三ヶ古城と呼ばれる三上山城、西宮城、雨乞山城である。丸岡城の前身は柴田勝豊が豊原に築いた城であるとされる。近年実施した丸岡城天守の総合調査では、天守台の石材が豊原から持ち込まれている可能性が指摘された。勝豊は、城下町を形成するうえで職人や寺院を移転させたとされる。



第3図 周辺遺跡分布図

第1表 遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
13093	重要・坪江遺跡	古墳～平安	散布地
13010	長崎西遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地
13011	長崎聖跡	中世	城跡
13012	長崎北船遺跡	縄文・弥生・古墳	散布地
13013	山久保中之船遺跡	弥生・古墳	散布地
13014	山久保神明道路	縄文・奈良～平安	散布地
13015	女形谷池ノ上遺跡	古墳	散布地
13017	むね谷古墳群	古墳	古墳
13019	女形谷・長崎遺跡	弥生・古墳	散布地
13020	女形谷二ヶ岳遺跡	弥生・古墳・平安・中世	散布地
13023	福井河原遺跡	弥生・古墳	散布地
13024	福所大坪遺跡	奈良・平安	散布地
13025	手田鍾田遺跡	弥生・古墳	散布地
13047	寅田遺跡	奈良・平安	散布地
13051	牛ヶ島遺跡	不詳	散布地
13056	高瀬原尾遺跡	奈良・平安	散布地
13062	丸岡城跡	近世	散布地
13063	三木本遺跡	古墳・平安	散布地
13064	伏見寺中遺跡	平安～中世	散布地
13065	平賀合田遺跡	奈良・平安	散布地
13066	与河遺跡	古墳・奈良・平安	散布地
13067	半坂遺跡	中世・平安	散布地
13068	女形谷古墳群	古墳	古墳
13069	非坂古墳群	古墳	古墳
13070	田原寺坂城跡	中世	城跡
13071	田原遺跡	中世	散布地
13072	八ヶ瀬遺跡	不詳	散布地
13073	里丸屋遺跡	古墳	散布地
13074	福岡遺跡	散布地	散布地
13075	吉毛野跡	散布地	散布地
13076	大木口遺跡	平安・中世	散布地
13077	曾々木谷田遺跡	平安・中世	散布地
13078	曾々木・内田遺跡	平安・中世・近世	散布地
13079	東向野遺跡	縄文	散布地
13080	西光寺城跡	中世	城跡
13081	河田大觀遺跡	縄文・中世	集落跡
13082	曾々木古墳群	古墳	古墳
13083	酒匂川城跡	中世	城跡
13084	山崎二ヶ城跡	古墳・中世	古墳・城跡
13085	豊原寺跡	平安・中世	寺院跡
13086	三上山城跡	中世	城跡
13087	山崎二ヶ・小黒遺跡	古墳・平安・中世・近世	散布地
13088	末政前田遺跡	古墳・奈良・平安	散布地
13089	新開広永遺跡	奈良・平安	散布地
13090	末政向道跡	奈良・平安	散布地
13091	御山古墳	古墳	古墳
13092	高瀬中郡道路	弥生・古墳・奈良・平安・近世	散布地
13093	高倉中郡道路	古墳	散布地
13097	野中山王道跡	弥生・古墳	散布地
13098	丸岡古墳群	古墳	古墳

第2節 丸岡城跡の概要

(1) 丸岡城の概要と来歴

丸岡城は天正4(1576)年に柴田勝豊が現在地に城郭を築いたのが始まりとされている。柴田氏時代から今村氏時代の絵図は残されていないため、城郭がどのようなものであったか、判然としていない。

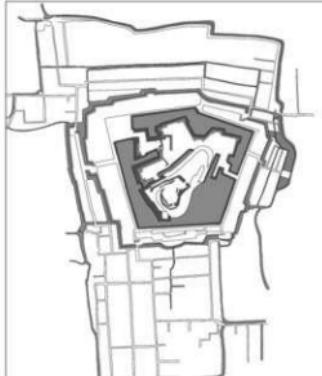
『古今類聚越前国誌』によると、丸岡城は「初め居館の類なりしが、重能に至て城池全く成る」とある。本多重能は丸岡藩2代藩主で在任期間は正保2(1645)年から慶安4(1651)年のわずか6年間である。「城池」というのは堀のことを探るのか、それとも縄張りや町割りまでを含むのかは解釈が分かれるところであろうが、城郭が完成したのは17世紀中頃と考えられ、整備の着手はそれ以前、本多成重のころから進められていたと考えるのが妥当だろう。成重は慶長18(1613)年に福井藩の付家老として、丸岡城主となった。その後福井藩主松平忠直の改易に伴う福井藩の分割によって、寛永元(1624)年に丸岡藩が独立。成重は初代藩主となった。丸岡城は江戸期以前の天守が現存する12城の一つで、近年実施された天守の総合調査の結果から、現在の天守は寛永期に整備されたものであると結論付けられた(註1)。丸岡藩の成立を契機として、現在の天守が整備されたと考えることは理解に難くない。建築当時の天守は屋根は柿葺きで3階の廻高欄は腰屋根、懸魚や破風は漆塗りで金箔押しの鰐を載せるという現在と異なる外観を持ち、床下には穴倉ともならない地下空間を持っていた。その後屋根が石瓦葺きになり、3階は廻高欄となって床下空間は埋められて柱が掘立柱になるという改造を受けている。なお、現在の天守台は昭和23年の福井地震によって崩壊し、修復過程で積み直されたものである。昭和15~17年の解体修理に際して撮影された写真を見ると、天守台の石垣は矢穴技法を用いず、比較的加工の少ない石を野面積みに積んでいることから、倒壊前の石垣は慶長期まで遡ることも考えられ、寛永期以前に天守があった可能性が否定されたわけではない(註2)。

一方、城郭については、正保期に描かれた「正保城絵図のうち、越前国丸岡城之絵図(国立公文書館蔵)」と天保7(1836)年に描かれた「円陵輿地略図」とを比較しても、縄張りに大きな変化は認められない(第4図、第5図)。本多氏の整備した縄張りが有馬氏の時代を通じて幕末まで維持されていたと考えて良い。

しかし、明治維新に伴って廢城令が出され、土地と建物は悉く競売にかけられた。明治9年以降内堀の西側から徐々に堀の埋め立てが始まり、大正10年頃ま



第4図 正保期絵図トレース図



第5図 天保期絵図トレース図

では西側半分が埋まり、さらに昭和初期までには内堀すべてが埋め立てられていたようである(1993 玉置ほか)。昭和 23 年に発生した福井地震の直後に、米軍が撮影した航空写真がある(第 6 図)。天守は倒壊した状態で、間髪入れずに襲った洪水被害によって、城山東側が冠水していることがわかる。この航空写真によると、北東の東の丸の堀の形状に曲輪の名残を見ることができる。また、隠居曲輪にあたる場所は、維新後に丸岡県が置かれた際の県庁があり、のちにも公的機関が立地したことから耕作地としての開発が免れ、現在も一段高い地割が残っている。

このように、城郭としての丸岡城縄張りの痕跡は読み取ることが可能である。

(2) 城郭・丸岡城の現状と近代以降の変改

前述のように、丸岡城の城郭は田畠の開墾と学校等の公共用地、公園として利用が進められてきた。現在は一帯が震ヶ城公園として都市公園となっている。震ヶ城公園が公園台帳に記載されたのは昭和 30 年で、これ以降現在の利用形態が固定した。公園としての利用はそれ以前から始まっており、城山に桜を植樹する動きは昭和初期まで遡る。

ここで、近代以降に城郭・丸岡城跡の変改について、整理しておきたい。

明治を迎えて、明治 2 年に丸岡藩は一旦丸岡県となって陸軍用地となっていたが、同 5 年の廢城令によって払い下げ入札が行われた。建物と土地は全て売却され、解体が困難であった天守のみが解体を免れ現存している。

明治 5 年に南西から撮影された写真では、天守のそばに杉と思われる高木が 1 本あるだけで他に構造物は見当たらない(第 7 図)。絵図では西側腰曲輪に土蔵が描かれているが、写真には納まっていない。写真が払い下げによる建物等の撤去後に撮影されたためであろう。石垣は天守台の下に 3 段の石垣があったことが確認できる。明治 19 年に北西から撮影された写真(第 8 図)では、城山北側に天守台の下に 2 段の石垣と、北側の隠居曲輪が堀より一段高い位置にあることが確認できる。絵図では隅櫓が描かれている場所に、写真では旧裁判所と思われる平屋建て瓦葺建物が建てられている。撮影点で城山上の豊原門、石橋門は売却移転されているが、埋門の石垣は写っていない。明治 5 年に作成された「陸軍省城絵図」(第 9 図)では、埋門のあたりが空白であることから、あるいは寛政期の地震で倒壊し、そのまま放置された可能性もある。事実、丸岡城払い下げ台帳に埋門の文字は見当たらない。『正保城絵図』のうち、越前丸岡城之絵図では石垣の上に櫓上の構造物が描かれている。江戸時代を通じては何らかの構造物があつたと思われるが、明治当初の段階で埋門は無かった可能性が考



第 6 図 昭和 23 年福井地震直後の航空写真
(国土地理院 昭和 23 年 米軍撮影)



第 7 図 明治 5 年丸岡城古写真



第 8 図 明治 19 年丸岡城古写真

えられる。「陸軍省城絵図」によると明治初期に天守周辺に建物は見られない。隠居曲輪と城山の間は空堀があつたが、写真では確認することはできない。ただ、写真手前から隠居曲輪に向かって道がつけられ、石垣の外にさらに石垣が積まれて埋められているなど、この頃には堀の埋め立てが始まっていたことが伺える(第8図)。

明治34年に天守は丸岡町に寄附され、公会堂として活用されることになった。この時に天守入口の階段は直線に改造されたとされる。明治12年から、天守の管理をするために羅漢山長昌庵(現羅漢山長昌寺)の僧が天守内にいて時報の太鼓を打っていたが、明治34年以降は本丸に堂宇を構えて時報は鐘を突くようになった。長昌庵の建物規模は詳らかではない。明治42年に刊行された『霞城の影』に掲載されている写真では、天守南西に鐘楼が写っている。北側斜面は草に覆われているが大規模な改変は見られない。ただ、本丸に石碑のようなものの基礎が写りこんでいる。おそらく忠魂碑であろう。明治45年に南東から撮影された写真では、城山の南西角に鐘楼が確認できる。この時点での城山西側の内堀は水田になっており、石垣は草で覆われているものの城山の形状は改変されていないように見える。

昭和9年に国宝に指定された天守は(国宝保存法による)、昭和15~17年に大規模な解体修理を実施することになった。いくつかの方向から城山を撮影したものがあるが、斜面は木々に覆われていて石垣の存在を確認することは難しい。ただし、天守台については一部解体修理が行われた。その際に天守台入口階段北側の石垣が解体され、中から自然石の階段が確認されたと記録されている(第10図)。天守台は4面ともに撮影されたものが残っており、福井地震以前まで遡るオリジナルの天守台をうかがい知れる貴重な資料である。また、周辺を撮影した写真もいくつか含まれており、これによって周辺がすでに宅地化していたことがわかる(第11図)。また、城山北側に現在まで残る傾斜路がある。江戸期の絵図には見られないことから、明治以降昭和初期までに整備されたことがわかる。この登り道は俗称「おんなざか」と呼ばれ、城山西側に設けられた登り道は俗称「おとこざか」と地元では呼んでいたようである。

昭和23年に福井地震が発生し、天守は倒壊した。城山も同じくダメージを負ったと思われるが、被害状況は明らかではない。天守の修理にあたって、天守台は内部に鉄筋コンクリート製基礎を埋められ、石垣は在来工法ではない工法で積み上げられている。また、松の丸東寄りに直径8m、深さ4mの防火水槽が



第9図 陸軍省城絵図のうち、丸岡城郭図(富原文庫所蔵)



第10図 昭和15年頃撮影 入口自然石階段



第11図 昭和15年頃撮影 北からの写真

埋められた。不明門があつたあたりと推定される。本丸にあつた長昌庵の建物も地震で倒壊し、同じ場所には再建されず、城山下の現在地に移つた。地震直後に米軍が撮影した航空写真によると、斜面部は樹木に覆われており、斜面が崩落している様子は見当たらない。また、本丸には長昌庵のほかに、現在の管理事務所があるあたりに瓦屋根の建物1棟が倒壊している様子がうかがえる。修理工事時に撮影された写真では、天守台はほぼ崩壊し、天守台北西の下段石垣も崩落している様子が写っている。

天守の修復が完了した昭和30年、霞ヶ城公園という名称で都市公園法の適用を受けた都市公園となつた。その後、一般公開を目的とした公園地として、整備がすすめられた。

城山北側の北面から東面にかけて積まれた石積み護岸が施工されている。西面にかけては裾部に護岸工事がされ、住宅地が広がつてゐる。東面中ほどにはつづら折りの階段が設けられた。さらに南に寄ると、裾の護岸と中腹に園路が整備されている。園路より上は約1.2mの擁壁があり、その上に残つた石垣が露頭している。園路は南西側を回つて「おとこざか」付近まで達する。西側の腰曲輪を開削して連絡道路が設けられている。道路は豊原門があつた場所を通つて埋門跡の北側につながる。本丸と松の丸には高低差があり、埋門はこの高低差を利用して作られていたと考えられる。埋門跡の北側には八幡神社が置かれ、南側には管理事務所が建てられた。管理事務所は段差を利用して建てられ、2階部分は本丸とつながつてゐる。

本丸は絵図では「家」「番代所」などの表現が見られ、建物があつたことが伺えるが規模は不明である。現在は砂利敷きとなつており、東の端にお静供養碑とされる多層塔残欠がある。天守台は本丸よりやや高い。天守入口の南側に、イヌバシリに降りる階段がある。両側は石垣が積まれ、門があつたような風情がある。降りてすぐ左手に井戸があるが、これは明治以降に掘削されたもので、城郭に伴うものではない。

小結

以上のように、現在の丸岡城は本多氏が整備した城郭が江戸期を通じて存続し、明治以降大幅な改変を受けて現代に至つてゐる。現状で城郭の痕跡を視認できる部分は限定的である。そこで、絵図や古写真等を参考にして、城下町と現在の市街地を重ね合わせた復元図、および城山の石垣を想定した第12図を作成した。

註1 吉田純一氏は、さらに現天守の建立年代を寛永5年としている。(2020・吉田)

註2 中井均氏は「天守台は少なくとも慶長5年(1600)以前に築かれたとみておかしくない」としている(2019坂井市教委)

参考文献

2020 吉田純一「丸岡城天守の建築年代～天守1階東西中央列「に二」柱の墨書の検討～」

『PUT福井城郭研究所年報・研究記要 2019』

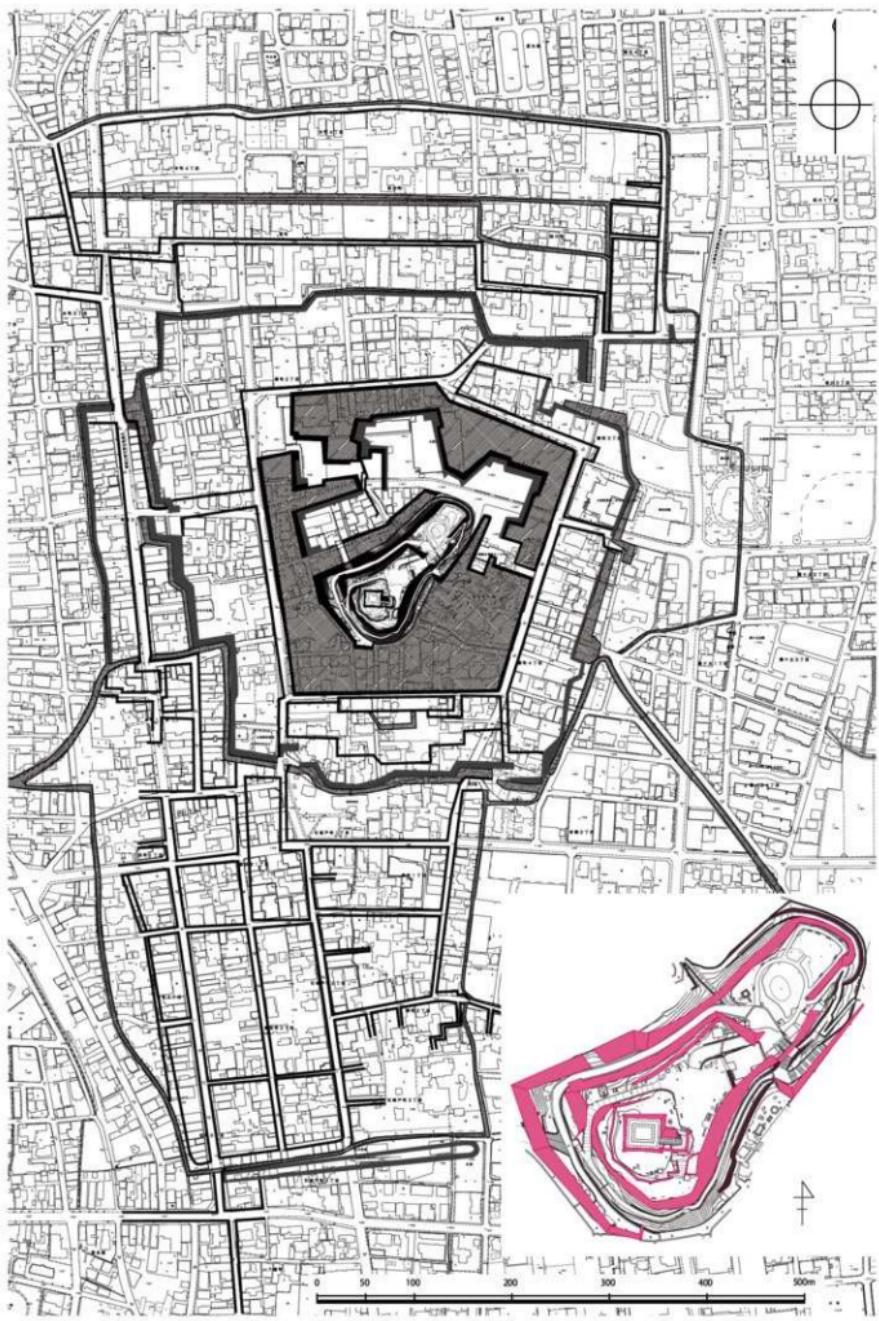
1993 玉置伸悟 長谷川洋 土井睦浩「明治期における丸岡城下町の都市構造の変容」

『日本建築学会北陸支部研究報告集』第36号 1993年7月

2017 富原通晴 / 富原文庫「富原文庫蔵陸軍省城査図 - 明治五年の全国城郭存廃調査記録 -」

2019 坂井市教育委員会「丸岡城天守学術調査報告書」

2020 坂井市教育委員会「丸岡城学術調査資料集 第1集」



第12図 丸岡城下町復元図及び城山石垣想定図

第3章 各年度の調査

第1節 発掘調査

基本層序

本丸周辺

城山の岩盤は凝灰岩である。本丸は岩盤層の上に近代以降砂利を敷いて転圧されている。砂利層の直下が遺構面で、岩盤層が露頭する。岩盤層は黄色を基調とした岩脈と赤を基調とした岩脈がマーブル状に混在している。

明治以降様々な改変が加えられ、昭和に入ってからは公園としての整備がすすめられたため、遺構面も含めて近代以降の改変が多い。また、これまで発掘調査が全く行われていなかったため、遺跡としての情報も皆無である。

このため、今回の調査を通じて、近代以降に施工された砂利層より下層で、I：近代以降に改変された層、II：築城後～江戸期までの層、III：築城以前と推定できる層、IV：地山（岩盤層）に分類できる。

(1) 平成21年度の調査

平成21年度は天守西側、イスバシリでトレント調査を実施した。当時、調査地には笏谷石製石仏が埋まつた状態であり、観光客が蹠くことから撤去の依頼があった。そこで、石仏を移動させるために必要な確認調査と、併せて、近くに既設の放水銃があることから、放水銃の横にトレントを設定して配管深度の確認と遺構面の確認を行うこととした。

< H21-1トレント >

石仏はうつぶせの状態で埋まっている。周辺には円礫や角礫が露頭した状態である。絵図では、イスバシリの斜面側にも石垣が描かれていることから、石垣を構成するものかどうかを確認するために、半裁して層序の確認を行うこととした。

調査の結果、石仏の下は5～10cm大までの円礫・角礫が堆積しており、状況から西側斜面石垣の裏込めである可能性が高い。石仏は舟形後背を持つ如意輪觀音で、頂部に「口(十?)四番」の文字が彫られている。十四番で如意輪觀音は西国三十三所の三井寺の本尊と合致することから、西国三十三所を模したものの1体と考えてよい。城郭存続期間中に整備されたとは考えにくく、長昌庵の入った明治以降に整備されたもの一部であろう。丸岡城は明治以降に長昌庵（現長昌寺）が入って時報の太鼓を打っていた。石仏はこのほかに天守南東のタブノキの根元にも安置されている。調査の過程では、地蔵菩薩の頭部も出土している。

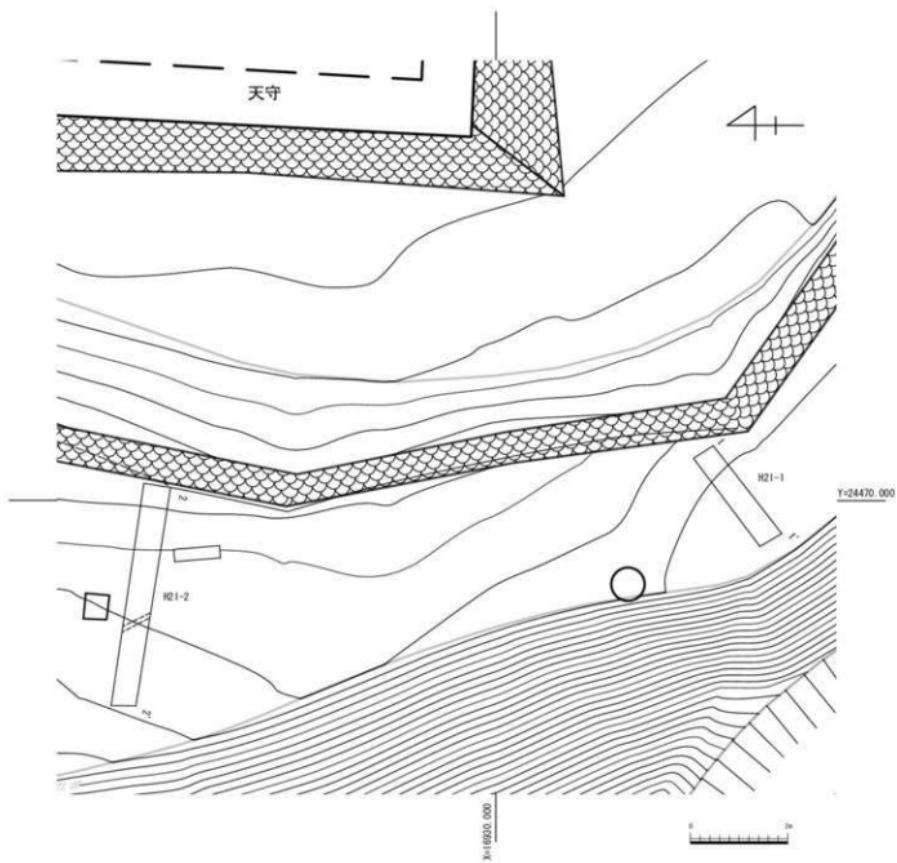
< H21-2トレント >

放水銃周辺は直径60cm程度の石も点在している。トレントは昭和52年に整備された放水銃の横に設定し、堆積状況と配管深度を確認することとした。

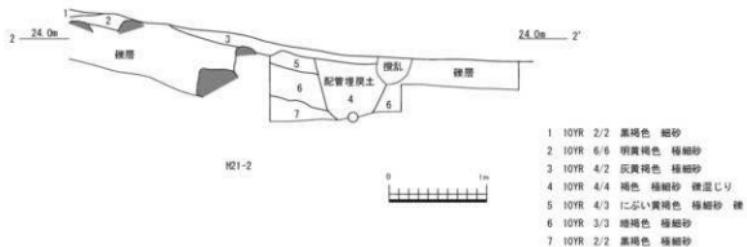
配管はGL-60cm程度の深度で確認できた。堆積状況は暗褐色系の土で、石瓦片と長辺60cmを超える石も含まれる。昭和23年の福井地震で倒壊した際の土と考えてよいだろう。H21-1トレントの土層堆積状況を考えると、西側に礫が詰まつた石垣の裏込めが想定できるが、現状では確認できな

い。H21-1トレンチに比べて標高がやや高く、さらに下層に西側石垣裏込め層が存在する可能性がある。

ただし、この時点の調査では配管位置を確認し、一帯が震災後の盛土層であることが確認でき、施工による毀損は生じないと判断して調査を終えた。



第13図 平成21年度調査トレンチ配置図 (S=1/100)



第14図 H21-1、H21-2 土層断面図 (S=1/50)

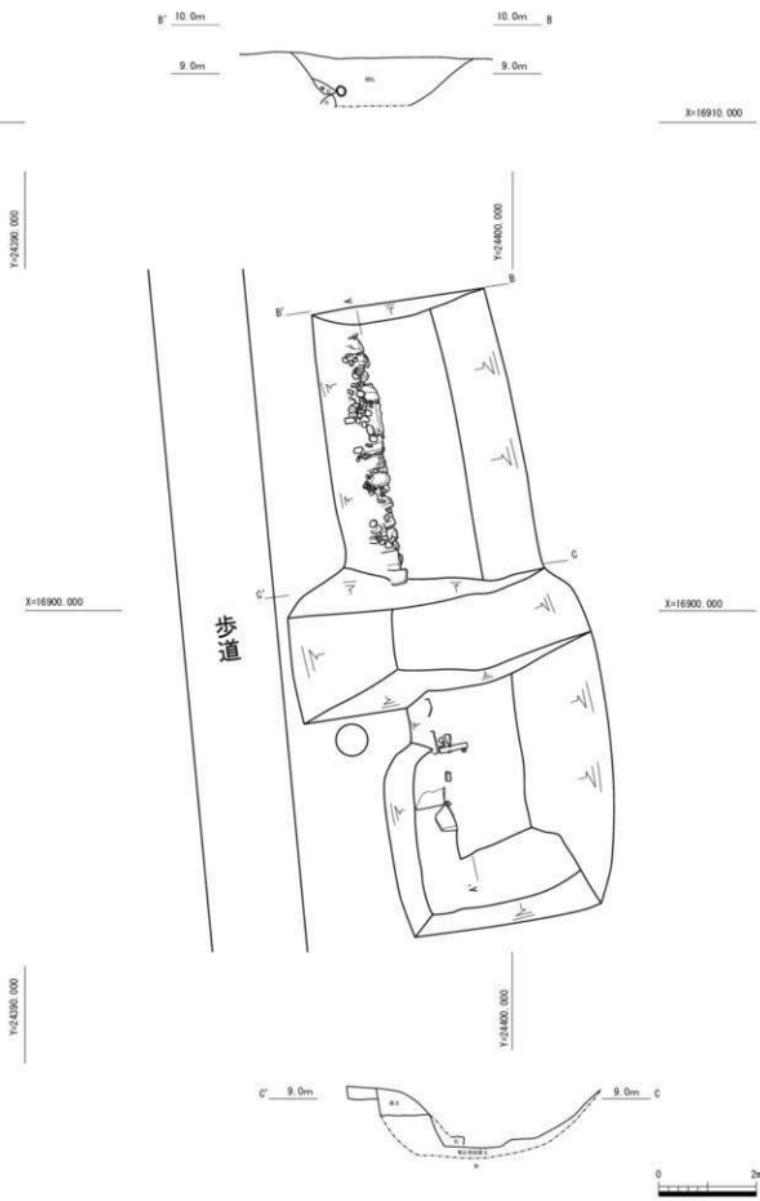
(2) 平成 22 年度の調査

平成 22 年度の調査は、本丸の西側、病院跡地で実施した。敷地は公園及び丸岡城消防設備の防火水槽埋設候補地として、調査を行った。敷地は病院建設にあたって基礎工事が行われ、大規模に改変を受けたことが予想された。調査トレントは敷地の東側で 2 本、西側で 1 本を重機で掘削した。敷地の東側では石垣は確認できず、現代以降の堆積しか確認できなかった。一方西側では一部で石列が確認できたため、一部拡幅して調査を行うこととした。調査は東西 6.5 m、南北 13m、中央付近は試掘調査時に 2.7m 幅を深く掘削した、不整形の調査地である。一部石列の下まで掘り下げたが、下層から遺構は検出できず、青灰色粘土が堆積していた。青灰色粘土層よりも上層は全て明治・大正時代以降の瓦礫が含まれる擾乱層であった。本丸西側は北西区画を公的機関が、西側から南にかけては民間による埋め立てが明治初期から始まつたとされている。

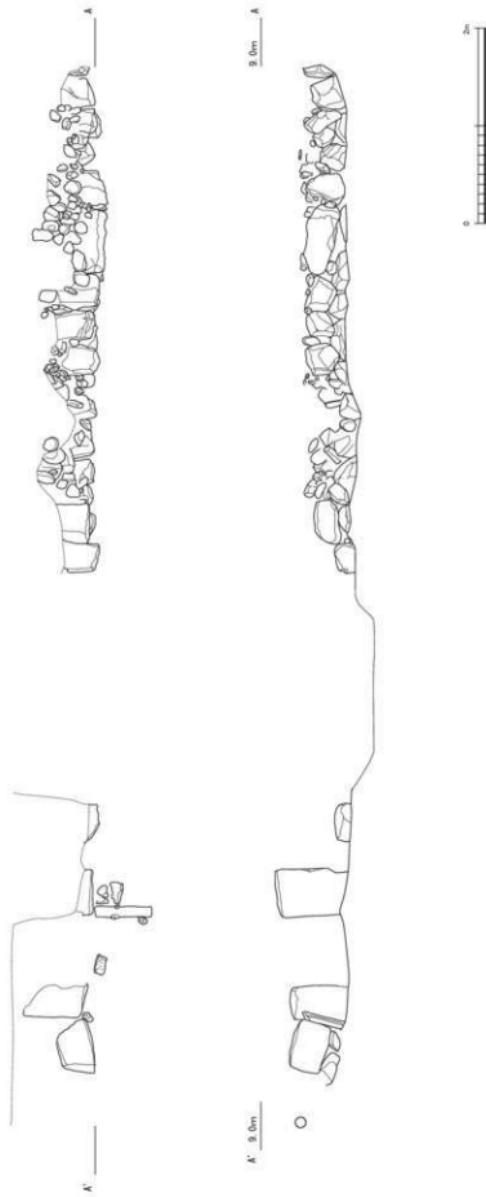
見つかった石列は南北方向で敷地に隣接する県道丸岡勝山線とほぼ平行する。石垣は N10° W でやや西に振る。石列は北側で一部 2 段確認でき、石垣であることが確認できた。石垣の背後は握り拳大程度の川原石が裏込めとして詰まっている。現存する石垣よりも高い位置まで裏込めが残っていることから、本来の石垣はさらに高かったと推定される。石垣は 30 ~ 80 cm 大の石が使われ、小口を正面に積むことを基本としているが、長側を正面に向けたり、小口の尖った方を下に向けたりするなど、やや雑な積み方である。堀の底面よりも下には基底石、丸太地業は確認できない。南側は笏谷石の角柱状切り石で約 70 cm の取水口としている。底面から 50 cm のところで色が変わっており、内堀の水深を知ることができた。取水口は砂利と瓦礫が詰められている。取水口付近に直径 10 cm の丸木杭と横木があり、堰の痕跡と考えられる。取水口の延長線上には外堀があり、暗渠で外堀に排水していたのであろう。なお、丸木には洋釘が刺さっていたことから近代まで使用していたことがわかる。

調査地の標高はおよそ 9.4m で、堀の底面は 8 ~ 8.3m、石垣の底面もほぼ同じレベルである。残っている裏込めの高い場所で 8.9 m 程度であった。

検出された石垣は内堀の外側ラインにあたると考えてよい。取水口や石積みは修繕され、明治以降の手による部分もあると思われるが、裏込めが良好に残っていることからも石垣のラインは江戸期の縄張りを踏襲していると考えてよいだろう。内堀外側の石垣はおよそ 1.2m 程度とそれほど高くなく、堀の水深も深いものではなかつたことがわかつた。



第15図 H22 実測図 (S=1/100)



第16図 H22石垣実測図 (S=1/50)

(3) 平成 23 年度の調査

平成 23 年度においては丸岡城天守消防設備改修工事を控えて、配管埋設予定箇所で試掘調査を実施し、遺構面の深さを確認することとした。

< H23-1 トレンチ >

本丸の西側から登る階段の終点から、天守入口階段下までの逆 L 字にトレンチを設定した。東西方向のトレンチを「H23-1A」、南北方向のトレンチを「H23-1B」とする。本丸の標高は 25.7 ~ 25.9m で、現代以降の公園整備に伴って砂利を敷き詰めている。砂利層は厚いところで 30 cm 程度の砂利層がある。遺構面は砂利層の直下で確認できた。しかし、現代の電気配管等が縦横に走っており、擾乱も多い。

H23-1A は砂利層も薄いが遺構面までが浅い。深くとも GL-40 cm で岩盤層に達する。岩盤は凝灰岩で部分的には風化してもらろい。方形ピットが 2 基、深い方形ピットが 1 基確認できたが、遺物が伴っていないので時期の決定は難しい。遺構面直上にコンクリートが打たれているなど、遺構面まで現代の擾乱が及んでいると考えてよいだろう。西から 4m の地点で直径 50 cm、厚さ 15 cm 程度の川原石を置いている。南北方向に石を並べていると思われ、階段のような近代以降の公園整備の痕跡と思われる。

2301 : 30 × 30+ cm、深さ 20 cm の方形を呈す。南側が配管によって削られている。

2302 : 1 辺 35 cm、深さ 45 cm の方形を呈す。

2303 : 40 cm × 25 cm、深さ 10 cm の深い方形を呈す。軸が W50° N で北西 - 南東方向の長方形を呈す。

H23-1B は北半分で深い落ち込みが確認できたが、下層でも石瓦片が出土しており、丸岡城に伴う遺構と判断することとは難しい。最も深い場所は GL-150 cm を測る。全体として近代以降の擾乱を大きく受けているため、遺構面の残り具合は良好ではない。南側では砂利層の直下で一部に丸い疊を敷いた層が検出されたが、棧瓦片や衣類に使うボタンが混じっていたことから、近代以降の層と判断し掘り下げた。掘り下げたところ、ピット 4 基と石積らしき遺構を確認した。石積は間近までコンクリートが敷かれており、今次調査ではさらに詳細に確認することができなかった。

2304 : 直径 40 cm、深さ 45 cm のピットである。

2305 : 直径 30 cm、深さ 40 cm のピットである。底部の形状が不鮮明で用途は不明である。

2306 : 直径 30 cm、深さ 40 cm のピットである。炭化物が混じり、2305 を切っている。

2307 : 残存径 40 cm のピットである。配管で切られているため詳細は不明である。

< H23-2 トレンチ >

本丸から南に下った部分、イスバシリのような部分の階段下に南北方向のトレンチを設定した。トレンチの南半分で GL-30 cm 付近に安山岩の角礫が層状に敷かれていた。さらに掘り下げ、GL-60 cm で既設の配管があり、遺構面はさらに下層であることを確認した。南側では一段高くなってしまい、GL-100 cm で地山を検出し、北端から 1.5 ~ 2m 付近で石を集積して段が形成されている。地山の疊を集積した状態で、石積とは言い難い。段より南側の遺構面は GL-150 cm で、その上面まで石瓦が混入しており、擾乱を受けている可能性がある。遺構面にはピット 4 基が検出された。

2308 : 40 × 40 cm 以上、深さ 30 cm の方形を呈す。

2309 : 直径 20 cm 以上、深さ 12 cm 以上の不整形を呈す。トレンチにかかる詳細は不明。2311 より後続する遺構。

2310：1辺 60 cm、深さ 40 cmの方形を呈す。赤色地山の風化土と地山礫で埋まっており、土器片と宋銭 3 点が出土している。

2311：直径 30 cm、深さ 10 cmのピットである。2310 より後続する遺構。

この場所に何らかの構造物があった表現がされた絵図は確認できない。よって、少なくとも正保以降様相が大きく変化した形跡は確認できないが、遺構面は標高 22.2 ~ 22.8m 付近で現況よりも 1 m 以上下である。

< H23-3 トレンチ >

H23-2 トレンチよりもさらに西側で遺構面の深さを確認することを目的として、1 × 2 m のトレンチを設定した。北側に 75 cm 離れて石垣がある。トレンチの北側で石の集積が確認できた。H23-2 トレンチの状況とよく似ている。地山面は GL-100 cm で検出した。

H23-2,H23-3 トレンチの調査結果から、丸岡城の遺構面が GL-100 cm 程度と深い位置にあることが確認できた。堆積層からは石瓦が検出されており、福井地震によって崩れた土砂が堆積していると推定される。記録では天守は北西側に崩壊していたとあるが、震災直後の写真を確認すると全体が被害を受けていることが確認できる。

X=16960.000

H23-1

X=16950.000

X=16940.000

X=16930.000

X=16920.000

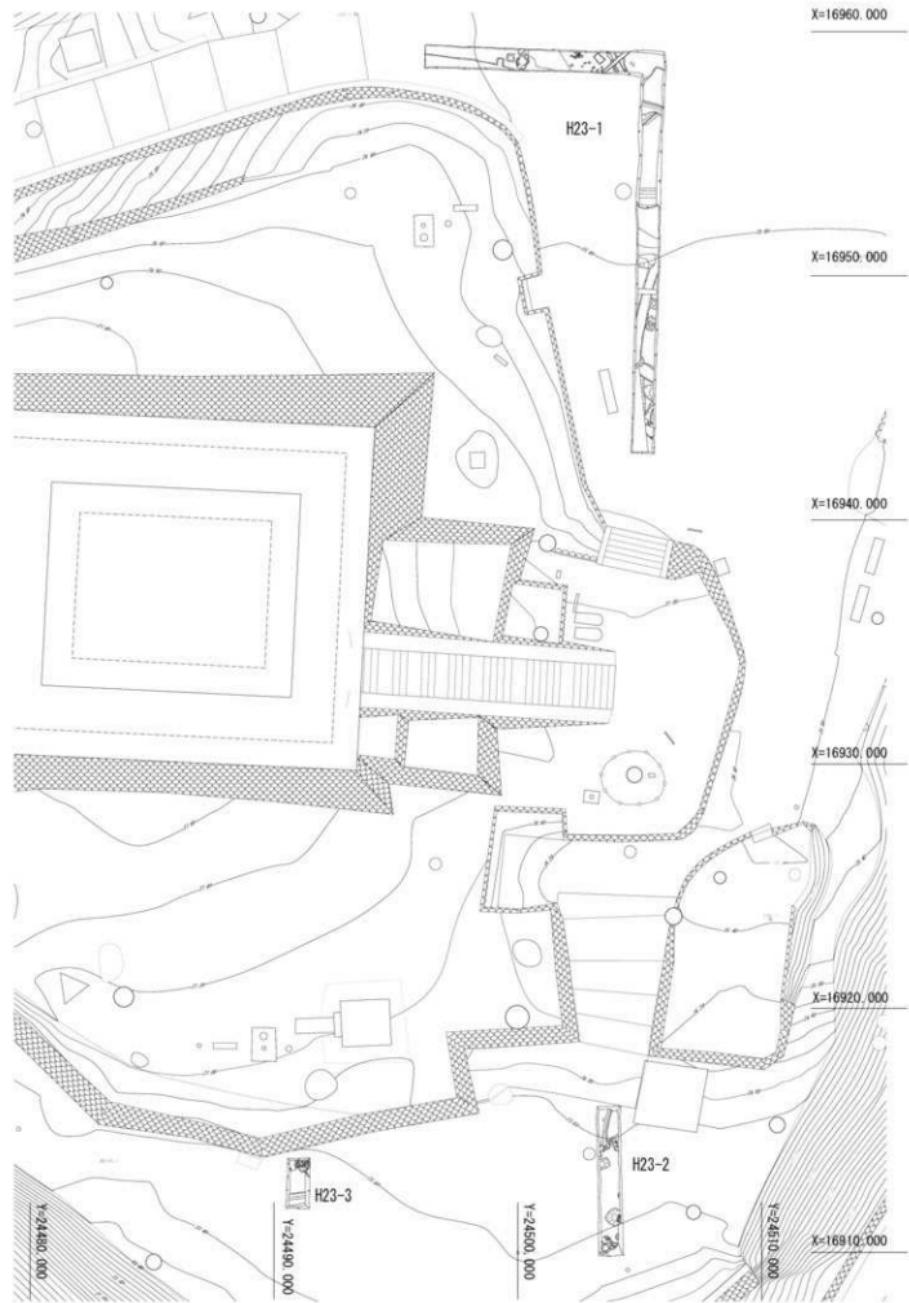
H23-2

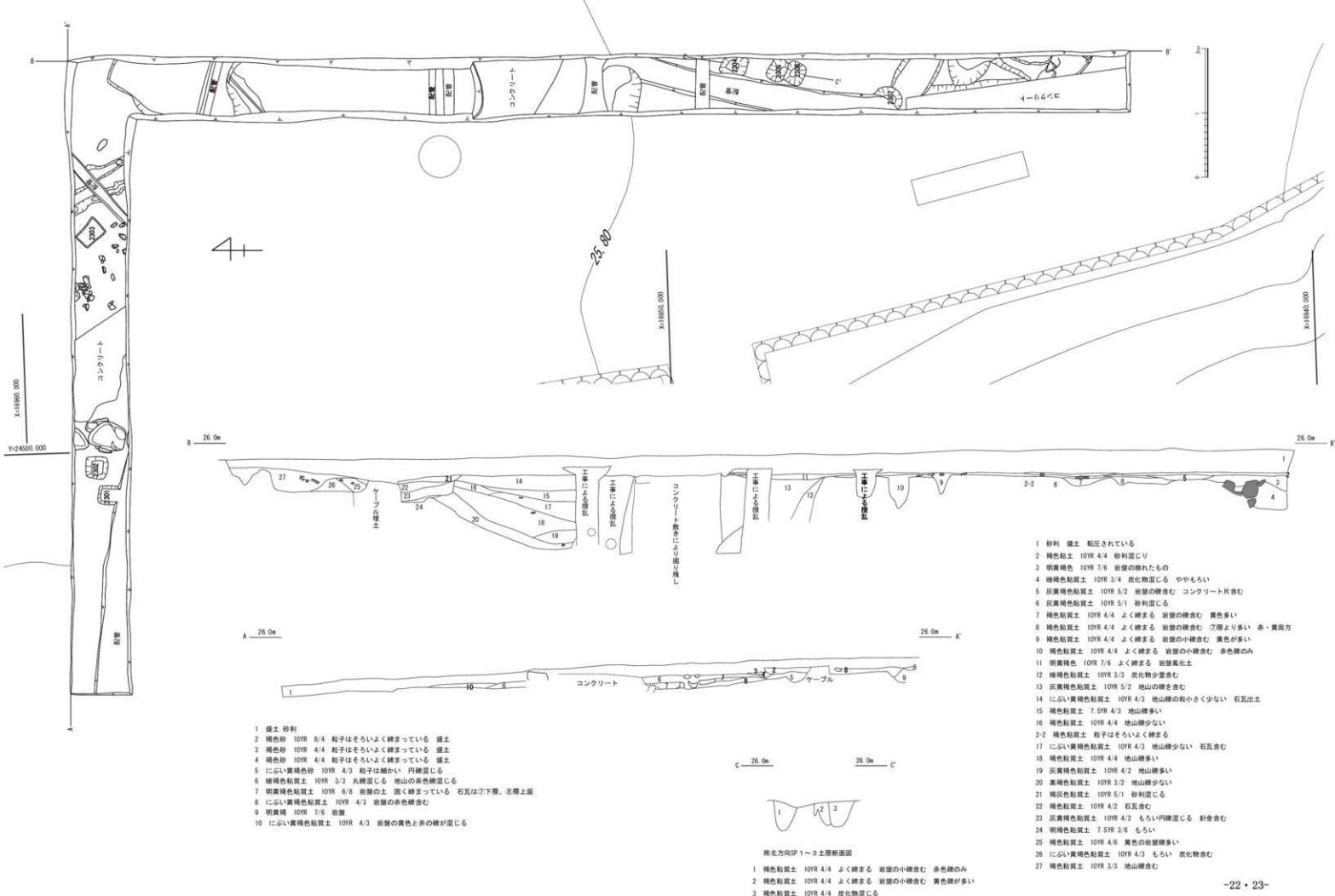
X=16910.000

Y=24500.000

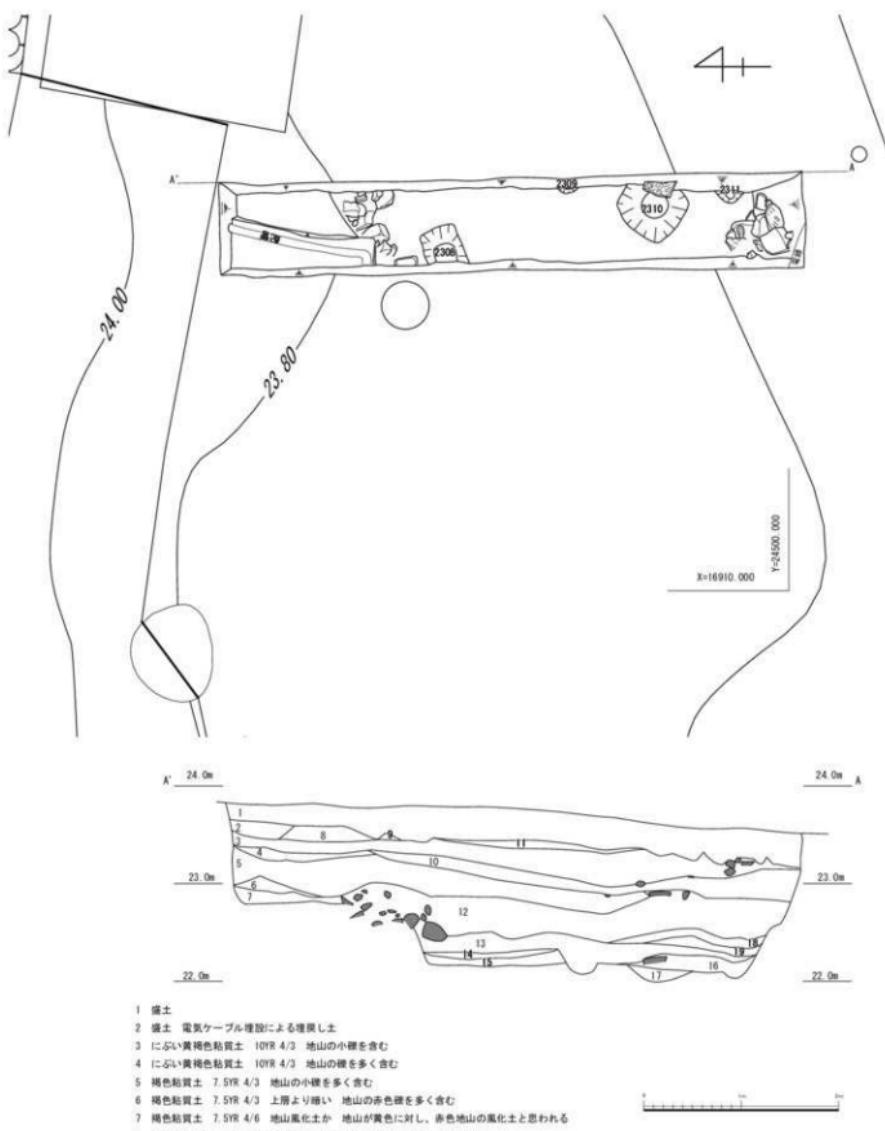
H23-3

Y=24490.000

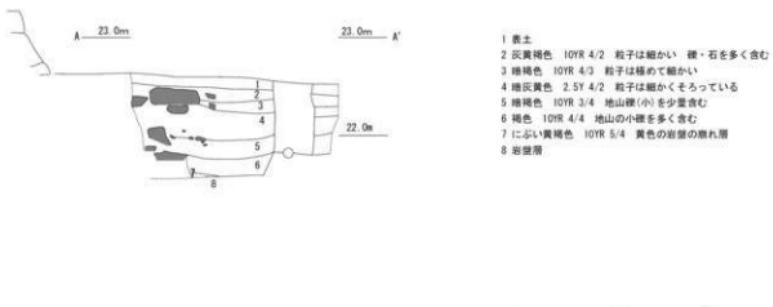
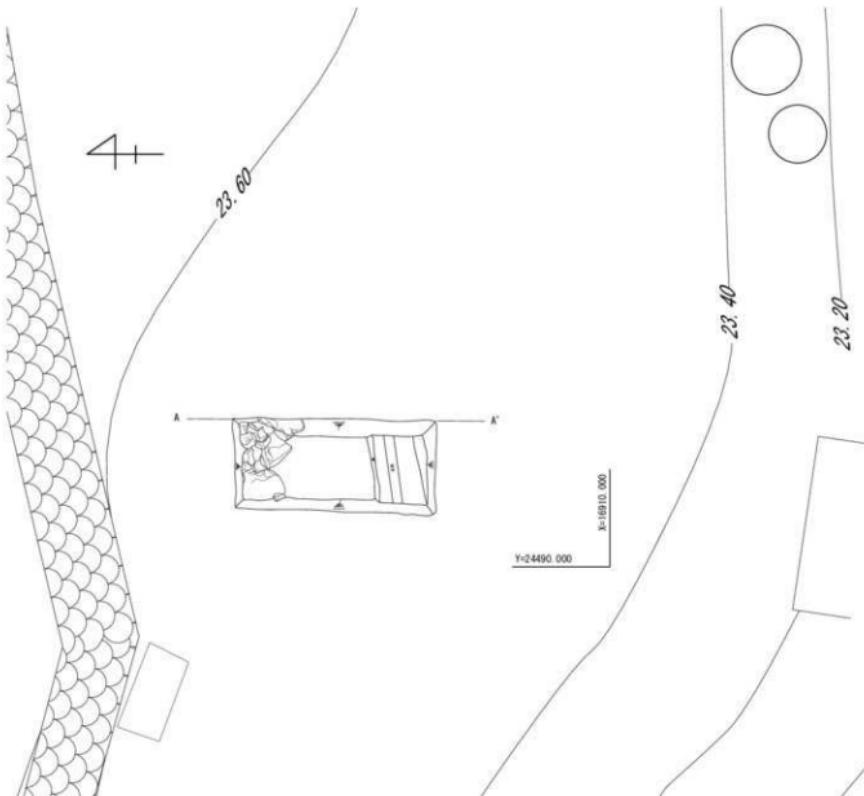




第 18 図 H23-1 実測図 (S=1/50)



第19図 H23-2 実測図 (S=1/50)



第20図 H23-3 実測図 (S=1/50)

(4) 平成 24 年度の調査

平成 23 年度に引き続いて、丸岡城天守消防設備改修工事に伴う確認調査を実施することとし、天守入口の引き込み配管施工箇所と天守南側の遺構面確認を目的としてトレーニングを設定した。

< H24-1 トレーニング >

天守入口階段下で階段基底部付近の確認、既設配管深度の確認、遺構面の確認を目的として 3.5×3.3 m の不整形トレーニングを設定した。

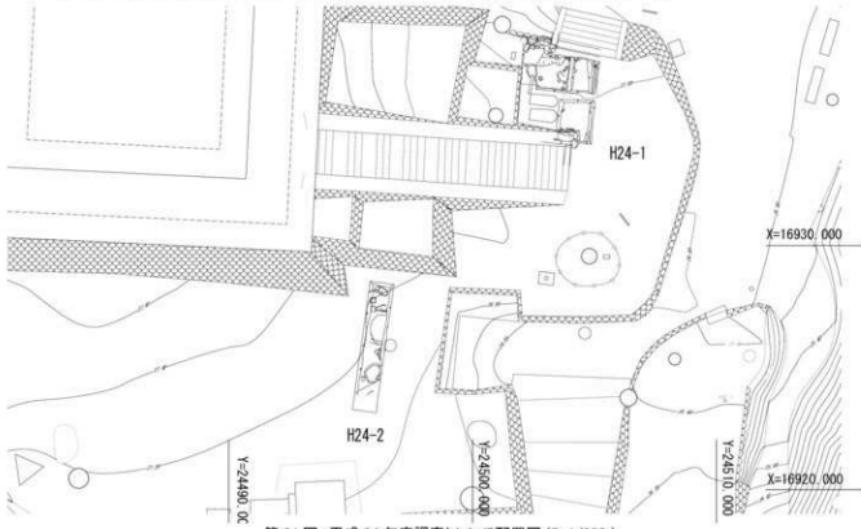
石階段は明治 34 年に改修されたものであるが、調査によって石積みは在来工法ではないことが確認できた。遺構面は GL-50 cm で検出でき、地山面まで石瓦を含む土が堆積していた。北西角で石材の抜き取り跡と思われる遺構を検出している。記録では旧階段は北から南に向かって登り、屈曲して天守東面の入口に取り付いていた。旧階段は自然石を積んでいたとの記録から、旧階段の痕跡の可能性がある。なお、既存の配管は岩盤層を 40 cm 深く掘り込んでいた。

調査の結果、天守入口階段付近は標高 26.4m 付近で整地されていることが分かったが、堆積状況から明治 34 年の改修時に整地されたと推定される。

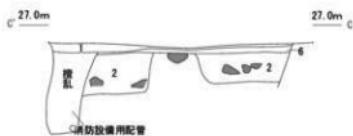
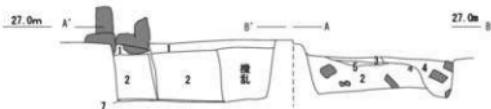
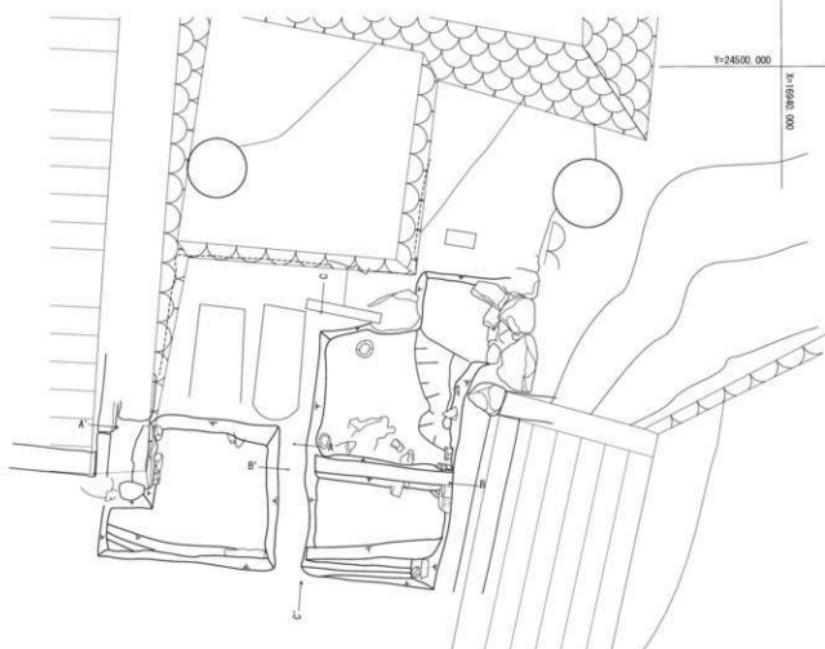
< H24-2 トレーニング >

天守南側の遺構面の深度を確認することを目的として、天守台南東角付近に南北方向のトレーニングを設定した。

GL-40 cm 付近で石瓦を敷き詰めた層が確認できた。現代の遺物も混在したため取り上げて掘り下げた。結果、GL から -100 cm 程度は石瓦を含む層で、新しい時期の堆積の可能性が高い。遺構面はトレーニング中心付近で標高 25.7 m である。GL-75 cm 付近で大きい石が検出された。用途は不明である。北端から 180 cm 付近を中心として大きく地山が掘り産められている。くぼみの北側は一段高くなつて地山の礫が集積されていた。H23-2, H23-3 トレーニング 北端の状況によく似ている。



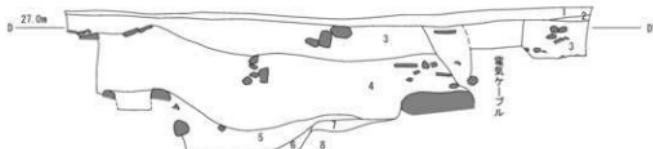
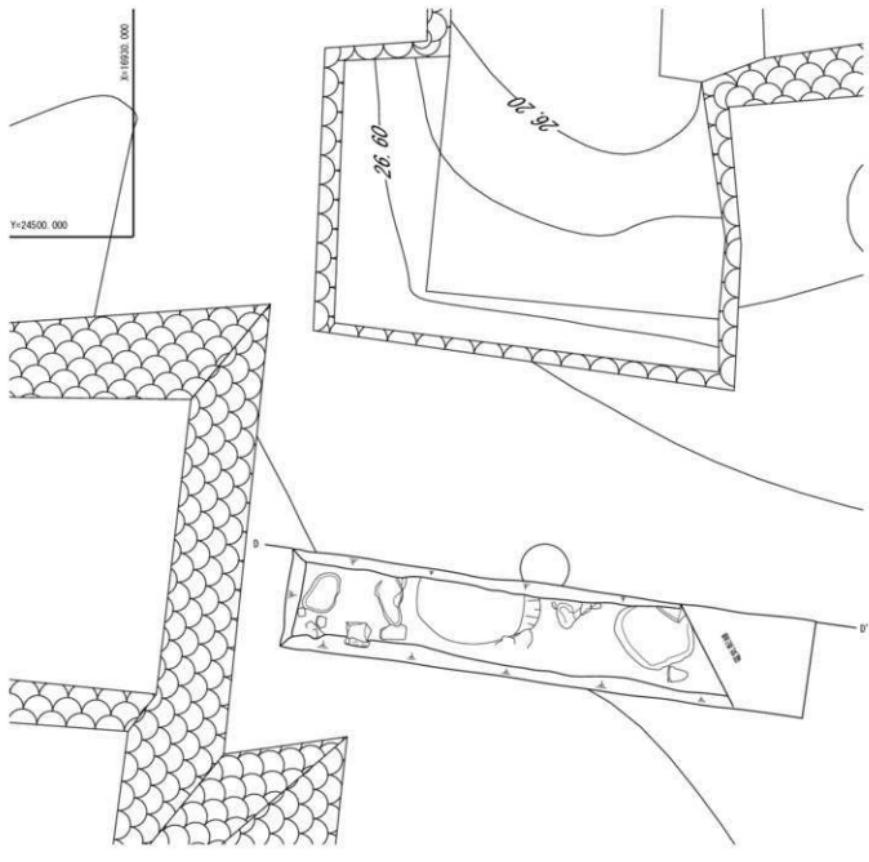
第 21 図 平成 24 年度調査トレーニング配置図 (S=1/200)



- 1 砂利層
 2 にぶい赤褐色 SYR 4/4 石瓦。現代の遺物含む 赤色地山種を多く含む
 3 にぶい赤褐色 SYR 4/4 粒子は細かい 赤色地山の風化土か
 4 極褐色 7.SYR 4/3 粒子は細かい 白色被覆じる 赤色地山は少量 石瓦
 遮じる
 5 にぶい黄褐色 10YR 4/3 粒子は細かい 黄色地山の風化土か
 6 極灰色 7.SYR 4/1 粒子は細かい 赤と黄色の地山の小礫を含む
 7 黒褐色土 10YR 3/2 薄い黒色土層
 8 岩盤層 凝灰岩風化層 赤色地山を基本とする

第 22 図 H24-1 実測図 (S=1/50)





- 1 表土
- 2 表土(砂)
- 3 にぶい黄褐色 IOYR 4/3 もろい 現代の遺物。石瓦を含む
- 4 深灰色 IOYR 4/1 もろい 現代の遺物が混じる
- 5 雜褐色 IOYR 3/3 地山の縁の小片が混じる
- 6 黄色 IOYR 4/4 地山と5層の混ざり 石瓦は混ざらない フルより重み強い
- 7 黄色 IOYR 4/4 地山と5層の混ざり

第23図 H24-2 実測図 (S=1/50)

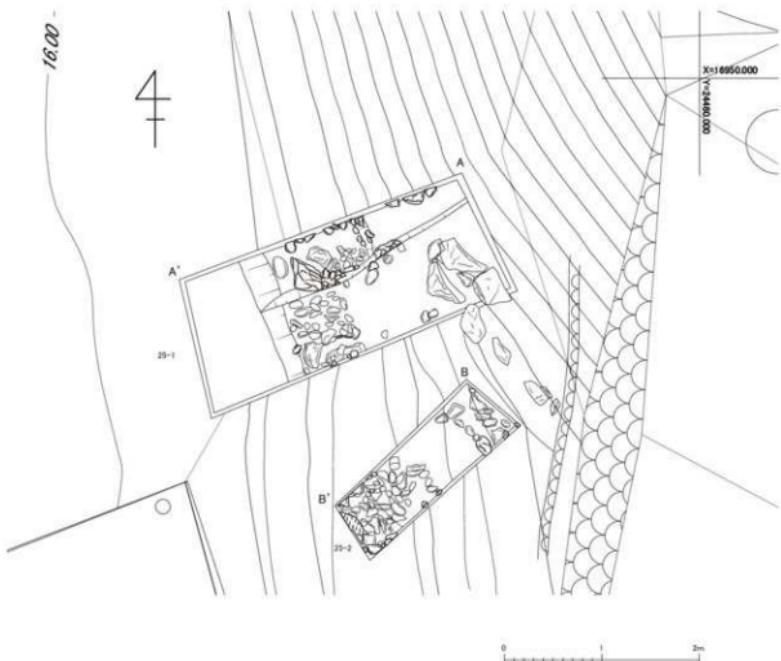
(5) 平成 25 年度の調査

平成 25 年度からは天守が所在する城山の残り具合を確認することを目的として、石垣の分布調査を実施した。調査は青山(当時)が担当し、城山斜面の下草伐採と露頭している石材の分布調査を行い、図上に記録した。一部の石垣は略測を行ったうえで記録写真を撮影した。調査成果は本章第 2 節で述べる。

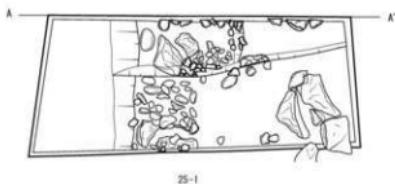
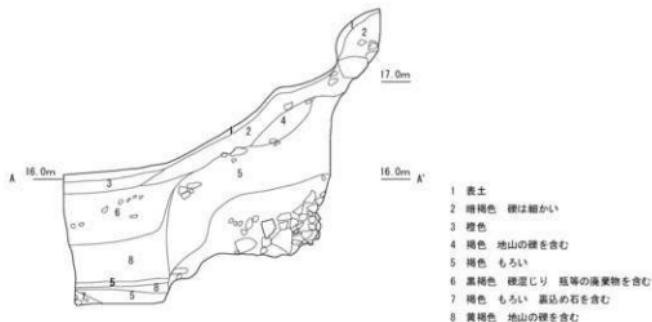
平成 25 年度の発掘調査は上述の石垣分布調査を受けて、石垣の痕跡を確認するためにトレンチを設定した。

<水ノ手調査地>

石垣分布調査に加えて、城山西側の水ノ手において、2 本のトレンチを設定して試掘調査を実施した。GL-20cm で礫がまとまって検出されたため、断ち割りを入れて層位を確認した。結果、さらに約 1m は円礫が堆積していることが確認できた。石垣の裏込めと判断した。本丸から西側に下る石段の石垣よりも外側に江戸時代以前の石垣があったことがわかる。石垣は明治 19 年ごろに撮影された写真でも確認することができる。

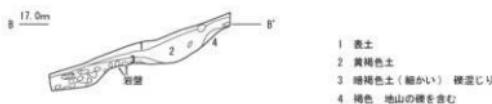


第 24 図 平成 25 年度調査トレンチ配置図 (S=1/50)



25-1

0 1 2m



25-2

0 1 2m

第 25 図 H25-1,25-2 実測図 (S=1/50)

(6) 平成 26 年度の調査

平成 26 年度は城山の地形測量を実施している。地形測量は日本海航測株式会社に業務委託を行った。

また、「一筆啓上日本一短い手紙の館」新築計画に伴い、隠居曲輪にあたる場所の試掘調査を行ったところ、石垣の一部が検出された。これを受け、急遽当該敷地の一部で発掘調査を実施した。調査範囲は敷地の北面、道路に面する範囲で、西寄りの場所に敷地に乗り入れるスロープが設けられている。調査は検出された石垣の範囲を明らかにすること、隅櫓にあたる箇所の建物跡の有無を確認することの 2 点を目的として調査を実施した。第 26 図は正保期の絵図における調査場所(上)と、現代の地図上に調査範囲を書き込んだものである(下)。絵図では石垣が描かれ、西隅に櫓が描かれている。また、石垣の内側は階段状の表現があり、一段高くなっていたことがうかがえる。

調査地は現状で周辺よりも標高が 1m 高くなっている。敷地は廃藩後に丸岡県庁、裁判所、法務局と公的機関が置かれていたため、削平を免れていたと考えられる。

<スロープ西側調査地>

西側では、古写真や絵図から北面と西面に石垣が積まれ、隅櫓があつたことが想定された。現状は西側から北側にかけて擁壁が建てられ、コンクリート舗装がされている。コンクリートと盛土の直下で遺構面と思われる面を検出した。西側は擁壁を設置する過程で石垣は破壊されており、調査範囲で石垣を検出することはできなかつたが、土層断面から裏込め層を確認することができた。裏込めは 20 cm 大までの円礫・角礫が詰められている。それよりも上層は近代以降の搅乱層と判断した。北面は配管等で破壊が進んでいるものの、北向きの石垣を検出している。遺物は現代の瓦礫で、遺構の年代を決定できる遺物は採取できなかつた。

北面の石垣は直径 50 cm 程度までの石材を用いて、あまり加工せずに積まれた野面積みである。石積みの傾斜は S75° W である。隅角部は破壊されて確認できなかつたが、擁壁基礎より下層まで続いている。今回調査では擁壁より下層の調査は見送っている。

<スロープ東側調査地>

調査範囲は L 型擁壁の内側、東西 27m、幅 3m で 2 か所を南側に拡張して調査を行つた。調査の結果、擁壁の内側に石垣が検出された。石垣は西端から 6m はほぼ垂直に立ち上がる石垣、東は傾斜の緩い石垣で、7m ほどの地点でコンクリート製階段が設けられている。垂直に立ち上がる石垣の北側に、擁壁の下にまで及ぶ石が検出され、さらに下層まで石垣がつながつてゐることがわかる。傾斜の緩い石垣を石垣①、擁壁下まで伸びる石垣を石垣②、垂直に立ち上がる石垣を石垣③とする。

石垣①は 70 cm 大までの大きさの自然石を積んでいる。西端で石の小口を表に向けて積んでいる様子が確認できる。石は未加工か粗割りの石で、切り石ではない。西端の石に矢穴痕がある石が 1 石のみ確認できた。石垣の傾斜は 65° で緩く、やや上向きに面がそろうことから上部が内側に崩れている可能性がある。裏込めには丸い川原石を大量に使用している。石垣の天端は GL-50 cm ほどで標高は 10.3m である。裏込めはアスファルト舗装下にある盛り土の下まで確認できることから、本来の石垣は現在の標高 10.9 m より高く積んでいたと思われる。石垣の隙間からは板ガラスが出土し、コンクリート製階段が設けられていること、また、明治 19 年ごろに撮影された写真からも、明治以降も一段高い状態で土地利用が継続されたことがわかる。

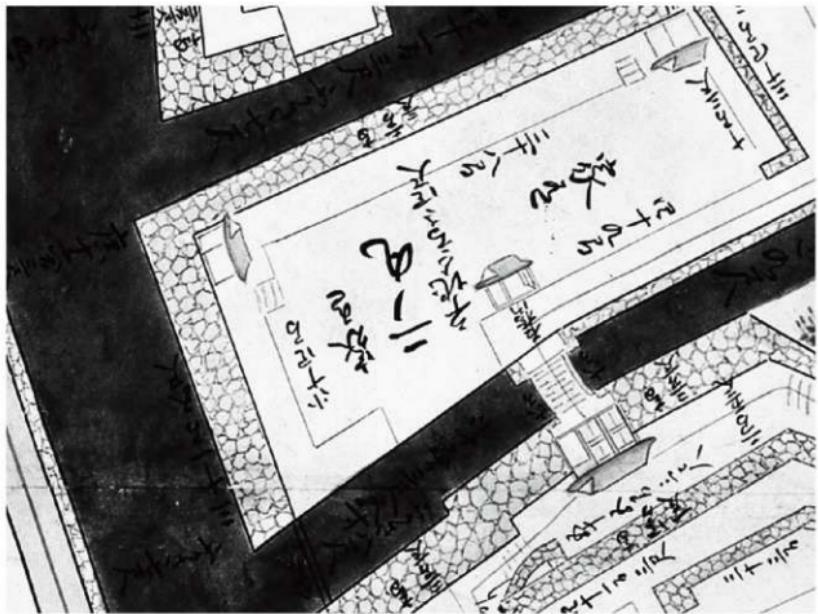
石垣②は石垣③の北側、擁壁の下に続いている石垣である。自然石の小口を外に向けて据えて

いる。裏込めは握り拳大程度の川原石が詰められている。使われている石は小口で70cm、奥行きが1m程度あり石垣①の石よりも大ぶりの石が使われている。露頭する石の天端は標高9.2m付近で、確認することはできないが石垣①の下にまで伸びていると思われ、石垣②の露出部分を明治以降に修復して石垣①があると考えられる。なお、地下水位は高い。

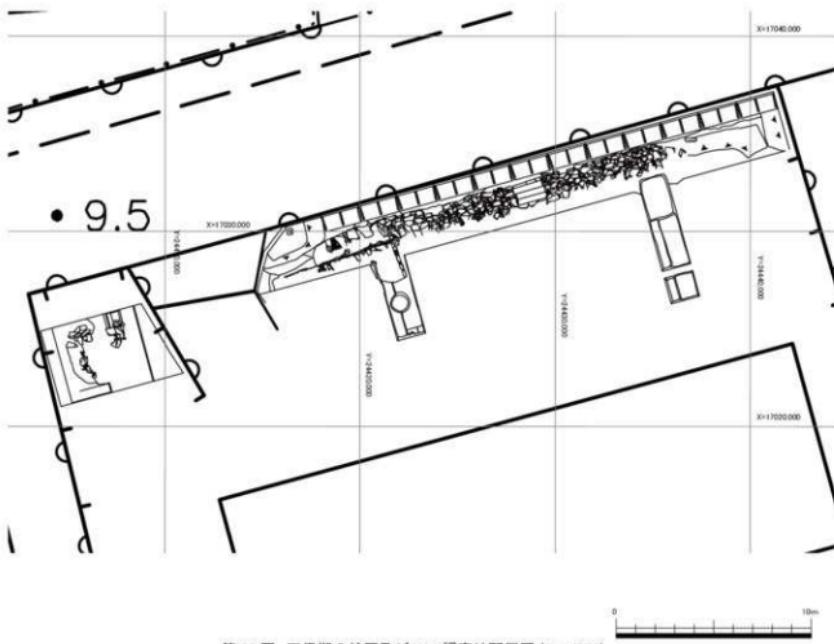
石垣③は石垣②の裏込めの上に、大きいものでは1mほどの石材をほぼ垂直に積み上げている。小口を縦に長く配置する石も見られ、石垣①の積み方とは大きく異なる。石は自然石か、加工の少ないものを使用している。材質も様々で、風化しかけた脆い石も使用されている。裏込めも川原石が混じった土を使っており、石垣①、②の積み方とも大きく異なっている。石垣①との取り合いについては、石垣①の西端の石の裏に石垣③の東端が入り込んでいるが、噛み合ってはおらず、また遺物はいずれも近代以降の廃棄物であった。

東側の拡張トレーナー西壁土層の堆積状況を確認したところ、灰色粘質土(8層)の上に城山の岩盤層と同質の礫を多く含む赤褐色土(4層)が堆積していた。北端は4層の上に8層によく似た灰黄褐色土が堆積し、石垣①の裏込めはその外側に張り付くように始まっていた。8層は南側で落ち込み、4層は中ほどでやや下がるが平坦に堆積している。舗装工事による擾乱を受けているものの、4層の上面が整地層と判断し、3、2層は江戸期もしくはそれ以降の堆積層と推定した。5、6層は石垣裏の土壘の盛り土の可能性がある。絵図では隠居曲輪北面の石垣裏にイスバシリのような表現がされていることから、確認された土層はイスバシリの形状を示している可能性が高い。

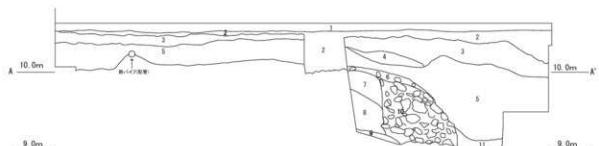
西側の拡張トレーナーでは、南北方向に切り石を並べた遺構と直径1mのビットを確認している。ただし、切石は笏谷石が混じっており、石垣③との関連性が考えられる。ビットも遺物が伴っていないため時期を決定することはできなかった。



「正保城絵図のうち、越前国丸岡城之絵図（国立公文書館蔵）」より（部分）



第26図 正保期の絵図及びH26調査地配置図 (S=1/250)



- 1 コンクリート
- 2 砂利(石)
- 3 赤褐色 SYH 4/6 赤色地山と黄色地山の隙で構成 瓦が混じる
- 4 土色 10YR 4/4 硫、瓦が混じる
- 5 棕褐色 10YR 4/6 硫、瓦が混じる 墓壇土
- 6 黄褐色 10YR 5/6 美石が混じり始める
- 7 土色 H 4/4 粒子は細かくそろう
- 8 にごい褐色 7.5YR 5/3 粒子は細かくそろう
- 9 青灰色 10B6 5/1 粒子は細かくそろう
- 10 裂込石
- 11 棕褐色 10YR 4/4 硫、瓦が混じる 墓壇土

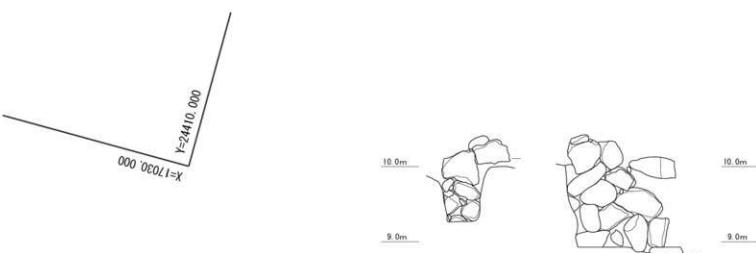
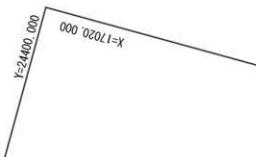
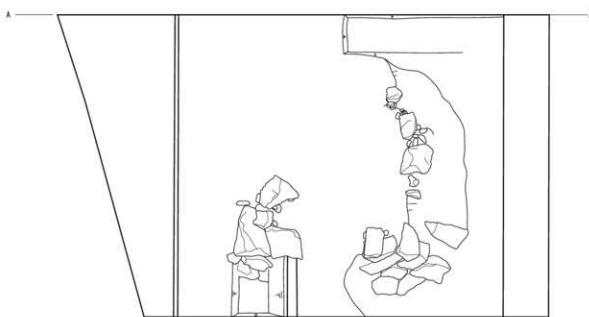
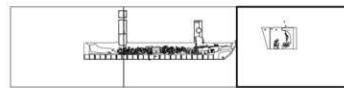
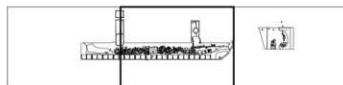


図 部 割

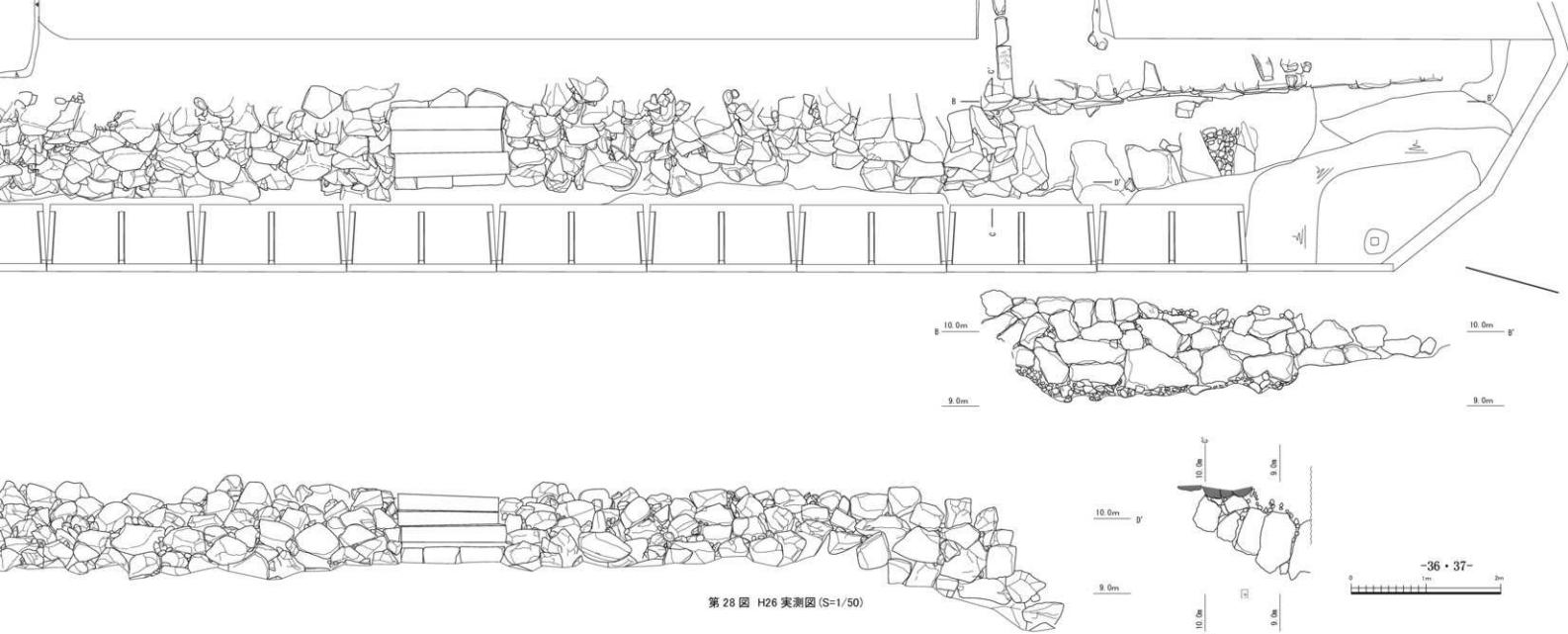
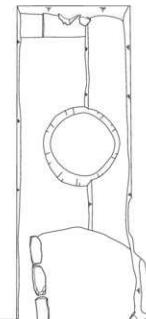


四 郭 割

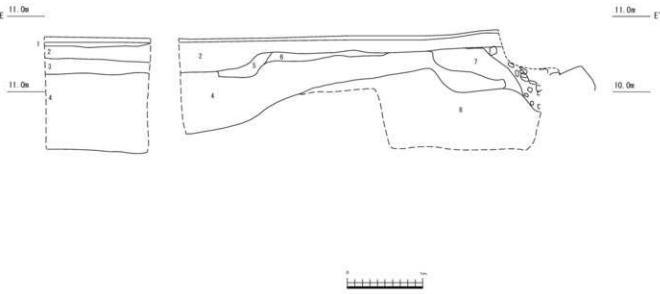


17030.000

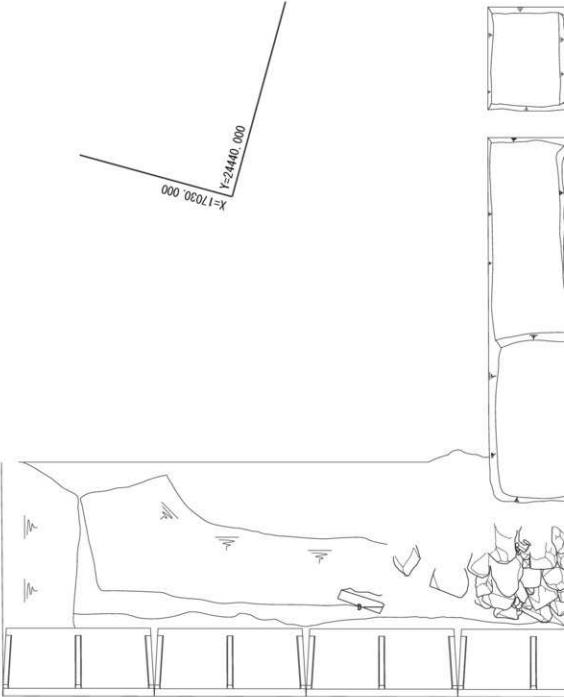
Y=24420.000



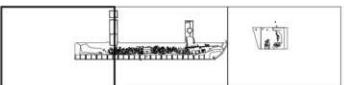
第28回 H26実測図(S=1/50)



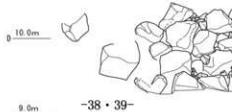
- 1 アスファルト舗装の路床
 2 灰色 H 5' 粒子は細かい 川原石、砂石を含む 敷地造成の盛り土
 3 砂色 10Y 4/6 粒子は細かい、赤色山地の小礫を含む
 4 赤褐色 SYR 4/6 赤色地山と黄色地山の縁で構成
 5 灰色 H 4' 粒子は細かくそろう
 6 灰色 H 6' 収支は細かくそろう 5層より明るい
 7 細灰色 10Y 6/1 粒子は細かくそろう よく被まる
 8 青灰色 SPG 5/1 粒子は細かくそろう よく被まる



図郭割



第 29 図 H26 実測図 (S=1/50)



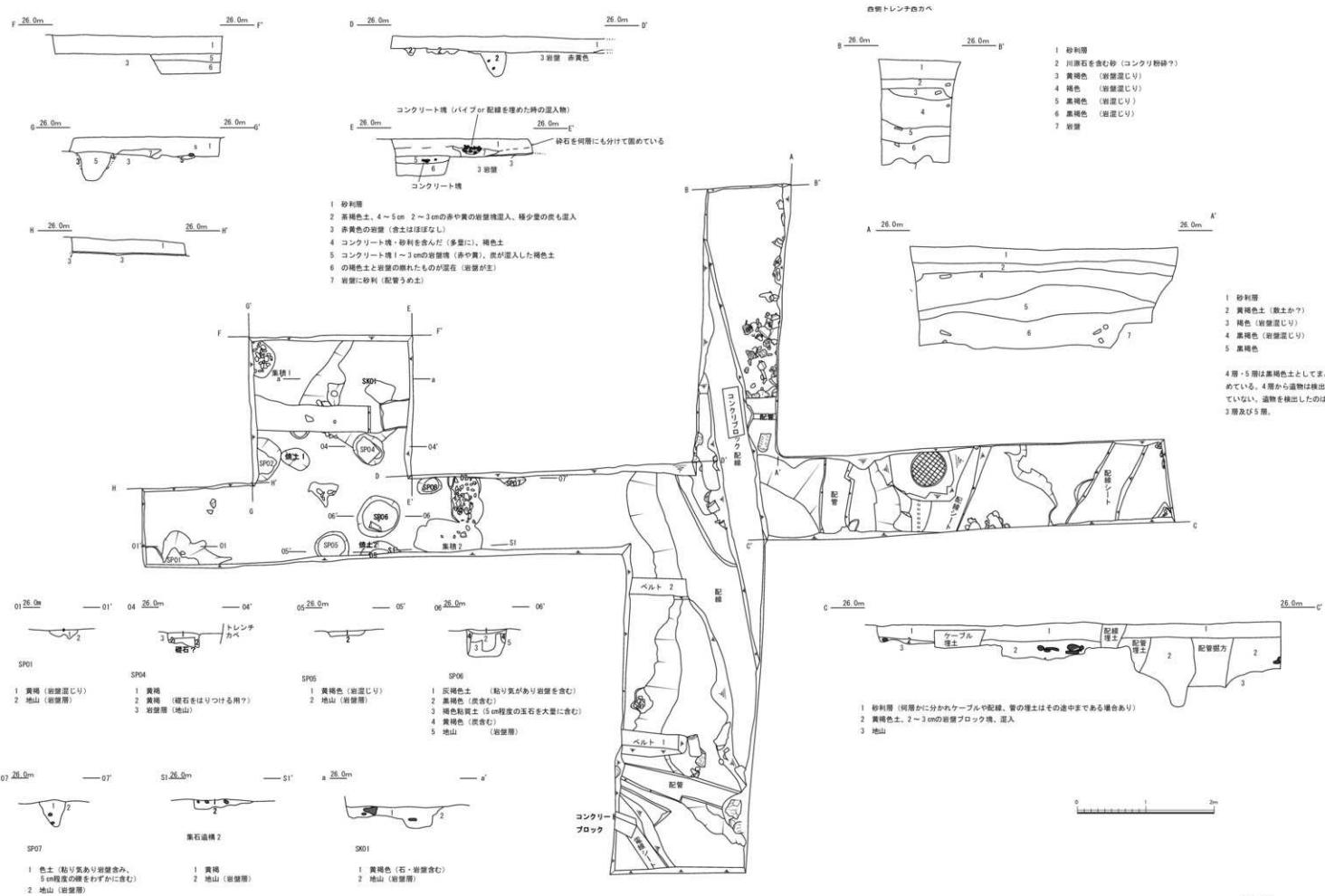
(7) 平成 27 年度の調査

平成 27 年度以降は、城山の遺構の残り具合を確認することを目的として、調査を計画して実施した。計画では、まず天守が所在する本丸において、関連する建物等の有無を確認することを目的として、調査することとした。なお、本丸は常に観光客の来場があるため、一度に広範囲の調査ではなく、複数回に分けて状況把握を行うこととした。

平成 27 年度は本丸において南北 15m、東西 10m、幅 1m の十字のトレーナーを設定し、ピットを確認した部分について拡張して調査を実施した。東西方向のトレーナーと交点から北にかけて深い落ち込みが検出された。平成 23 年度の調査で検出した落ち込みと同一の落ち込みと思われ、落ち込みが本丸の中央付近を東西に広がっていることがわかる。落ち込みは岩盤層を削り込んでおり、石瓦が下層からも検出していることからも古い江戸期まで遡らないが、滝ヶ原石製瓦が含まれない点を考えると、昭和 17 年以前であることが類推できる。

南北方向のトレーナー南側でピット 8 基土坑 1 基を検出している。SP04 からは笏谷石製品が出土している。加工して平坦な面を上に向けて据えられており、礎石の可能性がある。

この結果を受けて、南部分を拡張した調査を平成 28 年度に実施することとした。よって、詳述は次項に委ねる。



(8) 平成 28 年度の調査

前年度ピット等が検出された範囲を含めて、東西 4m、南北 10m の調査区を設定し、後に南側へ幅 1m とさらに南西角で 0.5m の範囲拡張を行った。

土坑

27 年度の調査と併せて検出された土坑は 3 基である。

SK01 : 27 年度に確認し、28 年度に規模が判明した。120 × 180 cm、深さ 30 cm で、軸は W37° N で北西 - 南東方向に長い長方形を呈している。

SK02 : 推定 120 × 100 cm、深さ 64 cm で、軸は N27° E で北東 - 南西方向にやや長い方形土坑である。上層で土師器皿 1 点、別の層位で川原石とともに越前焼甕体部が出土している。

SK03 : 120 × 110 cm、深さ 80 cm で、軸は N27° E で北東 - 南西方向にやや長い方形土坑である。上層で越前焼甕口縁が出土している。SK02 の東側で切り合っているが、攪乱を受けて先後関係が判然としない。底部の形状が異なることから 2 基の土坑と判断した。土師皿片、越前焼甕体部片出土。

ピット群

SP01 : 27 年度調査ではピットとしていたが、南東側で検出された黒色土を含む落ち込みの方であった。

SP02(2814) : 1 辺 60 cm、深さ 30 cm の方形を呈す。

SP04 : 50 × 40 cm、深さ 20 cm で北東 - 南西に長い楕円形のピットである。笏谷石製の礎石が検出された。

SP05 : 1 辺 50 cm、深さ 10 cm の浅い方形を呈す。

SP06 : 55 × 65 cm、深さ 40 cm のピットである。

SP07(2803) → SK2802 : 27 年度調査ではピットとして認識していたが、28 年度調査の過程で SK03 とした。

SP08 : 35 × 25 cm、深さ 15 cm の小さい楕円形を呈す。

2801 : 1 辺 35 cm 以上、深さ 20 cm 以上のピットと推定される。調査区の北東角にあたり、詳細は不明。

2802 : 40 × 55 cm、深さ 15 cm の楕円形を呈す。埋土に円窓を含む。

2804 : 調査区北西角で検出した。笏谷石製瓦片と土師皿片出土。

2805 → SK02 : 当初ピット 2805 と認識していたが、結果 SK02 と判断した。

2806 : 直径 40 cm、深さ 10 cm の円形で鉢状を呈す。

2807 : 直径 30 cm、深さ 20 cm の円形で、2806 に後続する。川原石が詰まっている。棧瓦片と洋釘が出土している。

集積 2(2808) : 27 年度調査では集積としていたが、ピットと判断した。70 × 60 cm、深さ 40 cm の方形ピットである。上層で同規模の浅いピットと 1 辺 35 cm のピット(2824)に切られている可能性が高い。

2809 : 調査区東壁際で検出した。詳細は不明。

焼土 2(2810) : 27 年度は焼土 2 としていたが、調査の結果ピットと判断した。上面の焼土は近代以前のもので、その下層にピット 1 基が確認できた。しかし、輪郭や底部の形状が不規則で、遺構ではない可能性も考えられる。

2811 : 1 辺 40 cm 以上、深さ 20 cm のピットである。調査区西壁際で検出したため、詳細不明。2812 より先行する。

2812 : 推定直径 50 cm、深さ 40 cm のピットである。ピット内埋土から石瓦片が出土している。SK01 の方を切っている。

焼土 1(2813)：直径 45 cm の浅いピットである。

2815：1 辺 40 cm、深さ 45 cm の方形を呈す。

2816：40 × 25 cm、深さ 18 cm の楕円形を呈す。底場は 2 段になっているが、土層からは意図を看取できない。

2817：40 × 40 cm 以上、深さ 40 cm の方形を呈す。埋土は單一だが、10 cm 大までの円礫を多く含む。

2818：30 × 30 cm の不整形で、深さ 10 cm のピットである。底部の形状が不規則で、極めて浅いことから遺構ではない可能性も考えられる。

2819：27 年度は集積 2 の一部としていたが、調査の結果ピットと判断した。

2820：1 辺 25 cm、深さ 30 cm の方形ピットである。石が詰められており、柱の抜き取り跡と推定できる。抜き取った柱は推定 10 cm の角柱。

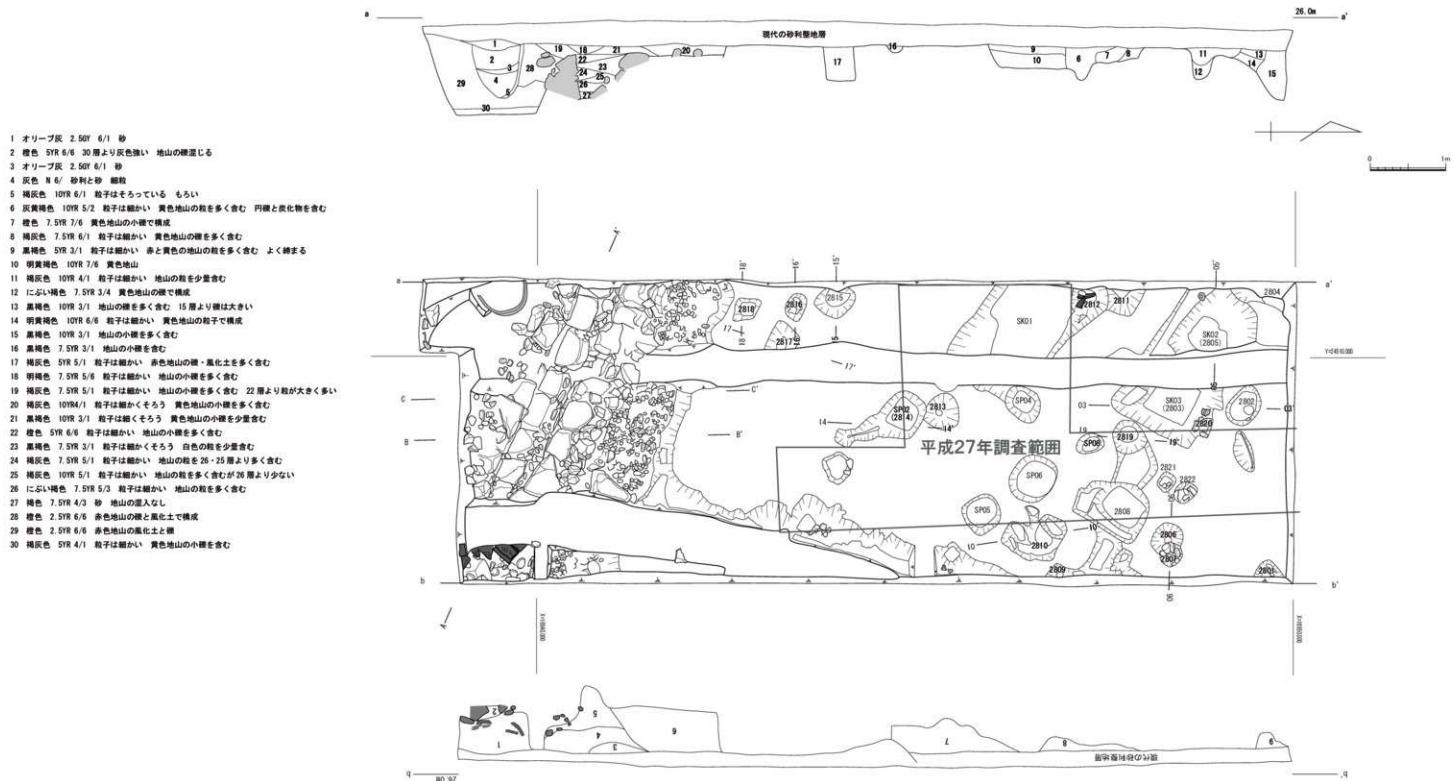
2821：1 辺 20 cm、深さ 15 cm の方形を呈す。川原石が混じる。

2822：1 辺 20 cm、深さ 20 cm で平面形も不整形で底部の形状も不規則である。

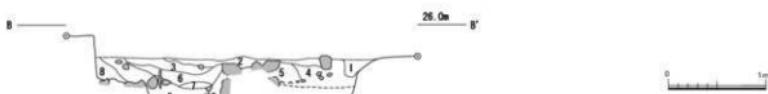
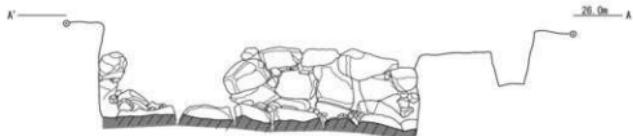
南端で検出された石積遺構は W22° N で、向かい合った 2 列の石垣と底部に面を南に向かって傾斜する石を並べて作られている。消火栓設備の配管で一部破壊されている。石積は北側で 3 段、南側で 2 段残っていた。北側石積の裏込めは、下層は 20 cm 程度の地山の割石を使い、上層は川原石を詰めている。南側は表層付近まで地山の礫を多く含む土で、表層近くで川原石が混じる程度であり、北側の積み方とは異なる。石積遺構内埋土の層位は、最下層から約 20 cm は水平堆積が認められる。構築順序は北側石積 → 底部石 → 南側石積である。なお、北側石積は底部石積よりさらに下層に 1 石以上積まれていることがわかっている。

その他

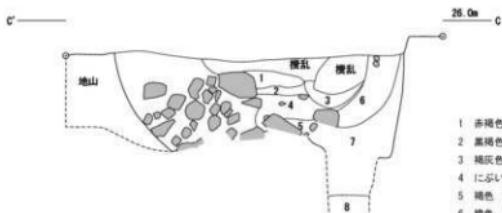
調査地の南西角からは直径 70 cm の越前焼甕が埋められた状態で出土している。内部からはコンクリート片や生活廃棄物が含まれ、近代以降の便槽であることから本書では詳述しない。



第31図 H28実測図(S=1/50)



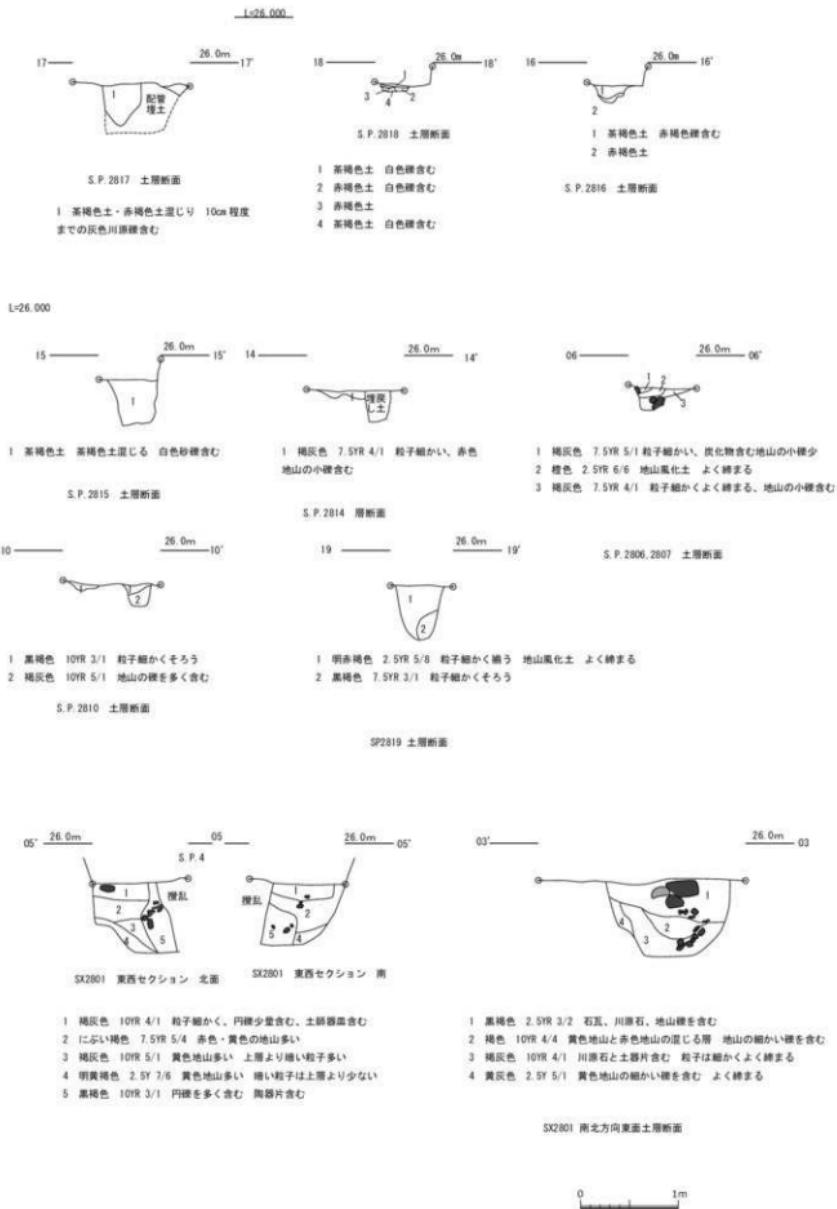
- 1 明褐色 7.SYR5/6 地山（赤）と白色の穂を多く含む
- 2 明褐色 7.SYR 5/6 穀子は細かい 地山の小穂、穂を多く含む
- 3 暗灰色 7.SYR 5/1 穀子は細かい 地山の小穂、穂を多く含む 2層より少ない
- 4 暗灰色 10YR4/1 穀子は細かくそろう 小円錐の裏込に覆土
- 5 淡黄褐色 10YR 4/2 地山の穂、小穂を多く含む
- 6 棕色 SYR 6/6 穀子は細かい 地山の穂含む
- 7 にぶい褐色 7.SYR 5/4 穀子は細かくそろう 地山穂少量含む
- 8 棕色 2.SYR 6/7 主に赤色地山の穂で構成
- 9 暗灰色 7.SYR 5/1 赤色地山の穂等を含む
- 10 黒褐色 7.SYR5/1 赤色地山の穂等を含む
- 11 黄い黃褐色 10YR 5/4 穀子は細かい 白色の粒を含む
- 12 暗灰色 7.SYR 4/1 穀子は細かくそろう 少量の地山風化粒を含む
- 13 暗灰色 10YR 4/1 穀子は細かくそろう 地山の混入なし 下層より黒み強い
- 14 暗灰色 7.SYR 4/1 穀子は細かくそろう 地山の混入なし
- 15 にぶい褐色 7.SYR 5/3 穀子は細かい 地山の穂を多く含む 地山穂少量
- 16 棕色 7.SYR 4/3 砂 地山がわずかに混入
- 17 棕色 7.SYR 4/3 砂 地山の混入なし



- 1 赤褐色 SYR 4/8 穀子は細かくそろう 白い粒が少量
- 2 黒褐色 7.SYR 3/1 穀子は細かくそろう
- 3 暗灰色 7.SYR 4/1 穀子は細かい 地山の小穂を多く含む
- 4 にぶい黃褐色 10YR 5/4 穀子は細かい 白色の粒を含む
- 5 棕色 7.SYR 4/2 砂 地山の混入なし
- 6 棕色 2.SYR 6/6 赤色地山の穂、石積みの裏込めか？
- 7 棕色 2.SYR 6/6 2層より上は小さい
- 8 黑褐色 2.SYR 3/1 穀子は細かい 黄色の地山の小穂を含む

第32図 H28石積遺構実測図(S=1/50)

0 1m



第33図 H28遺構実測図 (S=1/50)

(9) 平成 29 年度の調査

平成 23 年度調査トレーニチと平成 28 年度調査区との間に $3 \times 10\text{m}$ の調査地 (H29-1) と天守台北東角に $3 \times 1.5\text{ m}$ の調査トレーニチ (H29-2) を設定した。

< H29-1 調査地 >

複数のピットと南側の石積み遺構、北側で不明遺構、幅の狭い溝が検出された。調査を進めたところ、北側の不明遺構は複数の土坑とピットが重なっていたが、平面形からは判断が困難であった。以下で各遺構について概略を述べる。なお、調査地の南西約 $1/3$ は配管によって改変を受けていた。

北側で検出された不明遺構は掘り下げの結果複数の土坑とピットが重なっていることが確認できた。上面は東西約 160 cm 、深さ約 20 cm の土坑 (SK04) がある。平面では確認できなかつたが、セクション土層から径 70 cm 、深さ 20 cm 程度のピットがあつた可能性がある。前年度調査地の SK02、2905、2906、2919 は SX2901 より先行する。

土坑

SK01：調査区東壁際で検出した。27、28 年度調査で検出した土坑の西端にあたる。

SK04： $175 \times 200\text{ cm}$ 以上、深さ 20 cm の北東一南西方向に長い長方形に復元できる。

SK05： $120 \times 90\text{ cm}$ 、深さ 40 cm の北東一南西方向に長い長方形に復元できる。SK04 より先行する。

ピット

2901： $130 \times 70\text{ cm}$ 、深さ 20 cm の浅い楕円形。黒色土の堆積で地山の赤色礫を少量含む。笏谷石製品が出土している。

2902： $100 \times 80\text{ cm}$ 、深さ 25 cm の浅い楕円形で、底部に中央を丸く窪ませた笏谷石が据えられている。埋土はほとんど石瓦片である。

2903：直径 45 cm 、深さ 40 cm の円形。

2904：直径 30 cm 、深さ 30 cm の円形。2903 より先行する。

2905：不明遺構の下面で検出。1 辺 30 cm 、深さ 50 cm の方形を呈す。2917 より先行する。

2906：不明遺構の下面で検出。1 辺 40 cm 、深さ 94 cm の方形を呈す。

2907：不明遺構の下面で検出。1 辺 50 cm 、深さ 67 cm の方形を呈す。

2908：不明遺構の下面で検出。 $80\text{ cm} \times 120\text{ cm}$ 以上、深さ 60 cm 、北西一南東方向に長い長方形ピットに復元できる。2907 と重なっているが先後関係は判断できない。

2909： $35 \times 30\text{ cm}$ 、深さ 55 cm の方形を呈す。

2910： $30 \times 25\text{ cm}$ 、深さ 35 cm の方形を呈す。

2911： $45 \times 30\text{ cm}$ 、深さ 35 cm の楕円形を呈す。越前焼焼片が出土している。

2912： $35 \times 40\text{ cm}$ 、深さ 50 cm の方形を呈す。

2913： $45 \times 50\text{ cm}$ 、深さ 50 cm の方形を呈す。2912 と平行に隣接し、底面の形状も類似している。

2914： $45 \times 30\text{ cm}$ 、深さ 55 cm の不整形を呈す。

2915： $40 \times 30\text{ cm}$ 、深さ 35 cm の方形を呈す。

2916：直径 25 cm 、深さ 30 cm の不整形を呈す。

2917： $40 \times 30\text{ cm}$ 、深さ 30 cm の不整形を呈す。2901 と隣接するが先後関係は不明。石瓦出土。

2918：長軸 130 cm 、深さ 10 cm の楕円形に復元できる。南側は石積み遺構の裏込めに重なるが平面形は追えなかった。石瓦が出土。

2919 := SK05

2920：直径 30 cm以上、深さ 50 cm以上の不整形。調査区西壁際で検出したため詳細不明。

2921：調査区東壁際で検出したため詳細不明。

2922：直径 30 cm以上、深さ 30cm 以上。配管で切られているため詳細不明。

2923：1辺 40 cm、深さ 10 cmの浅い方形を呈す。

溝

SD01：幅 20 cm、深さ 20 cm、黒褐色の堆積で地山礫を含む。95° に屈曲する。

その他

南西角で石積遺構の南側下層の堆積状況を確認できた。岩盤の標高は 24.35m で西に向かって高くなっている。なお、28 年度調査地の南西角で検出した岩盤層が 23.8m である。

岩盤から 40 cm は炭化物が混じった黒色、灰色土が堆積し、その上層からは岩盤層が混じた褐色土層が堆積している。黒色、灰色土層には川原石が含まれる面がある。

< H29-2 トレンチ >

平成 28 年度に検出した石積遺構の延長線上が天守台北東隅にあたることから、関連性を確認するためにトレンチを設定した。

結果、石積遺構は検出されなかったため、石積遺構は本丸の建物等に関連するものと考えられる。

地山層は GL より 60 cm 程度で、石瓦を含む現代の堆積層である。岩盤層ではピットを検出した。天守台の石垣は GL より下で 2 ~ 3 段確認できた。積まれている石は露出部分よりもやや小ぶりである。石の隙間に詰めた石が多い。天守台の基底石は岩盤層を掘り窪めて据えている。掘方と基底石の隙間はほとんど無い。掘方の深さは 30 cm 以上と推定される。

ピット

2931：35 × 30cm、深さ 8 cm と極めて浅い方形を呈す。

2932：復元直径 25 cm、深さ 50 cm の不整形で、天守台掘方に重なる。

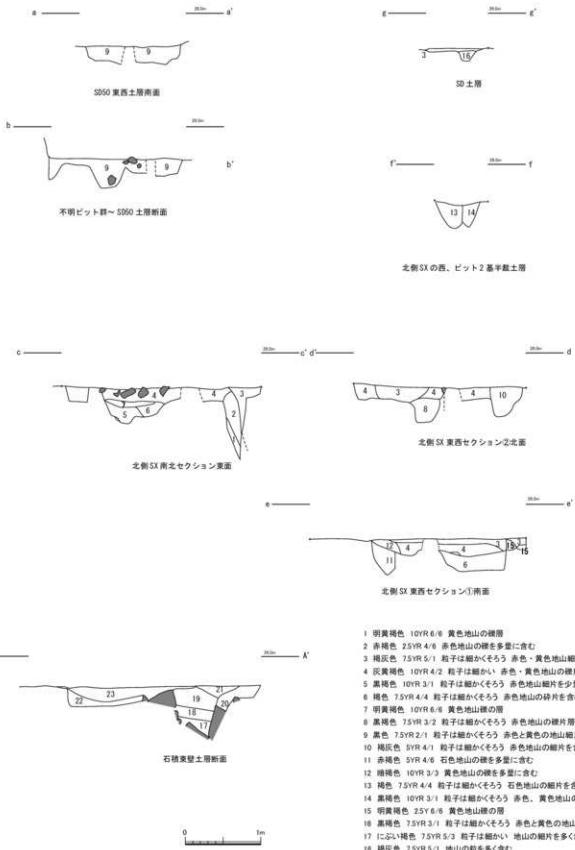
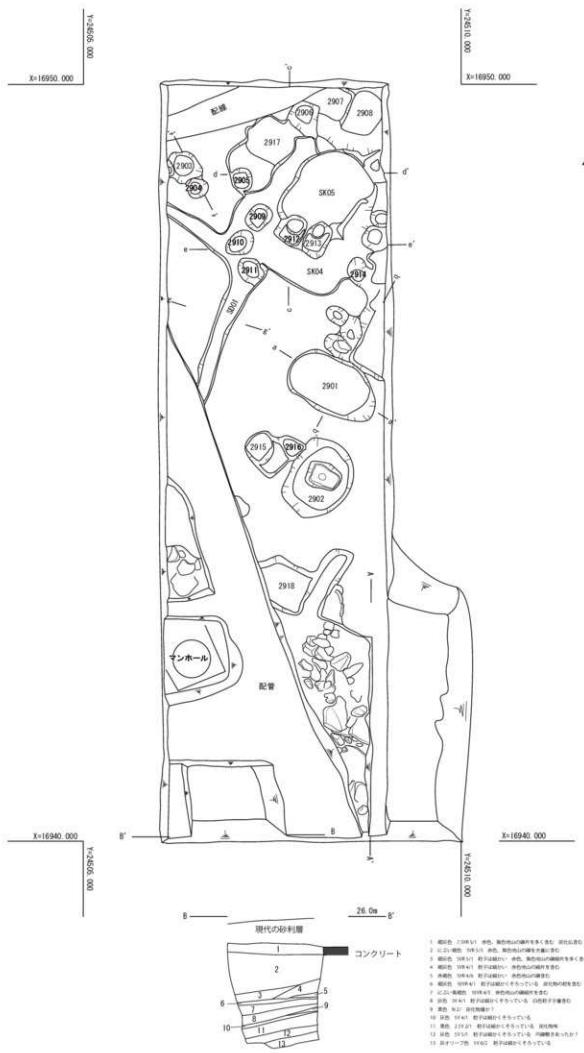
2933：1辺 15 cm、深さ 10 cm の方形を呈す。

2934：25 × 15 cm、深さ 20 cm の方形を呈す。

2935：1辺 25 cm、深さ 30cm の方形と推定。配線とトレンチ壁に挟まれて詳細不明。

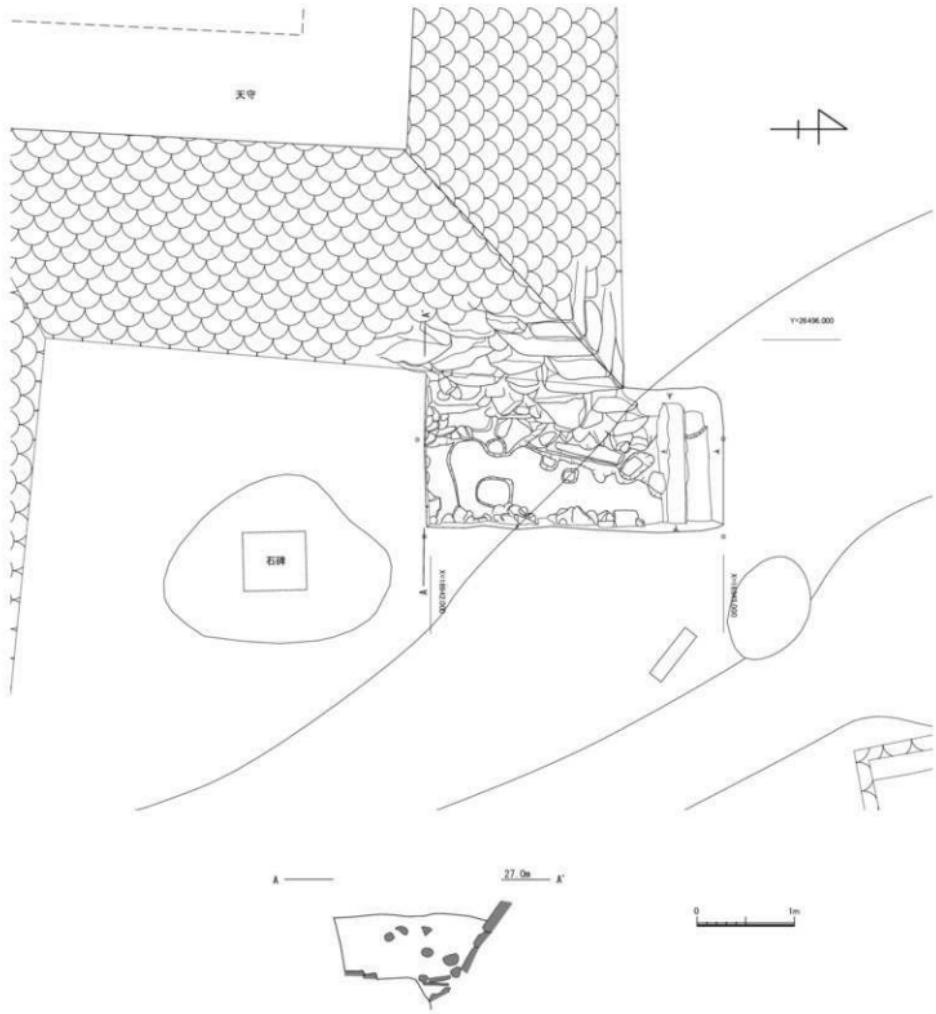
2936：トレンチ壁と配線に挟まれて詳細不明。深さ 20 cm。

ピットはいずれも規模が小さく、建物に伴うものとは考えにくい。福井地震後の修復工事時に伴う足場等の痕跡の可能性も考えられる。



第34図 H29-1 審査図 (S=1/50)

- 1 鳴谷 29(5月) 白色、黄色の山吹花を多く含む。開花期は
2 に近い。白花の山吹花を多く含む。
2 鳴谷 30(6月) 白色の山吹花を多く含む。
3 鳴谷 30(6月) 白子山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。
4 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 白色の山吹花を多く含む。
5 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 白色の山吹花を多く含む。
6 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 白色の山吹花を多く含む。
7 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 白子山吹花(?)
8 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。
9 鳴谷 30(6月) 白子山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。
10 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。
11 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。
12 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。
13 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。
14 鳴谷 30(6月) 町田山吹花(?) 合成、黄色の山吹花を多く含む。



第35図 H29-2 実測図 (S=1/50)

(10) 平成30年度の調査

前年までに引き続き、本丸建物跡の広がりを確認するとともに、H29-2の成果を受けて天守台付近の発掘調査を実施することとした。本丸は1×11mの東西に長いトレンチを設定し、後に東側5mの範囲で2m幅に拡幅した(H30-1トレンチ)。天守台の北側で1×5mの南北に長いトレンチを設定し(H30-2トレンチ)、天守台南側で1×12mの南北に長いトレンチを設定して後に北側7mの範囲を2m幅で拡幅した(H30-3トレンチ)。

< H30-1 トレンチ >

前年度までの調査を受けて、本丸の落ち込みを避けて北側に調査トレンチを設定した。岩盤層は西端から4m付近を境として、東へ深くなっていく。トレンチ東端の最深部はGL - 2.8mで、標高は23.1m付近である。岩盤層は細かな起伏が多く、人為的に削られたとは考えにくい。堆積の層序は、西端から4m付近までは砂利層直下が構造面である。東側では下層に黒褐色土層があり、その上に赤い地山の礫を多く含む層が水平になるように堆積している。本丸を整地するための盛土層と考えられる。盛土層からは遺物が出土していないため、時期は不明である。

また、西から6mの範囲でピットを検出している。

ピット

3001 : 80×100cm、深さ35cmの不整形を呈す。

3002 : 60×50cm、深さ20cmの楕円形を呈す。

3003 : 70×60cm以上、深さ10cmの方形と推測される。3004、3010と重なっているため形状は不鮮明。

3004 : 1辺50cm、深さ65cmの方形を呈す。

3005 : 1辺40cm以上、深さ40cm以上。トレンチの際で検出したため詳細不明。

3006 : 70×100cm、深さ50cmの楕円形と推定。平面形を検出することはできなかった。

3007 : トレンチ際で検出したため詳細不明。

3008 : 直径25cm、深さ15cmの円形を呈す。

3009 : 1辺20cm、深さ20cmの方形を呈す。

3010 : 1辺70cm以上、深さ40cm以上で形状は不明。土坑の可能性も。

< H30-N トレンチ >

天守台際から設定したトレンチである。層序は、岩盤層直上まで現代の擾乱を受けていると考えられる。福井地震の影響であろう。GL以下の石積は1段のみで、天守台は岩盤層に直に据えられており、北東角のような掘方は確認できなかった。基底石が据えられた岩盤の標高は26.4mで、北東角で検出した岩盤層よりも40cm高い。岩盤層は天守台から3.5m離れた地点で最も深くなり標高25.6mを測り、北のトレンチ端で25cm高くなる。

深い層からも石瓦片が出土しており、福井地震によって崩壊し、修繕の際に盛土補修された範囲と考えられる。

< H30-S トレンチ >

天守台南側のほぼ中央に設定したトレンチである。

天守台から南に2m付近と4m付近で石列を検出した。北側の石列を石列1、南側のものを石列2とする。天守台から南へ4m付近から8m付近ではほぼ平坦に岩盤層が均されている。この範囲で礎

石を伴うピット 2 基と礎石を抜き取られたと思われるピット 1 基を検出している。さらに南側は岩盤層の自然な起伏がそのまま残っていた。トレーニングの南東隅でピットのような落ち込みを確認したが、埋土に差が確認できず、岩盤の起伏の可能性も考えられる。

石列

石列 1：天守台から 2m の位置で東西方向に 5 石が並んでいる。面は南側を向いているが、真東でなく 5° 南に傾く。据えている石材は長辺が 50 ~ 80 cm の大ぶりの石を据えているが、石の下は土で、さらに下は岩盤層の凝灰岩を碎いた礫が敷かれており隙間も多く不安定である。石材は加工をしていない自然石である。裏込めはほとんどなく土と岩盤の礫が混ざって堆積している。

石の天端は標高 27.4 ~ 27.5m 付近で、石の下場は 27m でほぼ揃っている。

石列 2：天守台から 4m 付近で東西方向に 4 石が並んでいる。面はほぼ真南を向いて据えている。据えている石材は長辺約 80 cm、小口の幅約 50 cm でよく似た大きさ、形状の石を据えている。据え方は岩盤を 10 cm 程度掘り窪めて据方を作り据えている。裏込めは岩盤層の礫を詰めているが、据えている石の周辺には川原石も見られる。据えられた石の面は傾斜が付けられ、控えは奥側で下がる。

石の天端は標高約 27m、下場は 26.7 m で揃っている。本来は石垣であったものが 2 段目より上は崩落したか、解体された可能性が高い。石列 1 は石列 2 の裏込めの上に構築されたと考えられ、石列 2 より後の構築と判断した。

昭和 25 年頃に撮影された写真では、天守台南側に張り出した石垣が写っており、当時の図面にも描かれている。規模は石垣下場で南に 1.2m、東西幅 5m で、石列 1 の位置と合致する。福井地震後の修理では復旧されなかつたが、理由は明らかになっていない。

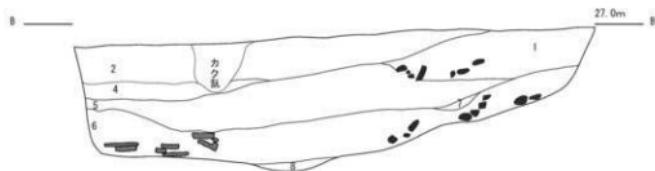
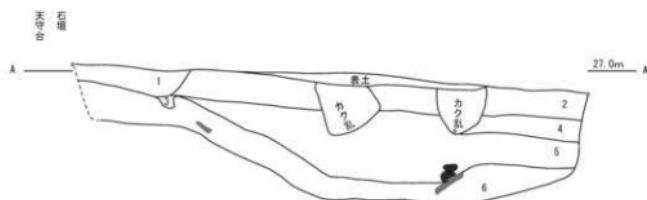
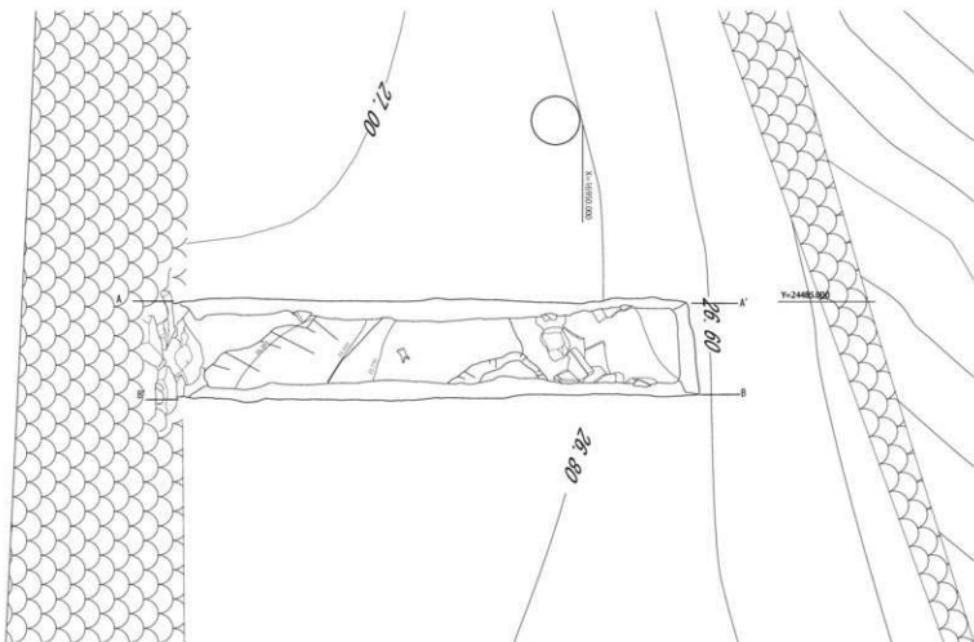
ピット

3031：直径 90 cm の円形で 70 cm の礎石を据える。

3032：直径 80 cm 以上、深さ 20 cm、トレーニング東壁際で検出した。礎石は抜き取られたと思われる。

3033：直径 70 cm、深さ 20 cm、トレーニング東壁際で検出した。礎石が据えられている。

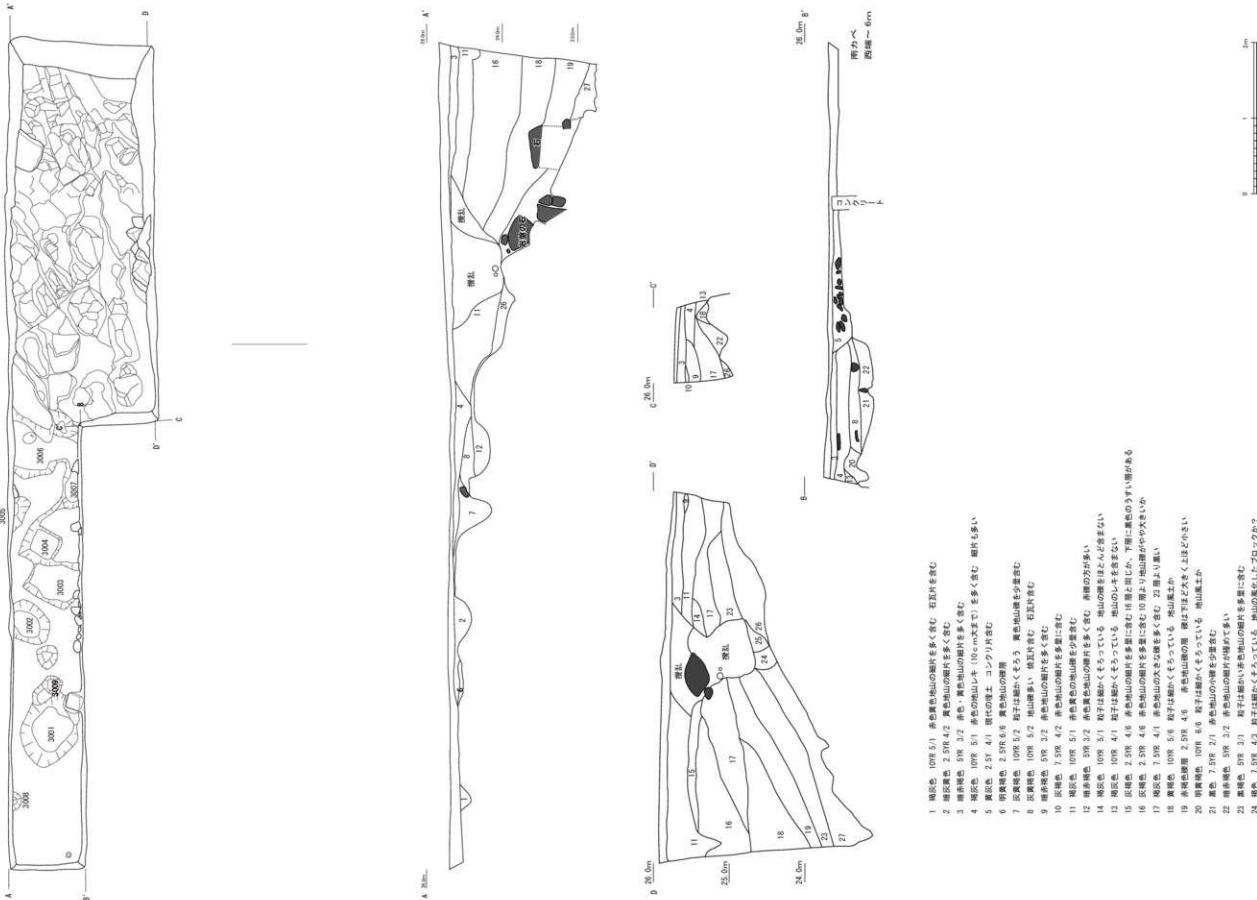
3031 と 3032、3032 と 3033 の芯々距離が一間間隔である。ただし、3031 の礎石天端が 26.7m に対し、3033 の礎石天端が 26.9m と約 20 cm の開きがある。



- 1 黄褐色 10YR 5/6 地山風化土、地山礫を多く含む
- 2 に赤い黄褐色 10YR 5/3 地山風化土、地山礫を多く含む
- 3 砂 配管の被覆土
- 4 灰褐色 7.5Y 5/1 粒子は細かくそろう
- 5 灰褐色 7.5Y 4/2 赤色地山の小礫を含む
- 6 楊灰色 10Y 5/1 砂多い、白い漂礫片を一部で含む
- 7 明黄褐色 2.5Y 6/6 地山風化土
- 8 黒褐色 10Y 3/1 粒子はそろう

0 1m

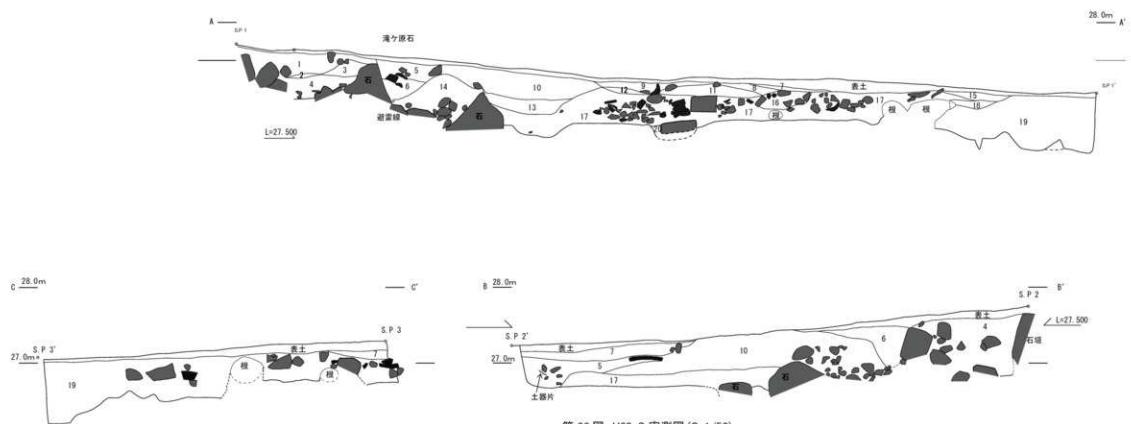
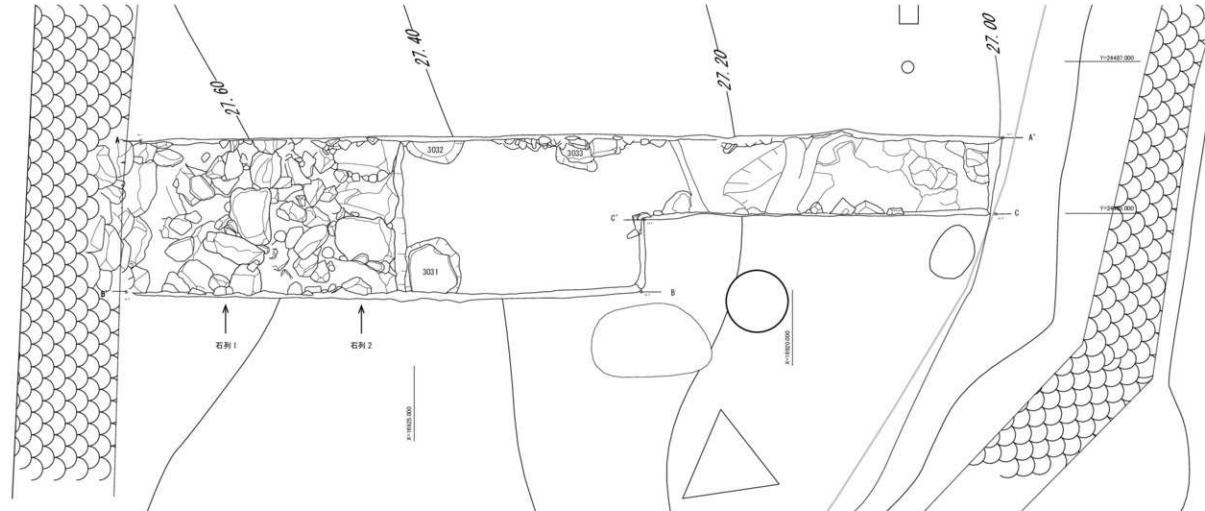
第36図 H30-N 実測図 (S=1/50)



第37図 H30-1 実測図 (S=1/50)

- 1 黒褐色。109.5 1 黄褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 2 黄褐色。2.59±4.7 赤褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 3 黑褐色。5.9±3.2 灰色、黄褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 4 黑褐色。109.5 3.1 砂の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。細孔も多い。
- 5 黄褐色。2.59±1.1 砂の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。コントラリーサイド。
- 6 黑褐色。2.59±6.1 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 7 黄褐色。109.5 2.2 石子の断面を多く見て、黄褐色を含む。
- 8 黑褐色。109.5 2.2 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 9 黑褐色。5.9±2.2 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 10 黑褐色。7.39±4.7 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 11 黑褐色。109.5 5.1 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 12 黑褐色。3.9±2.2 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 13 黑褐色。109.5 5.1 砂子の断面を多く見て、石英を含む。
- 14 黑褐色。2.59±4.4 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、石英を含む。
- 15 黑褐色。109.5 4.1 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。下層は黒褐色の砂岩がやや多くかかる。
- 16 黑褐色。2.59±4.4 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、23.5mより高い。
- 17 黑褐色。7.39±4.1 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、23.5mより高い。
- 18 黄褐色。109.5 5.6 砂子の断面を多く見て、石英を含む。
- 19 黄褐色。2.59±4.4 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。
- 20 黑褐色。109.5 6.6 黑褐色の砂岩の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。
- 21 黑褐色。7.39±2.1 黄褐色の砂岩の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。
- 22 黑褐色。3.9±2.2 黄褐色の砂岩の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。
- 23 黑褐色。5.9±3.1 砂子の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。
- 24 黑褐色。5.9±4.3 砂子の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。
- 25 黑褐色。5.9±2.1 砂子の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。
- 26 黑褐色。109.5 3.1 砂子の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。

27 黑褐色。109.5 2.1 砂子の断面を多く見て、109.5mまでを多く含む。



- 1 反黄褐色 10YR 5/2 石瓦の粒含む。黄色地山の粒子小さく多い
 2 赤褐色 5YR 4/8 青色地山の層
 3 反黄褐色 10YR 4/2 黄色地山の粒子。小さい。石瓦まじる
 4 褐褐色 10YR 5/1 黄色地山の層。大きい。
 5 赤褐色 5YR 4/9 地山レーピーの層。軽大きい
 6 褐褐色 7.5YR 5/2 塗貝土
 7 赤褐色 5YR 4/6 地山の層
 8 黄褐色 2.5YR 4/1 沖積（現代）
 9 反黄褐色 10YR 5/2 地山の礫片を少量含む
 10 黑褐色 7.5YR 3/1 地山小砂質。漂砾片含む
 11 程赤褐色 5YR 3/4 細かな地山層。漂砾片含む
 12 赤褐色 5YR 4/8 地山の層
 13 赤褐色 5YR 4/9 青と黄の地山礫片を多く含む
 14 にじみ黄褐色 10YR 4/3 地山のしわ多い。石瓦まじる
 15 黄灰色 2.5YR 4/1 砂（現代の土）
 16 黑褐色 10YR 3/1 地山の層多い。石、石瓦含む。漂砾片の白色粒含む
 17 棕褐色 10YR 4/1 細かな地山のしわと含む（少量）
 18 黑褐色 10YR 2/1 自然の土壤の混じり
 19 黑褐色 10YR 3/1 游谷石瓦混じる。円形孔含む。地山のレキ片含む
 20 黑褐色 10YR 3/2 粒子そろう。地山の粒子の混入っぽい

第38図 H30-S 実測図 (S=1/50)

(11) 令和元年度の調査

本丸では H30-1 トレンチに隣接するように $4 \times 6\text{m}$ のトレンチ (R1-1) を設定し、天守台南側の H30-3 トレンチの東側に $2 \times 5\text{m}$ (R1-S1 トレンチ) と西側に $2 \times 5\text{m}$ (R1-S2 トレンチ) を設定した。

< R1-1 トレンチ >

本丸の建物跡の把握及び 30 年度に確認された本丸の造成過程を確認することを目的として調査を行った。結果、調査区の 4 割ほどの範囲で近代以降の擾乱を受けていた。西側から南東角にかけて大きく岩盤が掘り進められている。23, 27 年度に検出された落ち込みと同じもので、底面の標高は $24.3 \sim 24.4\text{ m}$ 付近である。

東側でも大きく落ち込むが、こちらは遺構の可能性と H30-1 トレンチ東側で検出した岩盤層の自然傾斜の可能性の両方が考えられる。

遺構は平面形で確認できたものは土坑 1 基と溝状の遺構で、掘り下げ過程で土坑、ピットが検出された。

土坑

SK0101 : $145 \times 110\text{ cm}$ 以上、深さ 30cm の方形に復元できる。底部の形状が不鮮明で、別の遺構が重なっていることも考えられるが、平面形では判断できなかった。土師器皿が出土している。

SK0102 : $100 \times 120\text{ cm}$ 、深さ 30cm の方形と推定できる。3007 と重なる。上層で丸瓦片が出土。

SK0103 : $250 \times 150\text{ cm}$ 以上、深さ 90 cm 以上で擾乱を受けているため規模は不明である。石瓦を含むが下層は黒色土が堆積し、H30-1 トレンチで検出した東側下層の堆積状況によく似ている。

SK0104 : $100 \times 140\text{ cm}$ 以上、深さ 30cm の方形と推定できる。3003 と同一の遺構。上面で SD0101 が重なる。

ピット

0101 : 1 辺 45 cm 、深さ 65 cm の方形を呈す。調査区北東角の壁際で検出。

0102 : $60 \times 60\text{ cm}$ 以上、深さ 50 cm で方形と推定。調査区壁際で検出したため詳細不明。

0103 : 1 辺 50 cm 、深さ 30cm の方形を呈す。

溝

SD0101 : 調査区北側の中央付近から S19°W で伸び、幅 20 cm 、深さ 10 cm の溝で、上層で川原石を詰めている。埋土にコンクリート片が含まれることから近代以降の暗渠か。調査区北壁際で 90 度東に屈曲し、SK0104 に重なる。平面では SK0102 が切っている。

< R1-S1 トレンチ >

H30-S トレンチの 2m 東に石列 2 の延長を確認するために設定した。

調査の結果礎石を伴うピットと石の据え方と思われる溝などを検出した。GL-70 cm で岩盤層がある。その直上層まで石瓦が混じる土が堆積している。遺構面は凹凸が多く、木の根によって擾乱を受けたと思われる。南西角付近で深く掘り進められ、丸太に針金が巻いたものが見つかったが意図や目的は不明。近代以降のものと思われることと、桜の木の根があったため今回は拡張しての調査を見送った。

ピット

0105 : $40 \times 30\text{cm}$ 以上、深さ 40 cm の方形を呈す。石列 2 よりも天守台に近い位置で検出。

0106 : 直径 70 cm 以上、 60 cm の礎石を据える。礎石の天端で標高 26.7m を測る。

溝

SD0102：幅 80 cm、深さ 30cm で東西方向に延びる。H30-S トレーニングの石列 2 につながる掘方と思われる。埋土中には石瓦が含まれる。南側方付近で天守に使われている丸瓦とは規格の異なる丸瓦が出土している。

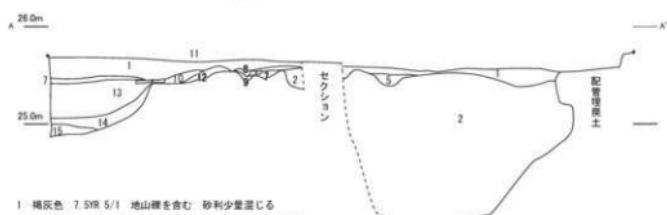
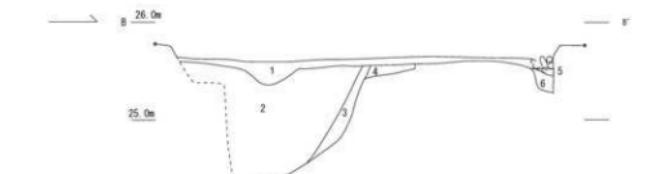
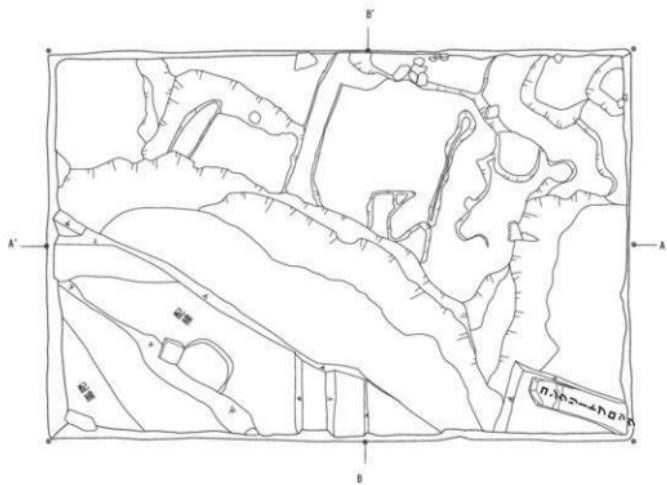
< R1-S2 トレーニング >

H30-S トレーニングの 1m 西に石列 2 の延長を確認するために設定した。

天守台の石垣は GL より下に 3 段が積まれていた。自然石を用いた野面積みで、詰石を詰めている。根石は岩盤の上に据えられているようで、掘方はない。岩盤層は凹凸が激しく平坦ではない。

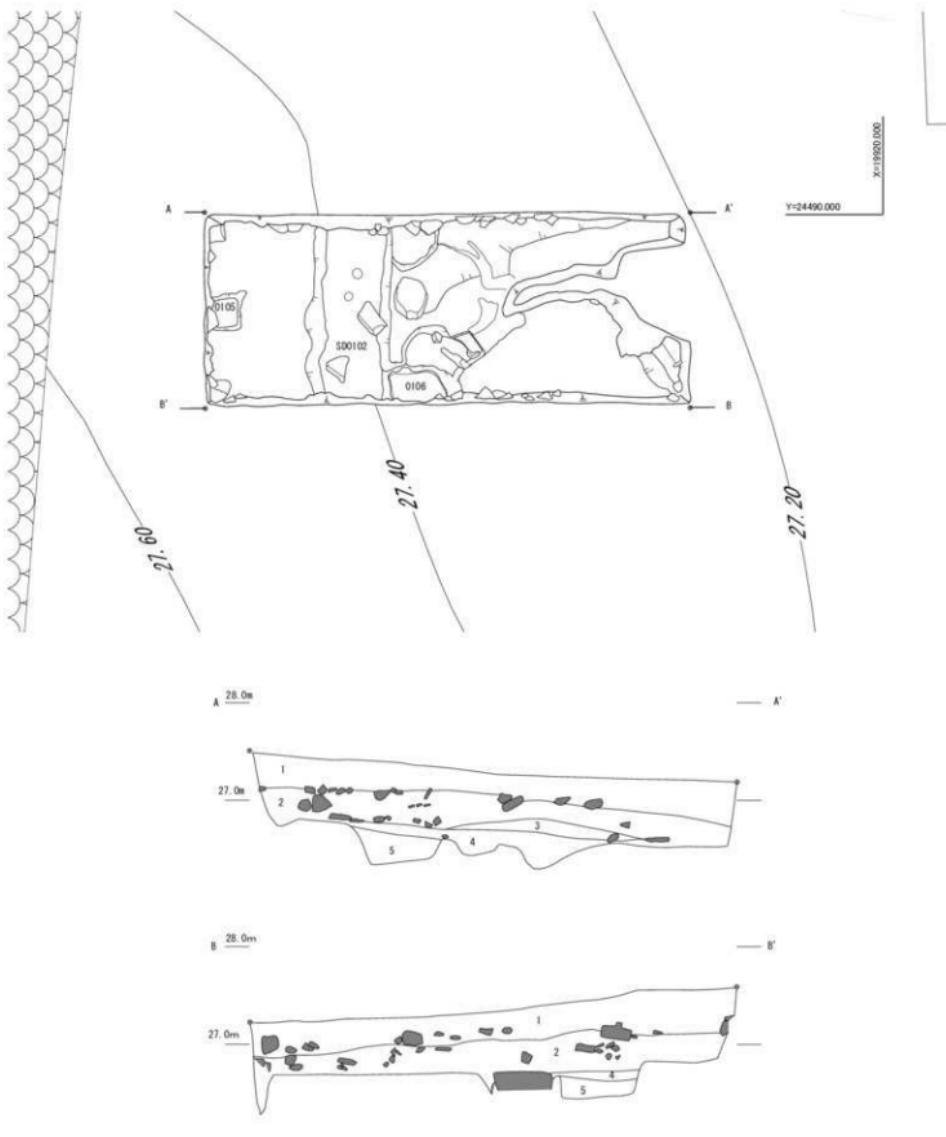
新たに検出した石垣は天守台の根石から 2 段目に食い込んでおり、天守台と同時期に構築されたと思われる。石垣は天守台から南に延び、3m 地点で東に屈曲する。H30-S で検出した石列 2、R1-S1 トレーニングの SD0102 と同じ造構と判断でき、南面の石垣は 8m 以上あったことがわかる。西面石垣の根石は岩盤の上に据えられ、掘方は無い。南面石垣の根石は詰石で判断できなかった。築石は多いところで 3 段が残っている。築石寸法の一例は面の幅 70 cm、高さ 30cm、控え 80 cm、裏込めは円礫が多い。石垣西面の角度は 62° で、南面はおよそ 70°、現在の天守台の傾斜が概ね 60° である。隅角部は整形した石を使い、角は 90 度より鋭角である。

南面石垣から 25 cm 離れて礎石がある。岩盤層の上に置かれており、平面形でピットは検出できなかった。礎石の天端は標高 26.7m で、H30-S トレーニングの 3033、R1-S1 トレーニングの 0106 に据えられている礎石の高さと矛盾しない。

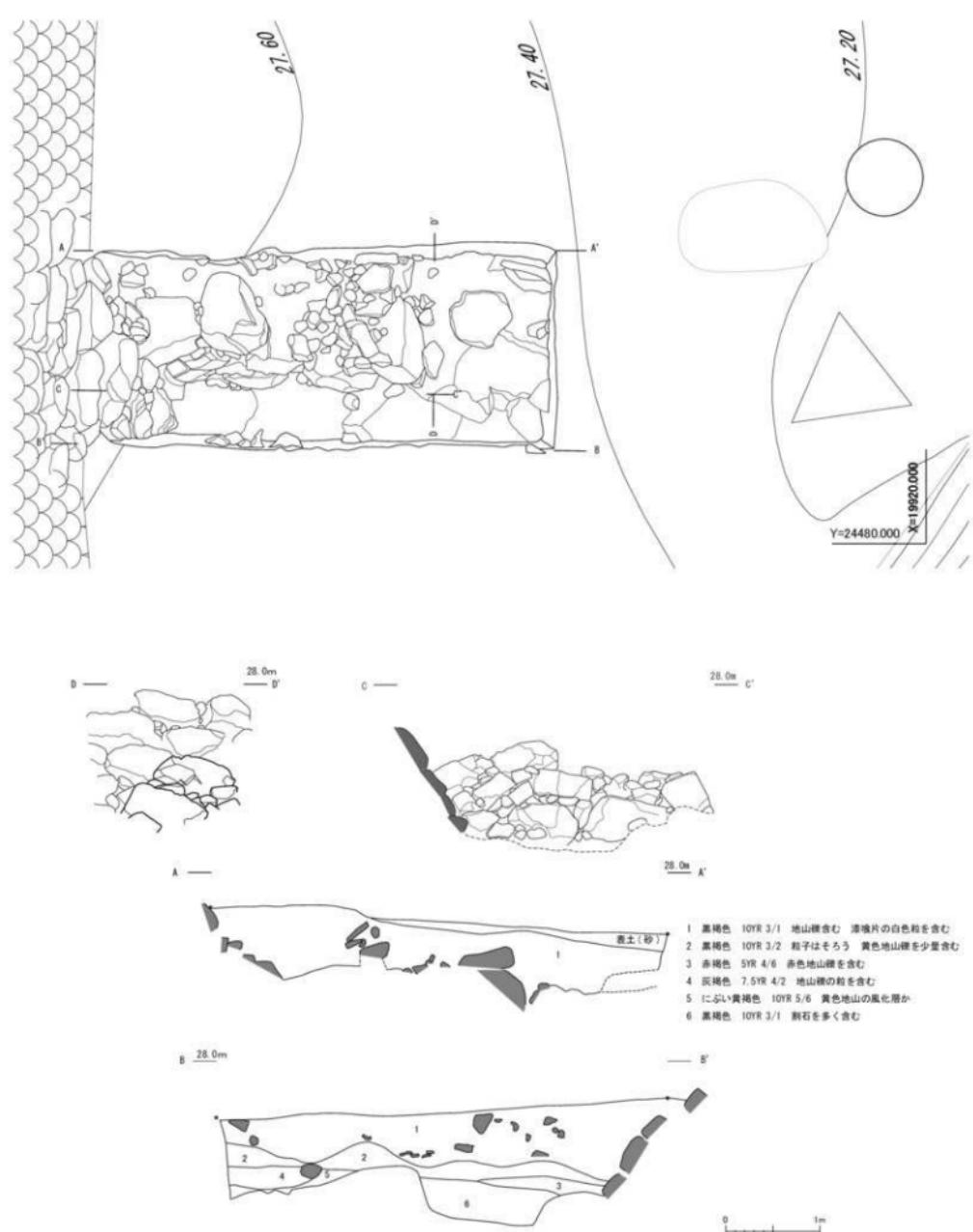


- 1 暗灰色 7.SYR 5/1 地山礫を含む 砂利少量混じる
- 2 暗黄褐色 10YR 4/2 地山礫小片を多く含む 石瓦混じる
- 3 暗黄褐色 10YR 5/2 地山礫多い
- 4 明赤褐色 SYR 3/2 赤岳地山風化層か
- 5 黄灰色 205Y 4/1 雪融含む
- 6 暗灰色 10YR 5/1 地山礫を含む
- 7 暗黄褐色 10YR 5/2 地山礫多い
- 8 暗灰色 10YR 6/1 表層の砂利を含む
- 9 明赤褐色 SYR 3/2 赤岳地山風化層か
- 10 黒褐色 7.SYR 3/1 赤色地山の礫を多く含む
- 11 暗灰褐色 10YR 6/1 小円錐と表層の砂利を含む
- 12 明赤褐色 SYR 3/2 赤色地山風化層か
- 13 暗灰色 7.SYR 4/1 赤色地山の細片を多く含む
- 14 にぶい黄褐色 10YR 5/4 赤色地山の細片を多く含む
- 15 明赤褐色 SYR 3/2 赤色地山の風化層か

第39図 RI-1実測図 (S=1/50)



第40図 R1-S1 実測図 (S=1/50)



第41図 R1-S2 実測図 (S=1/50)

第2節 丸岡城城山の石垣分布調査

はじめに

現在の城郭としての丸岡城は、天守のある城山を残して、内堀は全て埋め立てられている。城山についても明治以降様々な改変が重ねられ、江戸時代の繩張りがどれほど残っているか、判然としない。そこで、まずは城山の遺構の残り具合を整理するため、石垣の分布状況を整理する。

整理する範囲は城山と呼ばれる範囲で、坂井市丸岡町霞1丁目59-1、59-2、58を対象とする。

【現状把握】

現在の城山で確認できる石垣を、コンクリート製擁壁を除いて大別するとⅠ：自然石の割石を野面積みで積んだ石垣、Ⅱ：自然石の切り石を谷積みでつんだ石垣、Ⅲ：自然石の円礫をコンクリート練り積みで積んだ石垣の3種である。これを色分けしたものが第42図である。併せて城山の各部の名称を整理した。本稿ではこの呼称で統一している。

ここで、絵図から江戸期の石垣の状況について検討しておく。

国京克巳氏が「越前丸岡城の門遺構調査報告書」において、丸岡城に関する絵図21点を掲載している。このうち、描かれた時期が迫るものは慶長期「円陵略」、正保4年「正保城絵図」のうち、越前国丸岡城之絵図、天保7年「円陵輿地略図」であろう。また、富原文庫所蔵の「陸軍省城絵図」は明治6年に描かれたものとされる(2017. 富原)。加えて、明治初期に撮影された古写真から、幕末時点での石垣が積まれていたと推定される範囲が分かる。これらの資料を整理し、城山の繩張りを整理しておく(本書第12図右下)。

松ノ丸の建築物は蔵(宝蔵)と不明門である。水ノ手への道との境界に豊原門、本丸との境界に埋門があり、埋門の石垣北端に櫓があった。松ノ丸の斜面については、「円陵略」では斜面全体が自然傾斜のような表現であるが、「正保城絵図」では北西側の斜面上側に石垣が描かれ裾は自然傾斜で表現されている。北側から北東、西側にかけては石垣の表現は見られず、自然傾斜の表現である。「円陵輿地略図」でも松ノ丸北から西にかけての斜面に石垣の表現は見られないが、「陸軍省城絵図」では上側が石垣、裾にかけて自然傾斜の表現がされている。このことから、松ノ丸は上部に石垣を積み、下部は自然傾斜であったと考えてよい。ただし、絵図によって表現に差があることから、時期によって異なる可能性があることと、石垣の高さは不明である。

松ノ丸東側斜面の裾は東ノ丸、搦手とつながる。石垣と南端に東櫓があったことがいずれの絵図からも読み取れる。また、いずれの絵図でも東櫓より南側に石垣は無く、水ノ手まで斜面で、水際に櫓のような表現がされている。

水ノ手の建築物は蔵のみで、松ノ丸に至る道の途中で隠居曲輪とつながる土橋と石橋門があった。石橋門から西に折れて水ノ手に回り、西から本丸に至る階段がある。いずれの絵図でも、水ノ手北側は松ノ丸から続く石垣が斜面の上側に積まれ、途中から裾まで石垣が積まれる。西側も南側まで石垣が積まれ、水ノ手が南側中央付近まで及ぶ。内堀に面する水ノ手の形状はいずれの絵図もよく似ている。水ノ手から本丸に至る階段部分が絵図によって表現が異なる。「円陵略」、「円陵輿地略図」では直線的だが、「正保城絵図」では虎口状の構造が見られる。明治19年撮影とされる写真では、既に斜面を斜めに斜路が附けられている。

本丸の区画は周囲を石垣がめぐらされていたと考えられる。松ノ丸との境は埋門があり、本丸の北から西、水ノ手にかけては2段の石垣があったことがいずれの絵図からもうかがい知ることができる。また、埋門東側から南側、水ノ手のあたりにかけても、上部を石垣、株を自然傾斜のような表現が共

通している。天守台下のイヌバシリの石垣は、絵図によって若干表現が異なるが、天守台南東の階段から西側までの範囲は共通している。階段部分は両側に石垣が積まれた門のような表現がされている。

これらを踏まえて、主に斜面部の石垣残存状況の確認を行った。その結果が第43図である。

松ノ丸北西斜面は石垣がまとまって確認された（石垣①～⑥）。最大60cm程度までで、加工の程度が少ない石を積んでいる。連続性があると考えられ、江戸期まで遡る可能性が高い。本丸北下段は、石は散見されるが積まれたものは確認できていない（石垣⑦、⑧）。本丸北側上段は、上下二段の石垣が残っている（石垣⑨、⑩）。下段は幅33.8m、高さ5mで、上段は幅12.1m、高さ2.4mの範囲で残っている。下段の石垣には宝篋印塔の転用や、間詰石に石瓦が使われているなど、近代以降に積みなおされた可能性も考えられる。さらに西では斜面裾に自然石が並んでいる（石垣⑪）。水ノ手から本丸につながる階段石垣の外側に石垣が残っている（石垣⑫）。平成25年度の調査で周辺を調査したところ、裏込めの広がりを確認している。

本丸南側の上段、イヌバシリの崖側斜面は石が散見されるが積まれたものは確認できない。本丸南側下段は石が散見されるが積まれたもの、並べられたものは確認できない。本丸東側上段斜面は木の根に絡む石垣が確認できる（石垣⑬）。広範囲にわたって石が散見され、一部は連続性が想定できる（石垣⑭、⑮）。いくつかの石は原位置を留めている可能性を考慮したい。

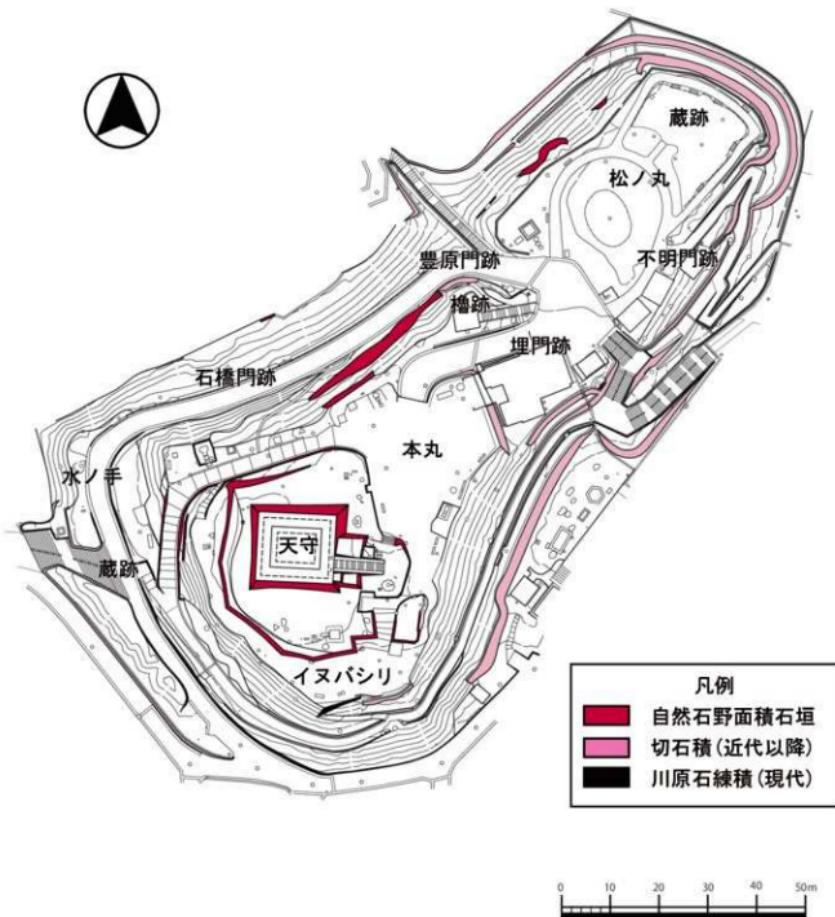
このほか、イヌバシリの石垣はいずれの絵図でも確認できる。地震による積み直しの可能性は考えられるものの、平面形は踏襲していると思われる（石垣⑯～㉚、㉛）。

まとめ

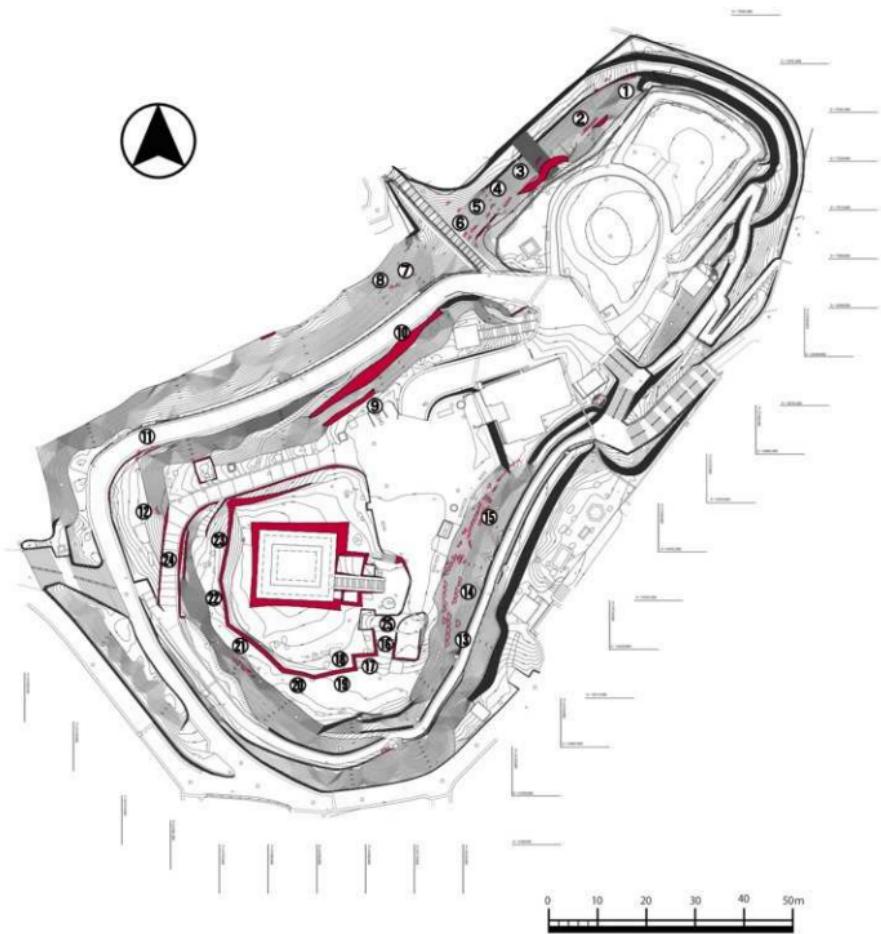
松ノ丸北東から東にかけては江戸期に石垣があったかも含めて不明な点が多い。現状新しい時代の石積みでおおわれており、調査が難しい。一方で松ノ丸北西斜面は広範囲に残っており、比較的残りが良いと思われる。本丸北側下段は石垣としての残りが良くないものの、上段に上下2段の石垣が露出している。また、水ノ手にかけての上段斜面裾部では石が列状に残っている。水ノ手の縄張り形状は絵図でも表現の差が大きく不明な点が多い。一部に石が残っていること、発掘調査で裏込めの範囲が把握できたことから、形状を推定する一助となるだろう。本丸東側は石垣があつたと想定される上段で痕跡が広範囲に確認された。

江戸期に石垣が積まれていた範囲でその痕跡が確認できている。今後発掘調査によってより詳細な形状把握が進むことを期待したい。

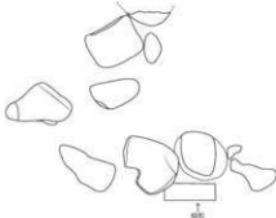
※石垣㉚～㉛の写真是デジタル一眼レフカメラで撮影した写真をAgisoft社のPhotoScanで3次元データを作成し、MeshLabでオルソ画像に加工したものトロミングして掲載した。スケールは任意である。

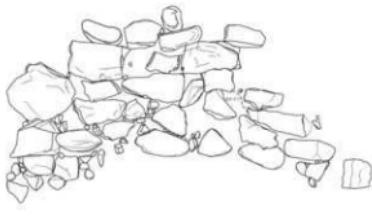


第 42 図 現況石積整理図

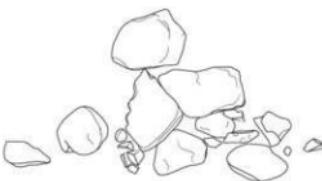


第 43 図 石垣分布図

石垣番号	①	残存長	1.3m	残存高	1.1m	備考	岩盤質の比較的小さい風化岩を使っている。
写真					図面		
 						縮尺1/30	

石垣番号	②	残存長	4.15m	残存高	1.5m	備考	一部石が割られている
写真					図面		
						縮尺1/50	

石垣番号	(3)	残存長	4.35m	残存高	1.67m	備考	左側はネットが張ってあるが、石垣は続いている
写真							
図面	 縮尺 1/50						

石垣番号	(4)	残存長	1.90m	残存高	0.93m	備考	
写真					図面		
						縮尺 1/30	

石垣番号	⑤	残存長	2.22m	残存高	0.57m	備考	
写真					図面		
						縮尺 1/30 0 2m	

石垣番号	⑥	残存長	3.37m	残存高	0.59m	備考	
写真					図面		
						縮尺 1/30 0 2m	

石垣番号	(7)	残存長	0.81m	残存高	1.05m	備考
写真		図面				
 		 				縮尺 1/30

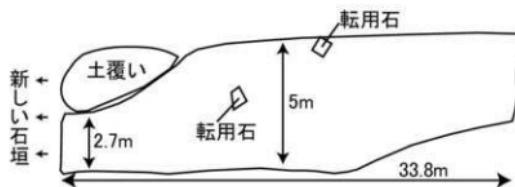
石垣番号	(8)	残存長	1.22m	残存高	0.39m	備考
写真		  				
図面						縮尺 1/30

石垣番号	⑨	残存長	33.8m	残存高		備考
------	---	-----	-------	-----	--	----

写真



図面

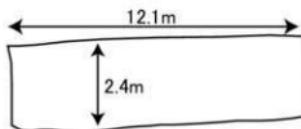


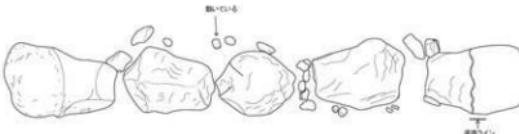
石垣番号	⑩	残存長	12.1m	残存高	2.4m	備考
------	---	-----	-------	-----	------	----

写真



図面

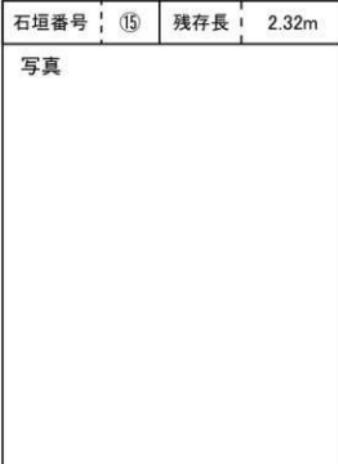


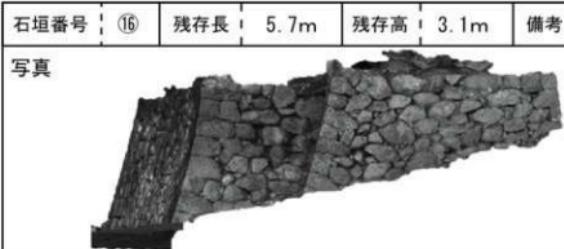
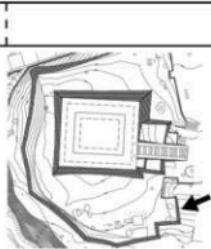
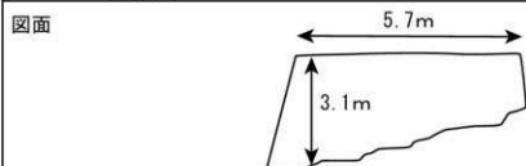
石垣番号	⑪	残存長	3.2m	残存高	0.79m	備考	
写真							
図面							縮尺 1/30

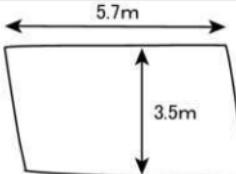
石垣番号	⑫	残存長	3.75m	残存高	0.69m	備考	
写真							
図面							

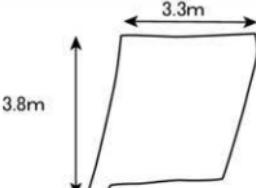
石垣番号	(13)	残存長	7.1m	残存高	0.65m	備考
写真						
図面						
縮尺 1/50						

石垣番号	(14)	残存長	0.99m	残存高	0.28m	備考
写真						
図面						
縮尺 1/30						

石垣番号 15	残存長 2.32m	残存高 1.14m	備考
写真		図面	
			
		縮尺 1/30	

石垣番号 16	残存長 5.7m	残存高 3.1m	備考
写真			
			

石垣番号	⑪	残存長	5.7m	残存高	3.5m	備考
写真						
図面						

石垣番号	⑫	残存長	3.3m	残存高	3.8m	備考
写真						
図面						

石垣番号	⑯	残存長	9.9m	残存高	3.8m	備考
写真						

写真

図面

石垣番号	⑰	残存長	7.6m	残存高	3.7m	備考
写真						

写真

図面

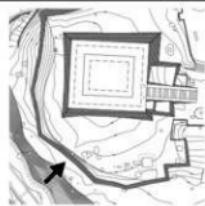
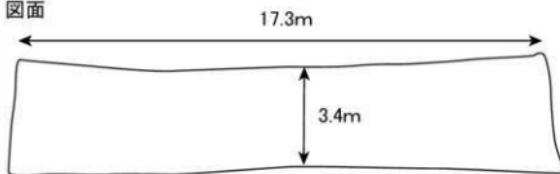
石垣番号	(21)	残存長	17.3m	残存高	3.4m	備考
------	------	-----	-------	-----	------	----

※スケールは任意

写真



図面



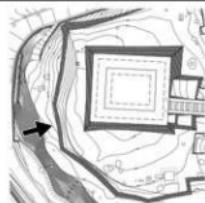
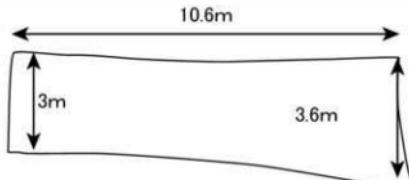
石垣番号	(22)	残存長	10.6m	残存高	3.6m	備考
------	------	-----	-------	-----	------	----

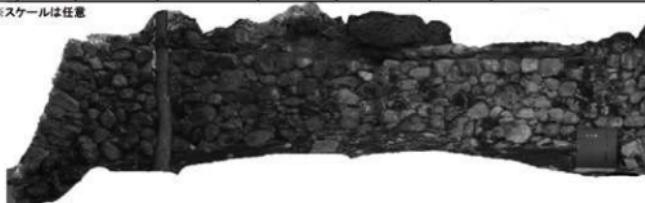
※スケールは任意

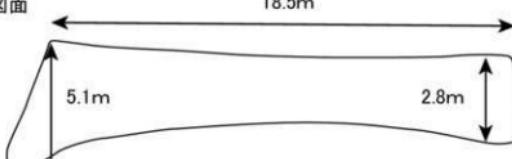
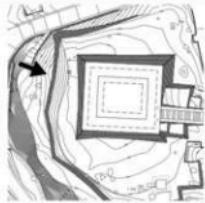
写真



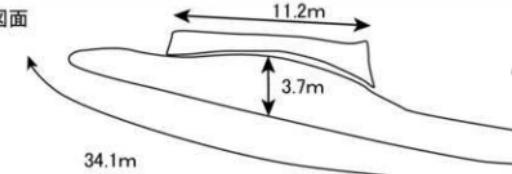
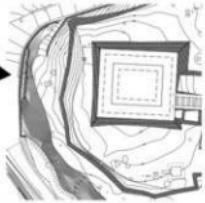
図面



石垣番号	(23)	残存長	18.5m	残存高	5.1m	備考	
写真							
		※スケールは任意					

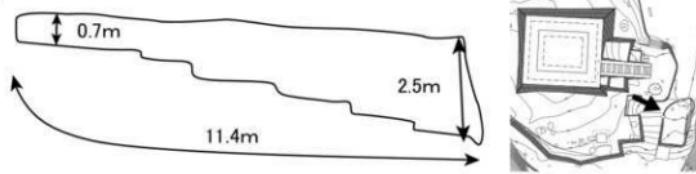
図面		
----	---	---

石垣番号	(24)	残存長	34.1m	残存高	3.7m	備考	
写真							
							

図面		
----	---	---

石垣番号	㉕	残存長	11.4m	残存高	2.5m	備考
写真						



図面	
----	---

第4章 遺物

丸岡城の発掘調査における出土遺物を紹介する。令和元年度までの発掘調査でコンテナ 244 箱分の遺物が出土している。第3章でも触れたが、近代以降も継続的に利用されていたため、遺物も近代以降の遺物と近代以前の遺物が混在している。搅乱を受けていない遺構を遙定することが難しく、遺物から遺構の前後関係を述べることが難しい。

このため、本報告では遺物の種類ごとに概要を述べるに留める。出土位置等については観察表を参照されたい。

(1) 土器・陶磁器

伊万里

1は皿、3、2、4は碗である。2、3は一重網目紋で量産品か。4は高台に砂粒が溶着している。5～10は近代以降のものと思われる。

唐津

11～14は碗である。11は高台が竹の節高台、内側は黒い釉。12は三日月高台で透明釉をかける。14は長石釉かけ流しで、高台は無釉、粗く削る。16、17は皿である。いずれも小口径で灰釉。

15は鉢であるが時期は新しい。

瀬戸・美濃

18、19は碗である。19は天目の口縁である。20は器種不明だが、鉄釉がけの体部である。21は擂鉢の口縁である。縁を外側へ折り曲げて鉄泥をかける。

備前

25は擂鉢である。斜め方向のスリメがあることから乗岡編年の近世1期であろう。

越前焼

26、27、28は甕である。26と27は同一個体と考えてよい。十字のスタンプが押される。28は底部付近で内部に灰釉、外面は鉄泥流し掛け。

30、31は甕の底部である。いずれも大型品と思われ、時期は新しい。

32は擂鉢である。口縁までスリメがあることから新しい時期のものである。

中国

22は猪口である。

肥前系

24は肥前系の甕・壺の体部である。内面に同心円状の当て具痕がある。

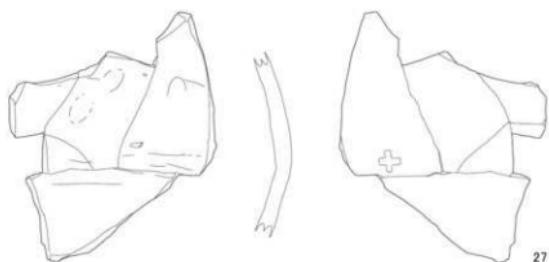
土師器

33は本丸のSK02から出土している。上層から出土していることから遺構に伴うと断定できない。34～40はR1-S1トレンチ下層で出土している。比較的の残りが良く、規格も揃っている。中原編年のBb類に含まれる。41は口径が大きく 12.6 cm を測る。SK0101 出土。

51～55は平成 28 年度調査地の石積遺構の南側下層から出土した遺物である。52、53、55は灯明皿である。



第44図 土器・陶磁器 (S=1/4)



27



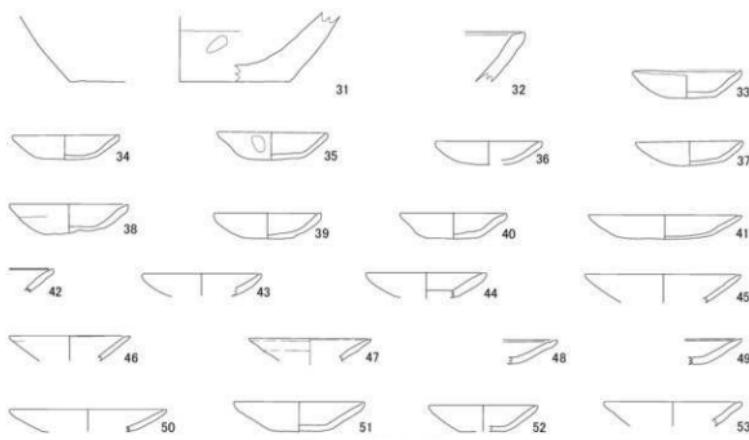
28



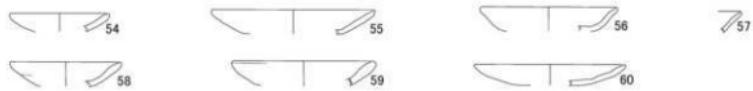
29



30



第45図 土器・陶磁器 (S=1/4)



第46図 土器・陶磁器

(2) 金属製品

発掘調査で出土した金属製品は建築資材が主で、近代以降に使われた洋釘、針金が多く含まれ、江戸期にまで遡ると思われる和釘のうち残り具合が良いもの8点を図化した。このほか銭貨5点が出土しており、このうち江戸時代まで遡ると判別可能な3点を図化した。

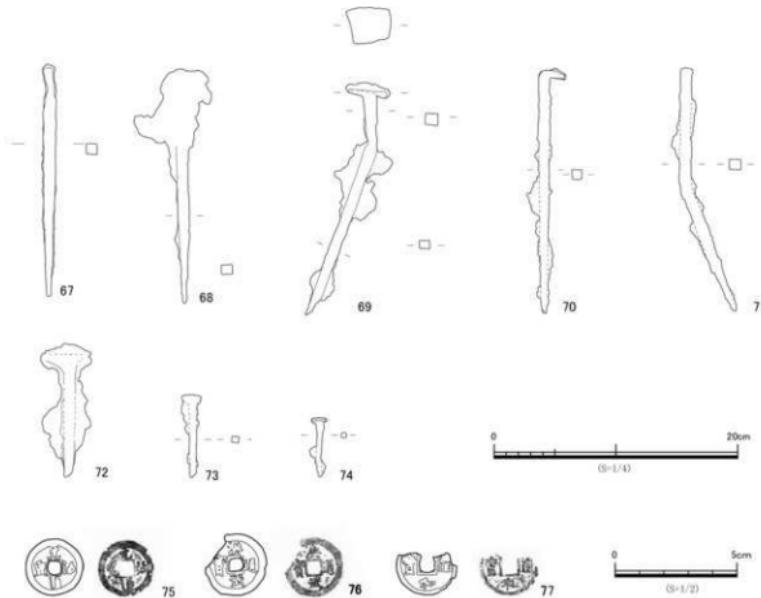
1. 釘

67～71は鉄釘である。長さは20センチ前後で、規格から天守の石瓦の固定に使われたものと思われる。69は巻頭釘、70は皆折れ釘である。67、71は頭が無い。72、73は頭巻釘で、長さは10cmほどである。74は平丸頭釘である。

2. 銭貨

銭貨は発掘調査で5点、石垣分布調査の過程で寛永通宝1点を表探している。なお、このうち1点は昭和九年一銭銅貨であるため報告を省略したい。

提示した銭貨は元祐通宝1点、洪武通宝1点、□和通宝1点である。いずれも腐食が激しく状態は良くない。



第47図 金属製品・銭貨 (S=1/4: 67～74 S=1/2: 75～77)

(3) 石製品

石製品はそのほとんどが瓦である。本丸の発掘調査で出土した遺物の概ね9割は石瓦とその破片の笏谷石である。このうち残り具合が良いもの79点を提示した。

1. 石瓦

軒丸瓦(78～81)、丸瓦(82～122)、軒平瓦(123～125)、平瓦(126～146)、棟瓦(148～152)、蓑甲瓦(147)である。

軒丸瓦は無紋のもの(78)、円を持つもの(79、81)、右三つ巴を刻むもの(80)の3種である。78は貫通しない釘穴を持つ。三つ巴を刻む80は切除して二次加工を試みた痕跡が確認できる。

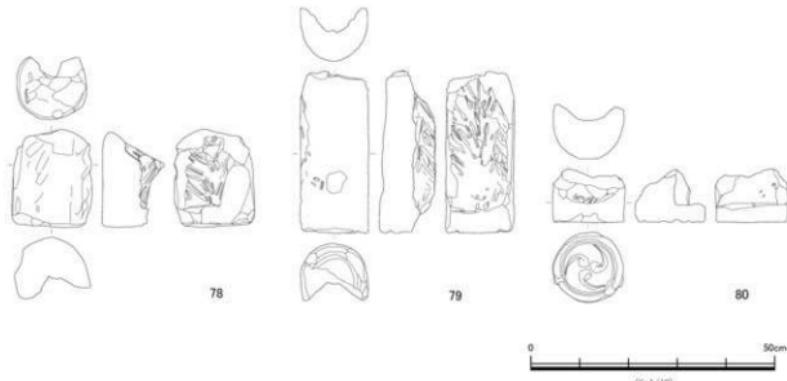
丸瓦は基本片側に連結部(玉縁)を持ち、10～15mm四方の釘穴を1～2個持つ。外面はツル研ぎ整形し、ノミもしくはチョウノで表面を削って平滑にする。内面はツル研ぎで谷状に整形し、長側縁にケズリを加えて平瓦との接地面をタイトになるよう調整している。釘穴の穿孔はコツルとノミの両方が見られるが混用されていない。短い丸瓦で両側に連結部を持つものがある(92、106、108)。通常の連結部は別の丸瓦の瓦尻が上に重なるが、瓦尻も裏側を削って連結部を作っている。既存の丸瓦に維ぎ足して長さを調整した、修理時の施工によるものであろう。

軒平瓦は無紋の瓦当である。軒平瓦の瓦当に文様を持つものは現段階では確認できていない。125は身が極めて薄い。

平瓦は比較的の残りが良くない。表面はツル研ぎで整形してケズリによって平滑にしている。釘穴は上側中央付近に縦2カ所のものと両側2か所にあけるものがある。裏面は葺足部分を薄く削っている。丸瓦の縁が当たる部分を削っているものも見られる。146は昭和15～17年修理工事時に施工された滝ヶ原石製のものである。笏谷石製のものに比べてやや厚い。

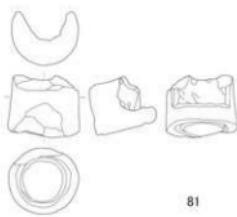
147は蓑甲瓦である。瓦当にあたる部分はケズリによって平滑にし、瓦尻に方形の釘穴を持つ。

棟瓦は148、151、149がある。板扉等の棟瓦であるが、寸法が異なることから屋根の規模が異なると推定される。150、152は降棟の棟瓦である。天守のものではなく、入母屋造、もしくは寄棟造の建物に使われていたと推定される。類似例として和歌山県高野山の松平秀康靈廟がある。

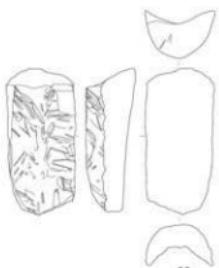


2. 石製品

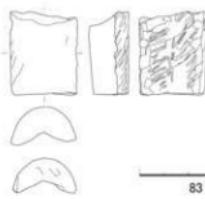
第48図 石製品 (S=1/10)



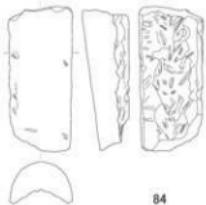
81



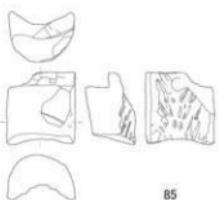
82



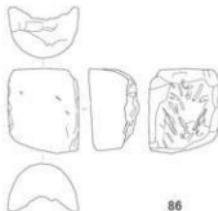
83



84



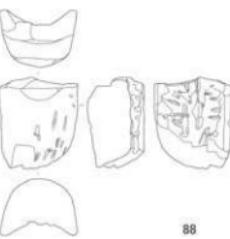
85



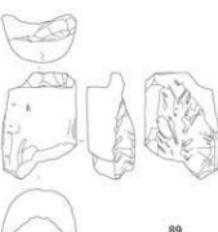
86



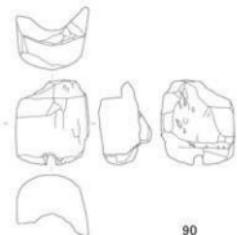
87



88



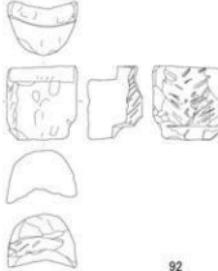
89



90

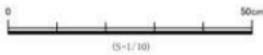


91



92

第49図 石製品 (S=1/10)





93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104

第50図 石製品 (S=1/10)





105



107



108



110



111



113



114



116



第 51 図 石製品 (S=1/10)





117



118



119



120



121



122



123



124



125



126



127



128

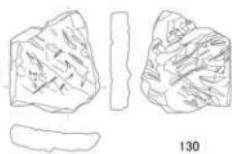


129

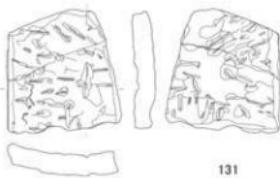
第52図 石製品 (S=1/10)



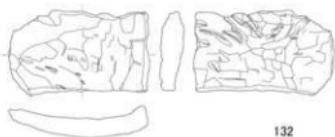
(S=1/10)



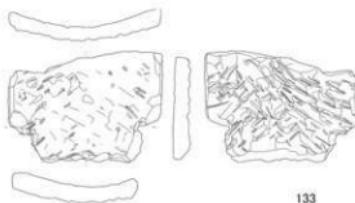
130



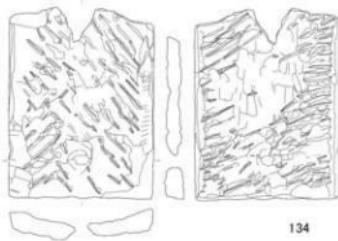
131



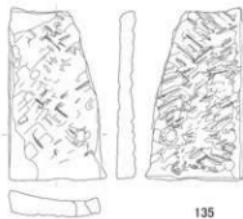
132



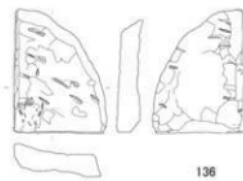
133



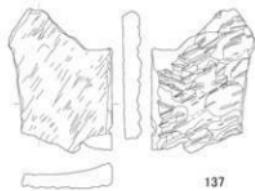
134



135



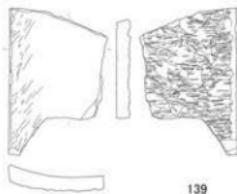
136



137



138



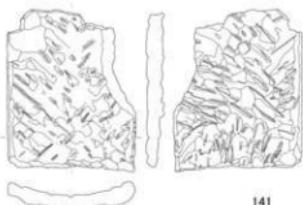
139



第 53 図 石製品 (S=1/10)



140



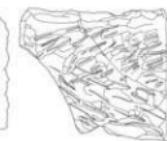
141



142



143



144



145



146



147



148



149



第 54 図 石製品 (S=1/10)



第 55 図 石製品 (S=1/10)

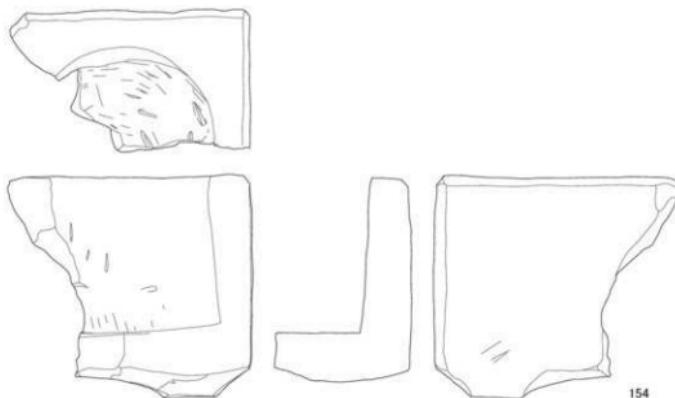
154 は焜炉と思われる。1辺 24 cm の直方体で直径 18 cm の円筒形に縁りぬき、底面に短い脚が着く。表面は極めて平滑に加工され、火口は煤が付着しているがツルによる加工痕が確認できる。

容器状製品

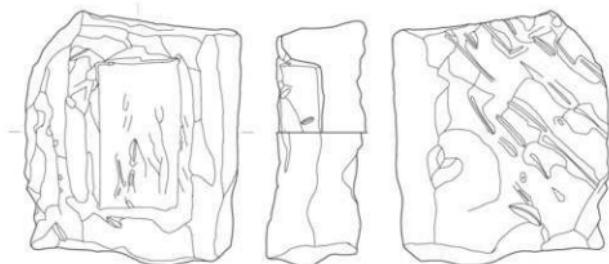
155 は加工が荒く、側面は破断面そのままで、製品として完結しているか、判断できない。裏面の加工と容器部分の加工に使われているツル工具の刃痕が異なることから、容器に再加工されたとも考えられる。

不明石製品 (156)

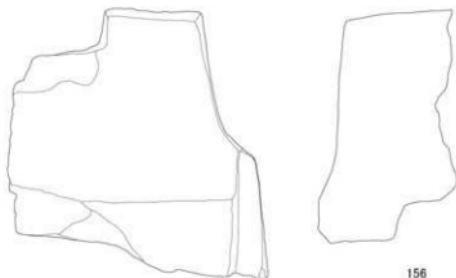
材質はあわら市宮谷か熊坂で産出する火山疊凝灰岩である。上部は圓の字型を呈し、底部はダボ状に窪んでいる。図示したものは本来のものの 1/4 にあたるようで、復元すると横約 50 cm、高さ約 30cm、厚さ約 30cm である。



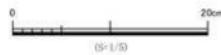
154



155



156



第 56 図 石製品 (S=1/4 : 155 S=1/5 : 154,156)

(4) その他の出土遺物

弥生土器

61、63、62は弥生土器である。62は高坏の脚である。脚上部に2条のへら書き沈線と斜めの列点紋を施す。表面は黒くすりけている。61と63は広口壺の体部と頸部である。



第57図 その他の出土遺物 (S=1/4)

第2表 遺物観察表（陶磁器・土師器）

図版番号	器種	土師質：灰芯油痕 陶磁器：度地	法量			土師質：胎土・色調 陶磁器：施薬・装飾	整形・調整・その他	調査年	出土位置
			口径	底径	高さ				
1	碗	(伊万里)	6.7	2.7	2.9	丸付		2013	H24-2 上層
2	碗	(伊万里)	4.8	(3.5)	染付			2015	H27 西側
3	碗	(伊万里)	4.6	(5.2)	染付	網紋		2015	H27 梅色土
4	碗	(伊万里)	4	(3.0)	染付	高台) 砂粒付着		2015	H27 梅色土
5	碗	(伊万里)	-	-	-	色鉛	古代	2009	H21-2
6	碗	(伊万里)	-	-	-	染付	古代	2009	H21-2
7	皿	(伊万里)	8.35	3.5	2.5	染付	古代	2018	H20-5 上層
8	碗	(伊万里)	3.4	(3.4)	-		古代	2018	H20-5 上層
9	萬叶	(伊万里)	6.6	4.9	6.2	上輪付	古代	2018	H20-5 上層
10	香炉	(伊万里)	10.9	9.5	6.5	染付		2018	H20-5 上層
11	碗	唐津	-	-	4.2	(3.2)		2015	H27 梅色土
12	碗	唐津	-	-	5.2			2015	H27 梅色土
13	碗	唐津	-	-	5.0	(3.0)	灰釉	17C	
14	碗	唐津	11.6	5.2	8	灰釉		2015	H27 梅色土
15	鉢	唐津	21	-	(7.15)		古代?	2018	H20-N
16	皿	唐津	9.7	4.3	22.7	灰釉		2018	H20-5 上層
17	皿	唐津	10.5	6.1	3.2	灰釉		2019	H1-51 下層
18	碗	瓶口美濃	-	-	-	灰釉		2012	H23-IB 刃鉾直上
19	碗	瓶口美濃	12.0	(2.0)	大貝			2015	H27 地山直上 黒褐色土
20	皿	瓶口	6.9	-	-	鉢		2016	H28 南東
21	搖籃口鉢	瓶口	-	-	-	灰釉	16c	2013	H24-2 下層
22	搖籃口	中國	-	-	2.6	染付		2015	H27 番1
23	碗	小明	-	-	7	(2.2)		2016	H28 南東
24	雙体鉢	肥前系	-	-	-		内: 薩摩	2012	H24-1B 黒色土
25	桂竹鉢	備前	-	-	-		内のみ(スリ) 布世土附	2014	H25 墓場灰色土
26	腰口鉢	越前	-	-	-			2016	H28 5902 上層
27	雙体鉢	越前	-	-	-		4字	2016	H28 5902 上層
28	粗面瓶	越前	-	-	-	鉢		2016	H28 5902
29	甕	越前	13.2	(17.5)	-	灰釉付着		2018	H20-5 上層
30	甕	越前	-	-	19	(7.8)		2018	H20-5 上層
31	甕	越前	-	-	18	(5.4)		2018	H20-5 上層
32	搖籃口鉢	越前	半明	-	(4)			2018	H20-5 上層
33	土師質瓶	□	9	2.7	2.2	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2016	H28 5902
34	土師質瓶	□	8.8	3.2	2.1	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-51 下層
25	土師質瓶	□	9.2	3	2.3	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-51 下層
36	土師質瓶	□	8.8	-	1.9	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-51 下層
37	土師質瓶	□	8.9	2	3	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-51 下層
38	土師質瓶	□	9.8	3	2.5	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-51 下層
39	土師質瓶	□	8.8	3.1	2.1	黄緑	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-51 下層
40	土師質瓶	□	8.8	3.6	2.1	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-51 下層
41	土師質瓶	□	12.6	4.1	2	灰釉	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-SK001
42	土師質瓶	□	-	-	-	灰白	内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2012	H23-1A 黒色土
43	土師質瓶	9.8	-	2	黄緑		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2012	H23-3 収管理尾
44	土師質瓶	9.85	3.05	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2012	H23-1B 黒色土
45	土師質瓶	12.7	-	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2013	H24-2
46	土師質瓶	16	(2.4)	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2015	H27 周色土
47	土師質瓶	16.0	(12.45)	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2015	H27 梅色土
48	土師質瓶	4-9	-	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2016	H28 陶裏
49	土師質瓶	6.9	-	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2016	H28 SP3803 上層
50	土師質瓶	12.9	-	-	黄緑		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2016	H28 SP3819
51	土師質瓶	18.3	3.4	2.45	灰白		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2017	H29 売店石積北側
52	土師質瓶	9	3.7	2.2	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2017	H29 売店石積南側
53	土師質瓶	11.1	(2)	-	黄緑		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2017	H29 売店石積南側
54	土師質瓶	8.2	(1.5)	-	灰白		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2017	H28 南西角 下層
55	土師質瓶	13.5	2	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2017	H28 南西角 下層
56	土師質瓶	11.3	7	2	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2018	H20-1 西5.3×~4m 円筒F
57	土師質瓶	4-9	-	-	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2018	H20-5 石呂2 所西側ビット
58	土師質瓶	9.3	-	2	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-1 390C 北東角
59	土師質瓶	9.9	-	2.1	灰釉		内) H21.ナデ. □) ナデ.	2019	H1-52 下層
60	土師質瓶	12.5	(1.7)	-	黄緑		内) H21.ナデ. □) ナデ. 備	2019	H1-1 390D1 黒褐色土
図版番号	器種	法量			整形・調整・その他	調査年	出土位置		
		口径	底径	高さ					
61	広口壺	土師器	-	-	-	網掛灰陶、波状紋	2012	H23-1B 表土	
62	蓋台壺	-	8.9	(6)	-	網掛灰陶、別蓋付	2016	H28 東部黒褐色土	
63	広口壺	土師器	-	-	-	網掛灰陶	2018	H20-5 各1の器	
64	壁口絵	土師器	-	-	-		2016	H28 石橋南 下層	

第3表 遺物觀察表（金属器）

図版番号	種別	材質	法量			調査年	出土位置	備考
			長	径	重さ			
67	鉄針	鉄	19	0.9	73.8	2018	H30-N 上層	
68	鉄針	鉄	19.2	0.9 × 0.9	151.0	2018	H30-N 上層	
69	鉄針	鉄	19.2	1.1 × 1	128.6	2018	H30-S 石列2南側	
70	鉄針	鉄	29.2	0.8 × 0.8	79.4	2019	R1-S2	
71	鉄針	鉄	19.9	0.95 × 0.8	77.9	2019	R1-S2	
72	鉄針	鉄	10.9	1	111.7	2018	H30-N 上層	
73	鉄針	鉄	6.85	0.6 × 0.5	11.6	2019	R1-S2 石列道上	
74	鉄	鉄	4.85	0.5	5.8	2019	R1-S2 石列道上	

第4表 遺物觀察表（錢貨）

図版番号	銘文	初期	法量				調査年	出土位置	備考
			径	内径径	孔径	重さ			
75	元祐通宝		2.35	1.8	0.5		2012	H23-1B 配管埋戻土	
76	洪武通宝		2.5	1.95	0.5		2012	H23-2 SP2310	
77	□和通宝		2.6	2.1	0.6		2012	H23-2 SP2310	

第5表 遺物觀察表（石瓦・石製品）

図版 番号	種類	法量			材質	調査年	出土位置	備考
		幅	縦	高さ				
78	軽瓦	(20)	16.3	12.7	明谷石：良財	2013	H24-2	
79	軽瓦	(11.6)	14	11.6	明谷石：良財	2015	H27 西側	四
80	軽瓦	(10.8)	14.7	14.4	明谷石：良財	2018	H20-S 上層	右二つ巴、一次加工痕有
81	軽瓦	(12.8)	14.7	13.7	明谷石：良財	2019	H1-S2 下層	四
82	瓦	(20)	14.5	9.0	明谷石：良財	2009	H21-1	
83	瓦	(16.8)	13.0	7.2	明谷石：良財	2009	H21-1	
84	瓦	(29.3)	0.0	0.0	明谷石：良財	2012	H23-1A	
85	瓦	(14.3)	14	10.2	明谷石：良財	2012	H23-1A	
86	瓦	(14.4)	14.5	10.4	明谷石：良財	2012	H23-1A	
87	瓦	(23.6)	15.4	9.5	明谷石：良財	2012	H23-1A	
88	瓦	(18.7)	13.0	11.7	明谷石：良財	2012	H23-1A	
89	瓦	(21.7)	15.1	9.8	明谷石：良財	2012	H23-1A	
90	瓦	(17.4)	13.0	12.9	明谷石：良財	2012	H23-1A	
91	瓦	(31.2)	14.5	9.3	明谷石：良財	2012	H24-2	
92	瓦	14.9	14.3	11.2	明谷石：良財	2013	H24-2 上層	西方に仕口
93	瓦	(17.3)	14.4	11.8	明谷石：良財	2013	H24-2 中層	
94	瓦	(15.4)	12.5	11.1	明谷石：良財	2013	H24-2 中層	
95	瓦	(22)	12.9	0.7	明谷石：良財	2014	H25 黒褐色土	
96	瓦	(33)	13.7	11.2	明谷石：良財	2015	H27 黒褐色土	
97	瓦	(28.8)	14.6	10.35	明谷石：良財	2015	H27 東	
98	瓦	(24.2)	14	7	明谷石：良財	2015	H27 西側	
99	瓦	(22.8)	15.8	11.6	明谷石：良財	2015	H27 西側	
100	瓦	(37.7)	14.5	7.1	明谷石：良財	2015	H27	
101	瓦	(20.4)	14.3	12.2	明谷石：良財	2015	H27	
102	瓦	(20)	16.2	10.4	明谷石：空心不良	2015	H27 西側	
103	瓦	(28.3)	14.6	11.2	明谷石：良財	2015	H27	
104	瓦	(24.3)	14.5	11.1	明谷石：良財	2016	H28 南東角	
105	瓦	(31.4)	17.8	6.7	明谷石：良財	2016	H28 SK03	
106	瓦	17.4	15.6	11.2	明谷石：良財	2017	H29-1 SK04	西方に仕口
107	瓦	(16.9)	14.9	0.63	明谷石：良財	2018	H30-1 上層	
108	瓦	(15.8)	13.5	8.4	明谷石：良財	2018	H30-5 上層	二次加工痕有
109	瓦	(26.8)	13.9	10.29	明谷石：良財	2018	H30-1 上層	
110	瓦	(34.6)	14.2	11.7	明谷石：良財	2018	H30-N 上層	
111	瓦	(28.5)	15.5	11.6	明谷石：良財	2018	H30-N	
112	瓦	(27.4)	13	0.67	明谷石：良財	2018	H30-N	
113	瓦	(34.2)	13.9	0.89	明谷石：良財	2018	H30-N	
114	瓦	(16)	14.5	11.2	明谷石：良財	2019	H1-S1 中層	
115	瓦	(36.3)	16.6	9.3	明谷石：良財	2019	H1-S1 下層	
116	瓦	(27.6)	14	9.3	明谷石：良財	2019	H1-S1 下層	
117	瓦	(17.1)	14.6	10.61	明谷石：良財	2019	H1-S1 下層 石板抜取跡付近	
118	瓦	29.8	13.7	10	明谷石：良財	2019	H1-S2 下層	
119	瓦	(34.4)	14.6	11.20	明谷石：良財	2019	H1-S2	
120	瓦	(29.1)	13.6	10.5	明谷石：良財	2019	H1-S2 上層	
121	瓦	(16.8)	13.2	0.53	明谷石：良財	2019	H1-S2	
122	瓦	48.3	14.5	110.23	明谷石：良財	2019	H1-S2	
123	軽瓦	(15)	16	6.2	明谷石：良財	2018	H30-5 上層	
124	軽瓦	(17.5)	15.2	10	明谷石：良財	2018	H30-5 上層	
125	軽瓦	(29.9)	31.3	7.3	明谷石：良財	2018	H30-N 上層	
126	瓦	(21.8)	21.1	4.9	明谷石：良財	2013	H24-2 上層	
127	瓦	(20.5)	17.4	3.1	明谷石：良財	2013	H24-2 下層	
128	瓦	(18.1)	13.6	10.5	明谷石：良財	2013	H24-2 下層	
129	瓦	(20.1)	19.6	2.7	明谷石：良財	2013	H24-2 上層	
130	瓦	(25)	19.1	5.1	明谷石：良財	2014	H25 黒褐色土	
131	瓦	(25.1)	23.3	4.7	明谷石：良財	2015	H27 桃色土	
132	瓦	(17.5)	128.9	5.9	明谷石：良財	2015	H27 西側	
133	瓦	(25)	31.1	2.7	明谷石：良財	2018	H27 西側 灰褐色土	
134	瓦	(29.5)	29.9	3.9	明谷石：良財	2016	H28 南東角	
135	瓦	(34.5)	3.9	(20)	明谷石：良財	2016	H28 南東角	
136	瓦	(25.2)	19.0	4.6	明谷石：良財	2017	H29-1 上層	
137	瓦	(20)	21.2	3.1	明谷石：良財	2017	H29-1 上層	
138	瓦	(16.7)	126.4	6.2	明谷石：良財	2018	H30-1 上層	
139	瓦	(31)	126.5	2.7	明谷石：良財	2018	H30-N 下層	
140	瓦	(27.1)	122.9	3.1	明谷石：良財	2018	H30-N 下層	
141	瓦	(33.9)	26.8	6.6	明谷石：良財	2019	H1-T	
142	瓦	(30.1)	136.4	4.5	明谷石：良財	2019	H1-T 南東上層	
143	瓦	(29.9)	122.3	3.2	明谷石：良財	2019	H1-S2 石板西下層	
144	瓦	(19.8)	125.8	4.5	明谷石：良財	2019	H1-S2 石板西下層	
145	瓦	(16)	130	3.1	薄壁灰岩：良財	2019	H1-S2	
146	瓦	(16.7)	122.4	4.6	明谷石：良財	2017	H29-1 上層	
147	軽瓦	(15.7)	122.4	4.6	明谷石：良財	2015	H27 桃色土	
148	瓦	(29.5)	11.9	8.9	明谷石：良財	2015	H27 桃色土	
149	瓦	(19)	12.1	8.9	明谷石：空心不良	2016	H30-1 上層	
150	瓦	(69.3)	12.2	9.5	明谷石：良財	2019	H1-S1 上層 石板抜取跡付近	
151	軽瓦	(24.1)	19.8	110.9	明谷石：良財	2019	H1-S1 上層 石板抜取跡付近	
152	瓦	(19.2)	18.7	7.6	明谷石：良財	2019	H1-S2 石板西下層	
153	軽瓦か？	(31.2)	44.3	6.2	明谷石：良財	2018	H24-2	
備考	種類	計量	幅	縦	材質	調査年	出土位置	備考
154	想似?	(14.9)	(25.6)	22.9	明谷石：良財	2013	H24-2	内面窓付
155	想似	(14.9)	(26.2)	14.2	明谷石：良財	2015	H27 桃色土	
156	不明石製品	(27.7)	(26.2)	14.2	無鉱石	2019	H1-S1 中層	

第5章 総括

城郭としての丸岡城は、明治以降に民有化を契機として市街地化が進んだ。結果、内堀は埋め立てられて遺構は天守のある城山を残すのみとなった。城山についても昭和初期の桜の植樹を皮切りに、公園としての整備が進められ、城郭としての遺構は天守のみと思われがちであったが、調査の結果広い範囲で遺構が残っていることがわかった。ここで、令和元年度までに実施した発掘調査の成果について整理したい。

遺構

隠居曲輪及び内堀の調査成果から

本丸のある城山周辺は市街化が進んでいる。調査することができたのは内堀西端の一部、隠居曲輪の北西角から北側石垣の一部である。いずれの調査区においても石垣を検出している。内堀で検出した石垣は三ノ丸側にあたり、他の城郭においては本丸側に比べて低い石垣を積むのが一般的で、丸岡城においても同様に、内堀の三ノ丸側は1.2m程度の高さに積まれ、石積に残った痕跡から堀の水深は約50cm程度であったと推定され、出土位置も絵図と合致する。隠居曲輪については明治以降も公共用地として利用されていたため、内堀西端の石垣は道路計画と建物建設による影響を免れていった。石垣は、明治以降も露出していた石垣①と石垣③は積み直し修理が適宜実施されていたと考えられるが、地中に埋まっていた状態の石垣②が絵図とも合致することから、江戸期から明治期まで隠居曲輪の繩張り形状が維持されていたことが分かった。こうした調査成果から、二ノ丸は石垣の痕跡等が良好に残っており、発掘調査成果と絵図との整合性を確認することができる。今後さらに調査範囲が広がることで、絵図と遺構が照合できる範囲が広がることを期待したい。



第58図「正保城絵図のうち、越前国丸岡城之絵図
(国立公文書館蔵)」

本丸の建物跡について

本丸は「正保城絵図のうち、越前国丸岡城之絵図(国立公文書館蔵)」のほか、明治期に描かれた「越前国坂井郡丸岡霞之城(霞城之図)(霞城之影掲載)」でも本丸以外に建物があったことが表現されている。遺構面は現在の砂利整地層の直下で残っている。ただし近代以降の各種工事等によって大きく擾乱を受けている。調査によって複数のピット、土坑を検出し、溝状の石積み遺構も検出している。ピット群については江戸時代まで遡るものも含め、明治時代に建てられた長昌庵の建物や近代以降の公園整備に伴う構造物の痕跡も含まれると考えてよい。第62図に示すピット、土坑は概ねN50°WからN60°Wの範囲で傾いている。この傾きが溝状の石積み遺構と平行もしくは直交に近い関係にあることから、これらは本丸に所在した一連の構造物と考えられる。本丸に所在した建造物は絵図によって「御殿」、「家」、「番代所」などと表記されており、規模のわかる図面は現在のところ確認されていない。

本丸で出土している遺物をみると、土師器は灯明皿が多く、Bb類が占めている。陶磁器は伊万里や唐津といった肥前系の17世紀代の遺物が出土している。遺物の年代は16世紀後半から17世紀代と、城郭が整備された時期に集中している。碗や擂鉢、甕といった生活雑器が出土していることから、人が常駐するような施設であったと考えられる。丸岡藩は元禄8(1695)に藩主が本多家から有馬家に代わっている。出土遺物が17世紀代までにまとまっているのは、有馬家入封以降に本丸の利用形態が変化した可能性を考えられる。

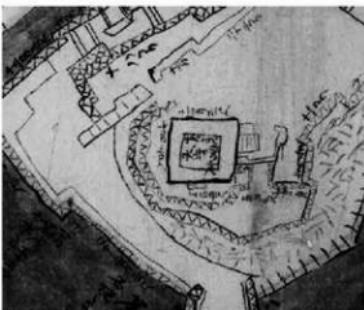


第59図 越前国坂井郡丸岡城之絵図
(『霧城之影』掲載)。

天守台について

天守台周辺では合計6本のトレチを設定した。天守台北東角の調査によって天守台が岩盤の凝灰岩に掘方を作り、根石を据えていることが確認できた。なお、天守台北側は福井地震とその修復の過程で岩盤層直上まで搅乱を受けたと考えられ、天守台石垣もその際に積み直された可能性が高く、北トレチで確認された岩盤層に直接根石を据える技法は本来の石垣構築時のものではない可能性を考慮したい。

一方で南面では新たな石垣を検出している(第63図)。「円陵略」では南面に小さな石垣が描かれ、天守台平面形は現在のものと異なる。昭和15年ごろに撮影された写真では南面に張り出した石垣が写っている。昭和15~17年に作成された実測図によると、石垣の規模は東西5m、南北1.2m、高さ2mである。これは平成29年度調査トレチで検出した第1石列の位置と合致する。よって、第1石列は本来石垣で、天守台構築当初からではなく、後補によるものと考えられる。さらに、平成29年度調査で検出した第2石列及び令和元年度調査で検出した石垣は天守台南面から南に3.5m、幅8m以上で、こちらは天守台の石垣と噛み合っていることから天守台構築当初まで遡ると考えて良い。現在の天守の木造部分については寛永期のものであるが、天守台については慶長期以前まで遡る可能性が指摘されている(2019、坂井市)。今回検出した石垣が天守台構築当時のものであるならば、当初の天守



第60図 丸岡城略図(「円陵略」)



第61図 昭和15年頃撮影天守台南面

は現在のものとは異なる平面形状をしていたことになる。つまり、検出された石垣は現在のところ明らかになっていない現存天守以前の天守の姿を推定する材料になるのである。

また、この石垣の南側に直径約60cmの礎石が等間隔に5カ所以上並んでいることが確認された。礎石の大きさから考えて、大規模な建物があった可能性が考えられる。3031からは土師器片と鉄釘が出土している。RI-S1トレーナーのビットは石垣掘方にかかっていることから、石垣と礎石には時期差が想定できる。

石垣

調査の過程では各調査地で石垣を検出している。これらについて若干の考察を述べておく。検出された石垣で新しいか、近代以降に修復改変を受けている石垣は内堀西側地点、平成26年調査地の石垣①と石垣②が想定される。平成28年度調査地の石積遺構のうち、北側の石垣には地山石の裏込めがなされているのに対し、南側の裏側には裏込め石が少なく、明らかに工法が異なることから、時期が異なる恐れがある。当初は北側の石垣だけで、後で南側の石垣を積んで底部に石を並べたために溝状の遺構になった可能性がある。

天守台南側の石列2は、天守台構築当初まで遡る石垣の基底部と考えられるが、小口に横幅50cm程度、奥行き約80cmで、控え奥側ですばまる石材を控え側が低くなるように据えている。同様の据え方は、平成26年度調査地の石垣③でも見られ、石材のサイズはやや大きいが、石の据え方がよく似ている。仮に、両者が同時期とするならば、隠居曲輪の繩張整備時期は寛永期以前で、城郭整備の初期段階からのものと考えられる。丸岡城の繩張は正保期以降はほぼ変化していないことは絵図からも読み取れる。一方で柴田氏から今村氏までの繩張については明らかではない。本丸の造成過程と併せて、丸岡城郭の変遷を追うことができるのではないか。

遺物

石瓦

発掘調査で出土した遺物のほとんどが石瓦である。笏谷石製瓦を葺いた建物で現存しているのは丸岡城天守、正覚寺山門（註1）、丹巖洞、高野山の松平秀康及び同母靈屋（註2）がある。出土例をみると、北庄城、越前府中城、東郷横山城、楞嚴寺、金沢城北ノ丸がある。丸岡城天守は江戸時代を通じて修理をしながら、笏谷石製本瓦葺きを維持してきた貴重な事例である。

丸岡城天守の石瓦導入は、金沢城北ノ丸（御宮）と近い寛永20（1643）頃と推定している（2019、坂井市）。江戸期の屋根修理歴は、享保2（1717）年・三層屋根、明和2（1765）年・初重屋根葺き替え工事、文化9（1812）年・三層屋根外壁全て修理、嘉永6（1853）年・初層屋根及び外壁修理で、昭和15～17年の修理工事で大幅に石材が滻ヶ原石製に変更された。筆者は「丸岡城天守学術調査報告書」において、石瓦の年代を4期に区分した（註3）。4期は滻ヶ原石製で、昭和15～17年修理工事時に大幅に取り換えたものであることから、本報告では主に4期以外のもので、残りの良いものを掲載している。石瓦は粘土瓦と違って二次加工やサイズダウンが可能である。丸瓦の81、114にみられるように、短く切断した石瓦は修理に際して再加工したものであろう。これらは加工された時点は2期以降であるが、導入されたのはそれ以前と考えてよい。また、92、106、108は丸瓦の両側に連結部を持つことから、修理時に新規製作されたか、転用して補充されたものと考える。このように4期までの屋根はいくつかの時期の石瓦が混在した状態であったと考えてよいだろう。

また、天守に使われていた石瓦以外に、150のような棟瓦が出土している。第4章でも述べたように、

高野山の松平秀康靈屋の屋根に使用例を求める事ができる。松平秀康靈屋の屋根は入母屋造で、同種の石瓦が隅棟に使用されている事から、150も同様に隅棟に使用されていたと考えれば、近い規模の入母屋造か寄棟造建物があったと考えられる。

天守以外の石瓦や建築資材が出土することで、本丸の景観を復元するうえで重要な手掛かりとなる。今後さらなる成果に期待したい。

弥生土器

本丸東側で検出した黒色土層からは、弥生時代の広口壺片、器台脚部が出土している。このことから城山には弥生時代の墳丘墓があつたことが想定される。

まとめ

丸岡城の城郭の範囲は、内堀の範囲内で約83,000m²、外堀・城下町を含めると約50万m²を超える。このうち、本書で報告した発掘調査面積は525m²で、内堀の範囲内と比較してもわずか0.6%にしかならない。

しかしながら、得られた成果は大きく、縄張り形状は各所で地中に保存されている状態である事が分かった。また、天守台周辺の調査で検出した石垣は現存天守以前のものであり、想定されている寛永期以前の丸岡城天守の姿を知るうえで重要な成果である。

以上のように、城山だけでなく内堀の範囲内においても遺構が良好に残っており、今後の調査によって江戸期の丸岡城郭だけでなく、江戸期以前の初期丸岡城郭の姿も明らかになってくることを期待したい。

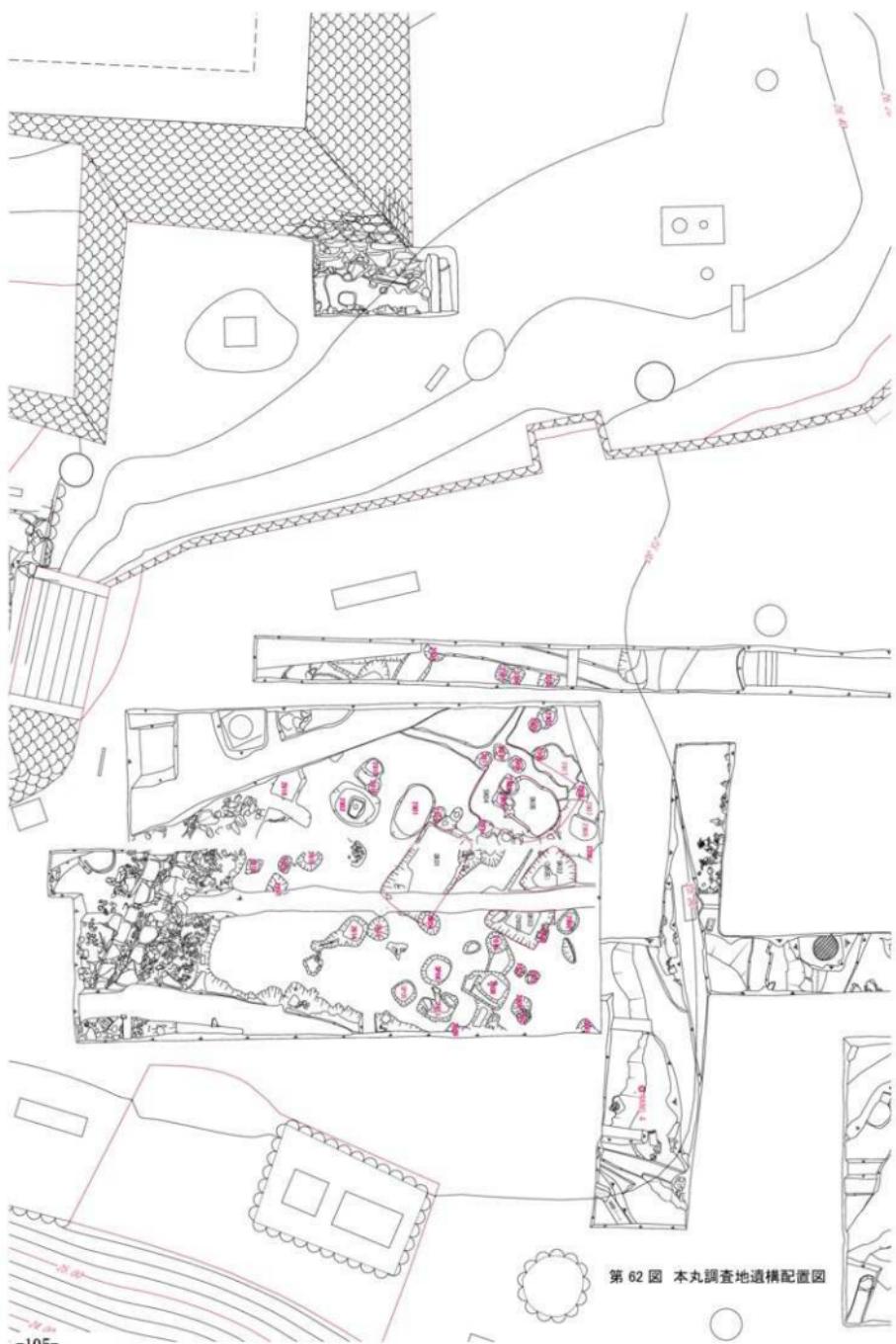
註1 福井県越前市所在。越前府中城から移築されたとされる。

註2 雪廟建築で柱や壁まで笏谷石を使用している。

註3 1期：石瓦導入当初 2期：18世紀修理時 3期：19世紀修理時 4期：昭和修理時

参考文献

- 2009 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター『福井城跡 - 北陸新幹線福井駅建設事業に伴う発掘調査 -』福井県埋蔵文化財調査報告第109集
- 2016 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター『越前焼総合調査事業報告書』「福井県教育厅埋蔵文化財調査センター所報6」
- 2014 福井県教育厅埋蔵文化財調査センター『福井城跡 - JR北陸線外2線連続立体交差事業に伴う調査 -』福井県埋蔵文化財調査報告第146集
- 2017 富原道晴『富原文庫蔵 陸軍省城絵図一明治五年の全国城郭存廃調査記録』
- 2019 中原義史『福井城跡の土師器皿-16世紀末~17世紀-』『平成30年度環日本海文化交流研究集会 北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相 -城下町とその周辺遺跡の土師器皿(かわらけ)を中心に-』公益財团法人石川県埋蔵文化財調査センター
- 2019 石川県金沢城調査研究所『金沢城跡 - 本丸附段・北ノ丸 -』金沢城史料叢書35 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書12
- 2002 乗岡実『岡山城三之丸曲輪跡 表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会
- 2019 坂井市教育委員会『丸岡城天守学術調査報告書』
- 2020 坂井市教育委員会『丸岡城学術調査資料集第1集 - 昭和15~17年修理工事関係資料 -』
- 2019 国京克己『越前丸岡城の門遺構調査報告書』
- 2019 吉田純一『丸岡城～ここまでわかつた！お天守の新しい知見と謎～』坂井市文化課丸岡城国宝化推進室



第62図 本丸調査地遺構配置図



第 63 図 天守台南側構造配置図

0 2m

丸岡城跡地形測量図

本図は平成 26 年度に日本海航測株式会社に委託して実施した丸岡城跡地形測量業務の成果品を、本書に掲載するためにリサイズしたものである。

AO 判、1/50 で作成したものを A3 判に納まるよう調整した。

縮尺及びスケールは各図に付した。



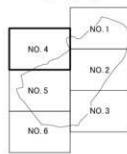


丸岡城跡平面図 NO. 2





図 部 割



凡 例



0

S=1/250

50m

丸岡城跡平面図 NO. 4

-114 - 115 -

Y=242481000

Y=242481000

Y=242481000

Y=242481000

Y=242481000

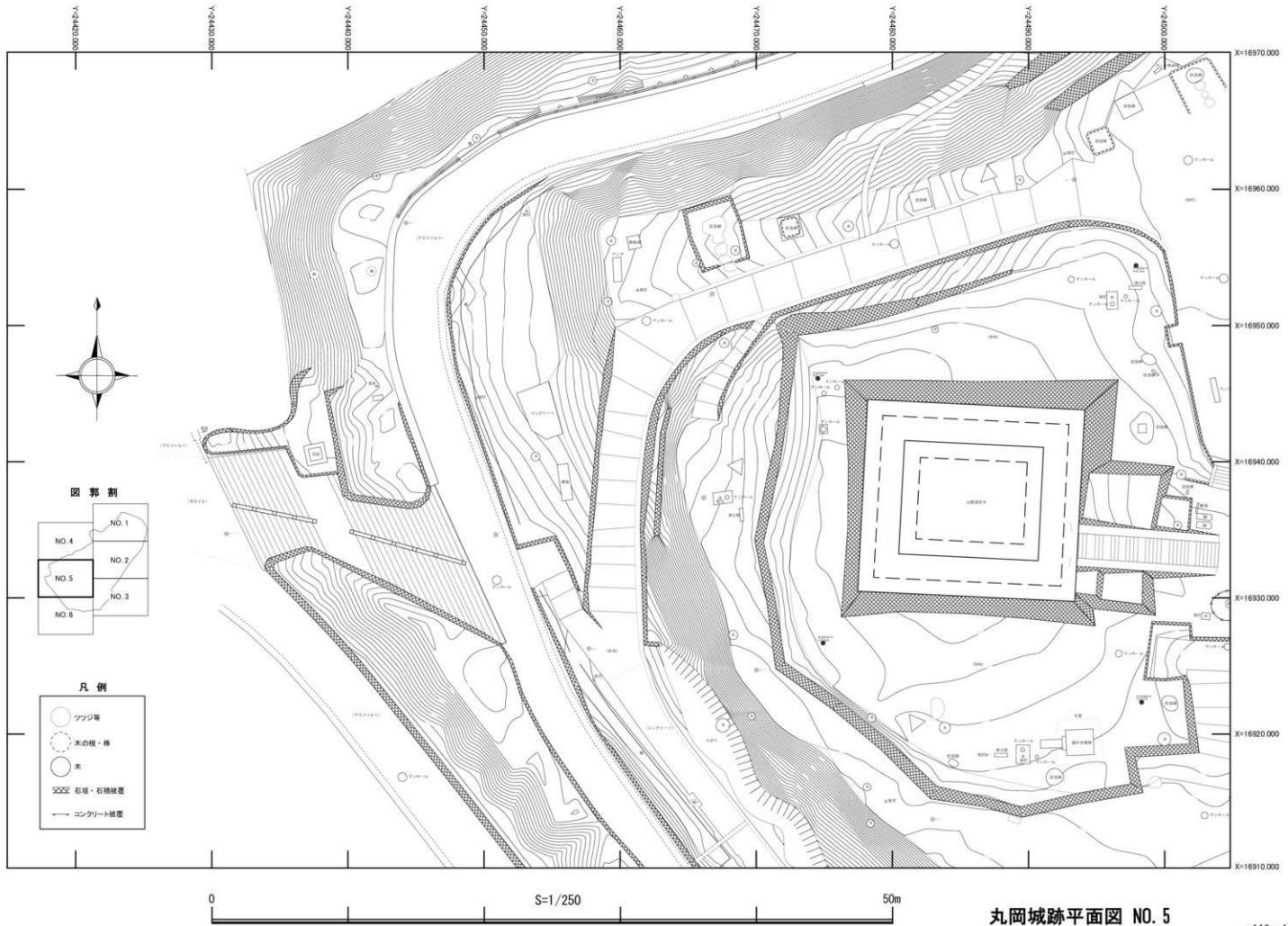
Y=242481000

Y=242481000

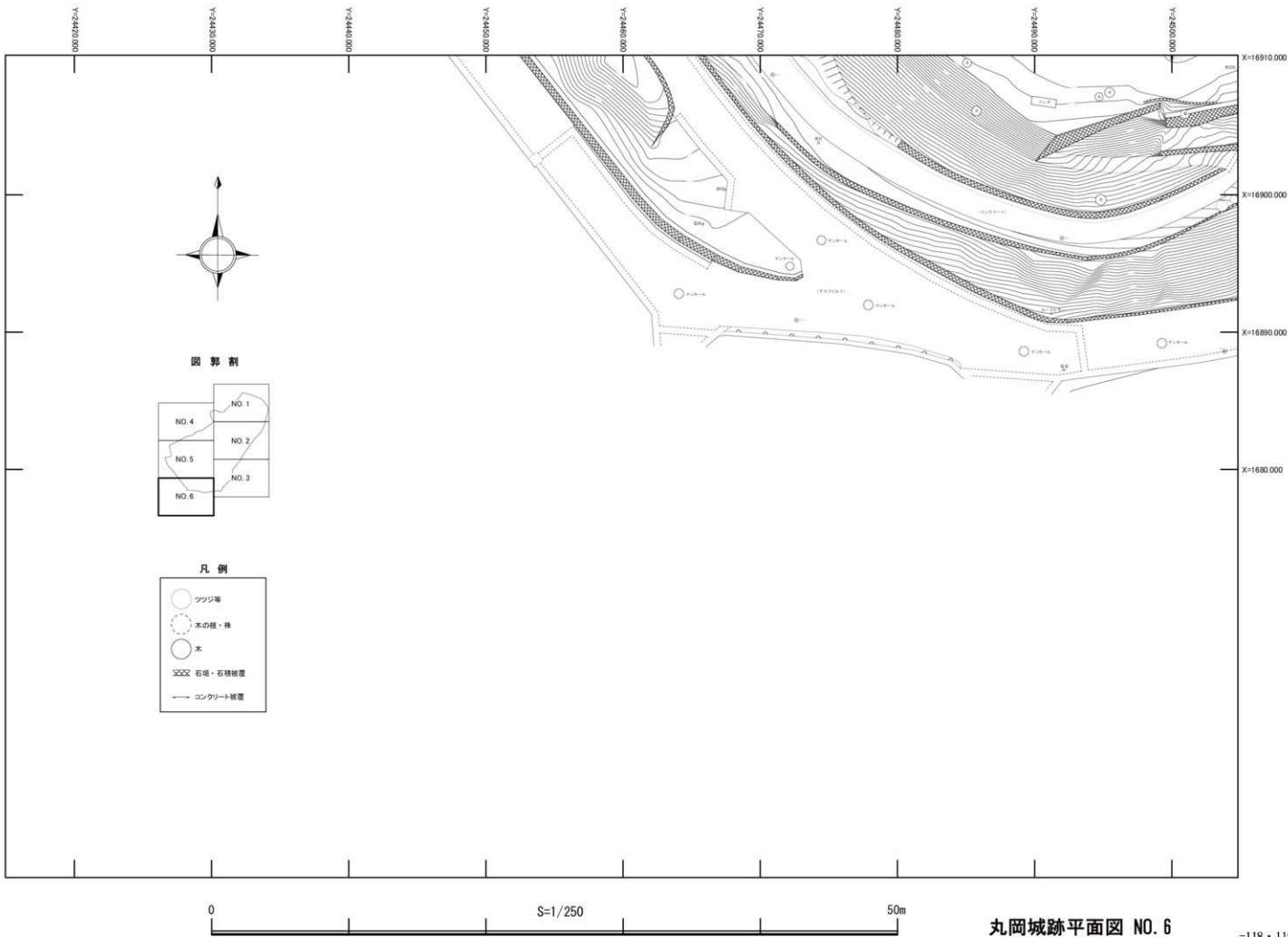
Y=242481000

Y=242481000

X=17030.000
X=17020.000
X=17010.000
X=17000.000
X=16990.000
X=16980.000
X=16970.000



丸岡城跡平面図 NO. 5



写 真 図 版

図版第一 遺構



(1) H21-1 トレンチ石仏及び裏込め積出状況



(2) H21-1 トレンチ完掘



(3) H21-2 トレンチ完掘



(4) H21-1 出土石仏



(1) H22 完掘状況南から



(2) H22 検出石垣北側



(3) H22 検出石垣南側



(4) H22 北壁土層断面

図版第三
遺構



(1) H23-1A トレンチ完掘東から



(2) H23-1A トレンチ完掘西から



(3) H23-1B トレンチ完掘北から



(4) H23-1B トレンチ完掘南から



(1) H23-2 完掘北から



(2) H23-2 土層堆積状況



(3) H23-3 完掘状況前景



(4) H23-3 完掘状況南から



(1) H24-1 完掘状況東から



(2) H24-1 完掘状況南から



(3) H24-2 上層石瓦敷き詰め状況南から



(4) H24-2 完掘状況南から



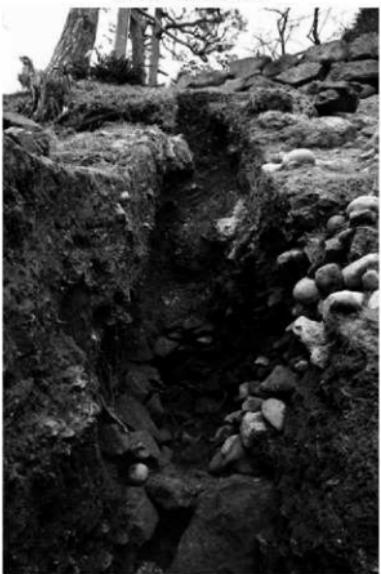
(1) H25-2 完掘状況西から



(2) H25-1 完掘状況西から



(3) H25-1 堆積状況



(4) H25-1 裏込め



(1) H26 西側前景



(2) H26 西側石垣北西隅部



(3) H26 東側石垣検出状況東から



(4) H26 東側石垣検出状況西から



(1) H26 東側石垣



(2) H26 東側石垣西から



(3) H26 西側拡張区



(4) H26 東側南北拡張区土層堆積状況



(1) H27 東側 東から



(2) H27 西側 西から



(3) H27 北側 南から



(4) H27 南側 北から



(1) H28 調査地全景北から



(2) H28 調査地全景南から



(3) H28 石積遺構西から



(4) H28 南西角越前焼甕出土状況



(1) H29 調査地全景北から



(2) H29 調査地北側 西から



(3) H29 調査地南側 北西から



(4) H29-2 全景



(1) H30-I 完掘状況西から



(2) H30-I 完掘状況東から



(3) H30-S 完掘状況南から



(4) H30-S 完掘状況北から



(1) H30-S 石列 南から



(2) H30-S 石列 北から



(3) H30-N 完掘状況南から



(4) H30-N 完掘状況北から



(1) R1-I 完掘状況全景 東から



(2) R1-I 完掘状況全景 南から



(3) R1-I 完掘状況全景 西から



(4) R1-S1 完掘状況 北から



(1) R1-S1 完掘状況



(2) R1-S2 完掘状況 北から



(3) R1-S2 完掘状況 南から



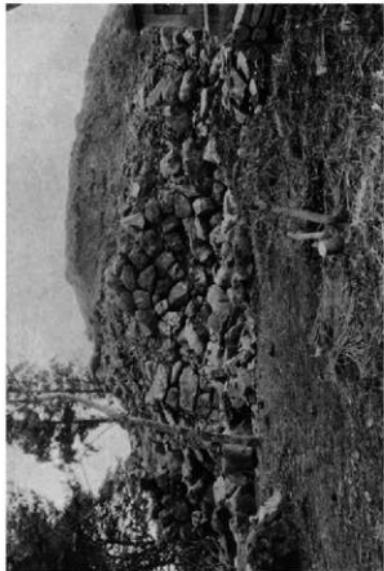
(4) R1-S2 石垣 西から



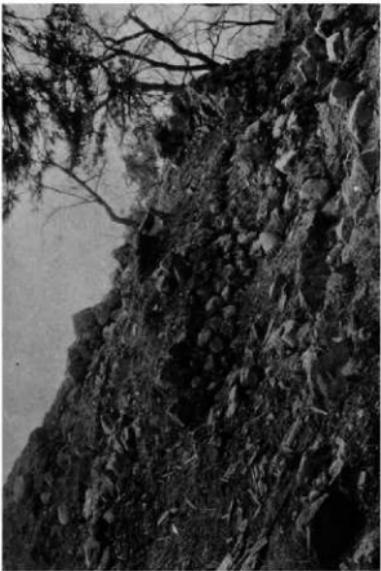
(1) 竹原写真石垣転用石材



(2) 竹原写真南面(部分)



(3) 昭和 23 年福井地震後天守台

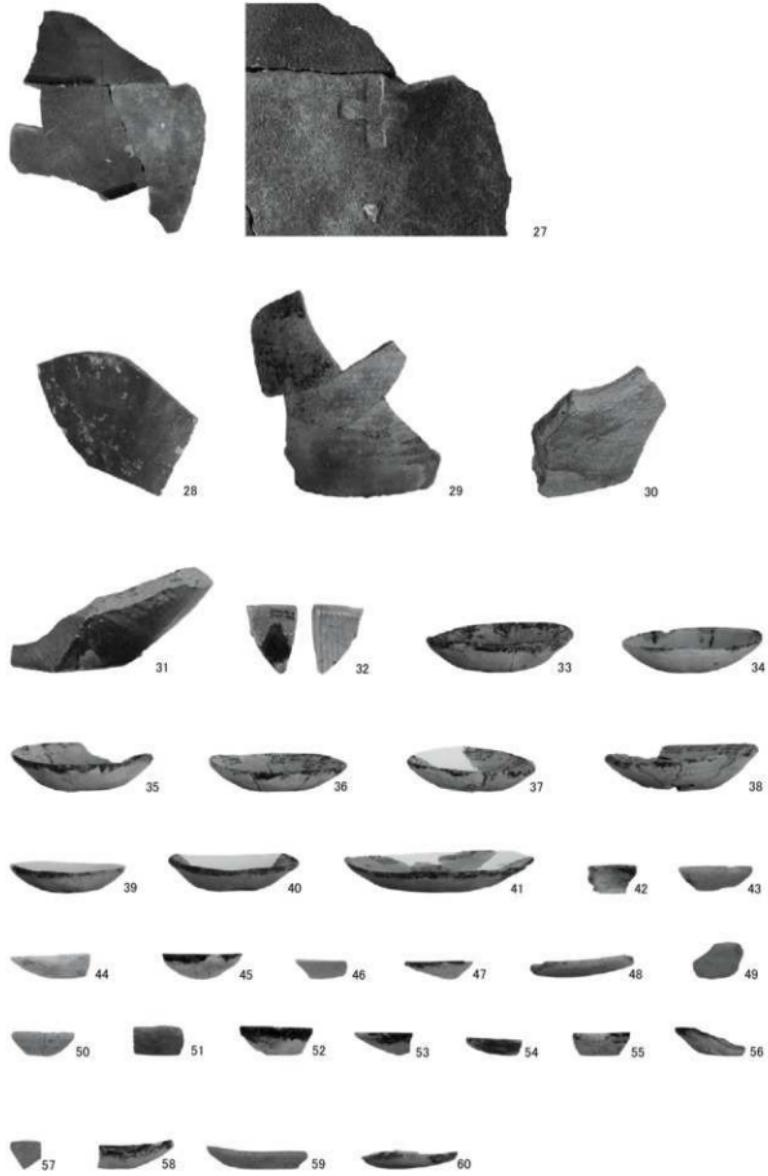


(4) 昭和 23 年福井地震後天守台

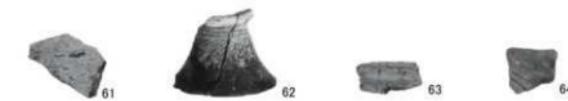
圖版第十七 遺物



図版第十八 遺物



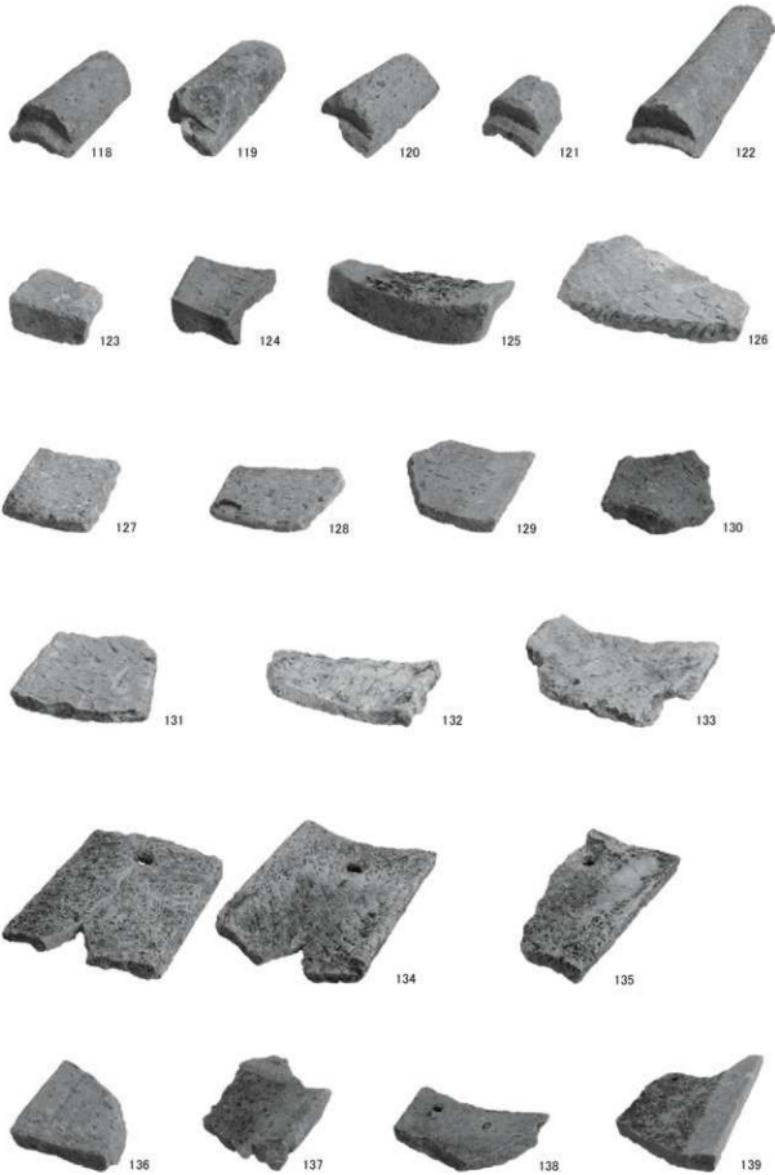
図版第十九
遺物



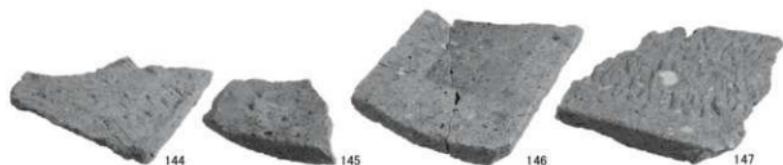
図版第二十 遺物



図版第二十一
遺物



図版第二十二 遺物





154



155



156



平成 28 年度調査地出土 越前焼壺

報告書抄録

丸岡城発掘調査報告書

丸岡城跡

令和3年(2021)3月

編集・発行 坂井市教育委員会 文化課

丸岡城国宝化推進室

〒910-0231

福井県坂井市丸岡町霞町1-41-1

TEL:0776-50-2270

印 刷 株式会社 ワタナベ印刷